569-61
1200501546304

世界大衆文學全集

カルメン
コロンバ
他三篇

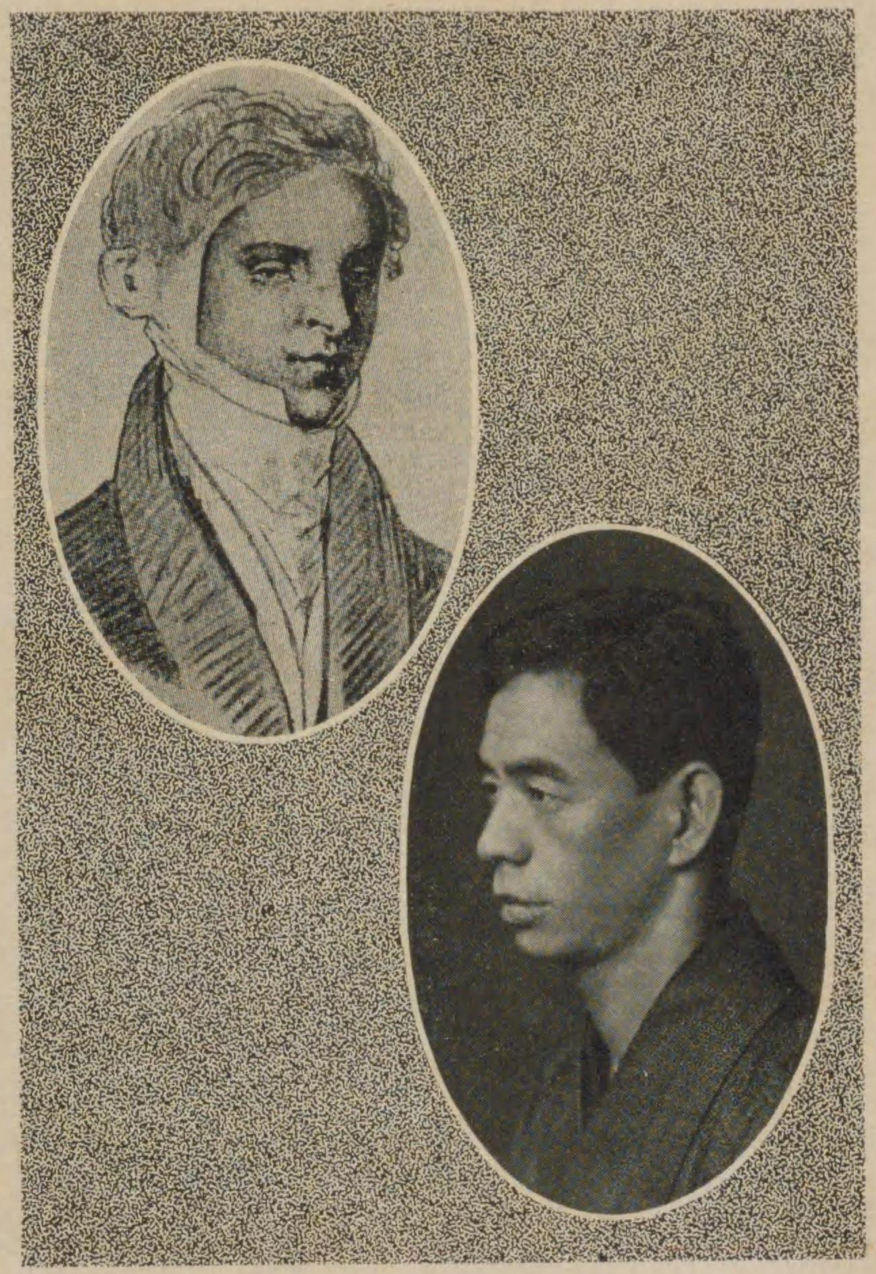
宇高伸一

改造社

569
61

I種
W

1200501546304



上著者　　下譯者

はしがき

プロスペル・メリメエ（一八〇三―一八七〇）は巴里で生れ、官吏として商務省や文部省に奉職し、ナポレオン三世の皇后の推擧によりて宮中に仕へ、また上院議員に選ばれたりした。

彼の作品には屢々考古學や言語學に一見識を持つ旅行家がその脇役または紹介者となつて描かれてゐるが、それは作者が優れた考古學者であつたから、自らを作品の物語の中へ織り込ませ、事件や情緒や氣分を主觀的にまた客觀的に描破して、立派な效果を擧げたものので、當時に於ける文體としては獨特のものであつたかと思はれる。

譯者はメリメエを以つてむやみに貴族的な臺閣上の作家であるが如く見做す人の考には與みし得ない。讀者は作者によつて指導せられるよりも、より多く作者が讀者から指導を受くべきものだと考へてゐるからである。從つて、こゝに飜譯した五編に盛られた大牢の滋味は必ず讀者の最大多數が味はつて下さるものと信じてゐる。

それから――これは作者にも讀者にも何等の關係の無いことだけれど、日本でカルメンに扮する女優は兎角祟りを受けると言ふ話を聞いたことがあつた――松井須磨子然り、中

山歌子然り——と。それかあらぬか私は本書の第五篇の鬼氣人に迫るやうな女神像を譯してゐる三月十一日に生母に逝かれた。私が十歳の時まで鐘愛を蒙つた掛け換への無い生母でありながら、私は兎角孝行らしい務めもつくさないで來た。いまさら、どうすることも出來ないとは言ふものゝどう考へて見ても寢覺めがよくない。で、その阿母さんが享けて下さるものなら、この書を靈前に喜んで捧げたいと思つてゐる。

一九三〇・四・一〇

上根岸の寓居にて

宇高伸一

目次

カルメン……五
コロンバ……九七
ロキス……三一三
花瓶……三九七
女神像……四三七

カルメン

カルメン

女は怒り易い。すなほな時は二度だけ。
一度は閨房の中にゐる時で、もう一度は墓の下へ入つた時。

——パラダス——

一

私は地理學者達がムンダの古戰場を、マルベラの北方數里を隔たつた現今のモンダに近いバステュリ、ボエンの國内だと決定した時に、彼等がどんなことを言つたのだか知らないから、いつもそれに疑を抱いてゐた。西班牙戰爭の匿名著述家の古文書とオシュエナ公爵の優秀なる文庫の中にて蒐集した資料を渉獵して、私自身で得た調査によると、この記念すべき古戰場こそはモンティラの圈内に求めるのが至當であつて、シイザアはそこで共和國の選手共を向うに廻はして、最後の延るか反るかの一快戰を演つたものと推斷せられた。私は千八百三十年の秋の初めの頃アンダルシアに出懸けたから、その頃も猶ほ私の心に殘つてゐたこの疑問を一掃したいと考へて、割に長期の調査旅行をした。近日私が出版する一册子は總ゆる正直な考古學者の腦裡からこれらの不安を拭ひ去ることが出來ると信じてゐる。その私の論講が總ての歐洲の科學界に懸案となつてゐるこの地理學上の問題を一擧に解

決してくれるまでの間に、さやかなお話を私はこゝに述べたいと思ふが、その話はムンダの位置を決めるといふ興味ある問題に對しては、毫も何等かの偏頗な見界を容れさせないであらう。

私はコルドヴで一人の案内人と二頭の馬を傭ひ、「シイザア註釋」一册と二三の着換への襦衣だけの荷物で旅程に上つた。或日カチエナ平原の高地を彷徨ひながら、疲れて、渴いて、太陽の直射にヂリヂリと照りつけられて、シイザアもポムペイの倅共も惡魔にでも吳れつちまへと思つてゐる矢先、行く手の小徑から程遠からぬ處に燈心草や蘆が點々としてゐる綠の芝生が見えて來たので、泉が近くにあるなと解つた。近づいて見ると、芝生と見えたのは果して沼澤であつて、そこには、カルヴ山脈の扶壁を成してゐる高い二つの峰に挾まる峽谷から流れ出てゐるらしい一條の溪流が注ぎ込んでゐた。そこで私はもう少し遡つて行くと、恐らくは丸石の間に更に澄んだ新鮮な水が流れてゐて、こゝよりは水蛭や蛙の少ない、さゝやかな岩蔭が見附かるだらうと考へた。峽谷の入口まで來ると私の馬が嘶いた。と、姿こそ見えないが、もう一匹の馬が直ちにそれに應へて嘶いた。

約百歩も登つた時峽谷は忽ち開けて自然が造つた天然の一種の圓形劇場が現れて來た。そしてそこは全然高い斷崖に圍繞かれてゐて陽が少しも映してはゐなかつた。旅行者がこれ以上の氣持のよい休息場に出逢ふことなんてあることではない。そゝり立つた岩の根からは泉が湧き出て泡立ちながら雪白の砂を敷いた盆地に流れ落ちてゐた。五六本の美しい青々とした樫の樹がこゝではいつも風など受けたことはないらしく、泉の水に濕ほひ蘆くと延び立つて、それの繁つた葉蔭を水面に落してゐた。

また盆地を圍繞んで、艶々した草が一面に豐かに生え茂つてゐて、こゝら十里界隈のどこの宿屋に行つても迎も見當らない上等の寢床を提供してゐた。

だが、この心ときめく休息場を發見するの光榮に浴し得たのは私一人ではなかつた。一人の男が既にそこに憩んでゐたのだ。そして、私が侵入した時には疑ひもなく晝寢をしてゐたのだ。馬の嘶きに覺めた彼は立ち上つて彼の馬の傍に行つた。その馬は主人の午睡の間を利用して周圍の贅澤なる草の御馳走に有り附いてゐたのであつた。彼は中脊ながら頑丈作りの青年で、暗い不屈な面魂を帶び た顏は、嘗ては美しかつたであらうが、今は陽に燒けて髮毛よりも黑くなつてゐた。彼は片手で馬の轡をとり片手では眞鍮の口徑の大きな小銃を取り上げた。正直に言ふと、私はその小銃とこの獰猛な彼の顏を見た時には最初は冷つとした。だが、噂さだけでこれまで一度もお目にかゝつたことのない山賊の存在を私は信じてゐなかつた。且つ、私は正直な農夫達でも市場へ出掛るには全身武裝してゐるのを澤山見てゐたのだから、單に小銃を持つてゐると決めてしまふには證據不充分だ。それから二三枚の着換の襦衣とエルゼヴィル版のシイザア註釋一册しか持たない私から何を奪ることが出來るのだい？　と考へた。

そこで私は氣輕くこの小銃を持つてゐる男に挨拶をして、折角の晝寢のお邪魔をしたのではないでせうかと微笑しながら尋ねた。何とも返答をしないで、彼は私を頭の先きから足の爪先きまで鑑定をするやうにヂロヂロと眺めて、その凝視によつて得心が行つたらしく、今度は同じ用心深さでそこに

近づいて來た私の案內人を見守つた。見ると案內人は眞つ蒼になつて種々の恐怖の情を表はして立ち竦んでしまつた。バツの悪い會見だ！　と私は思つた。だが、私は大事を取つて、こゝでは私の胸中の不安を相手に悟らせてはならないことを卽座に見てとつた。馬から下りて案內人には馬の手綱を外すやうに命じ置いて、泉の傍に踞んで頭や兩手をそれに浸して、ギデオンの惡しき兵士のやうに地に匍這うてぐつと深く淸水を飮み込んだ。

とは言へ、私はどうにかかうにか案內人とこの未知の男から片眼だけは外さないやうに見てゐることが出來た。案內人は明かにおづおづしながら近付いて來た。未知の男は今は吾々には何等の惡意も持たなくなつたらしかつた。と言ふのは彼は自分の馬を離したし、最初は水平に構へていざと言へば直ぐにでも打てるやうにして持つてゐた小銃の筒口を下向きにしたからであつた。

相手が私を輕視してゐるからと言つてそれにこだはるのはつまらないことだと見てとつて、私は草の上に匍這ひながら、氣輕く、今猶ほ小銃を手離さないでゐる男に對つて、燧石箱を持つてゐますかと問ひながら、同時に私の葉卷の箱を取り出した。この男は猶ほ默々とポケットに手を突つ込んで箱を探し出すと、急いで私のために火を點けてくれた。明らかに彼は私に馴染んで來た、それは彼が私の傍に來て私の前に坐つたことでわかつた。とは言へ、彼は小銃は猶ほも自分の傍に置いてゐた。私の葉卷に火が點くと、私は箱に殘つてゐる中から一等の優良品を一本拔き取つて、煙草は喫ひますかと訊いた。

「喫ふですとも。」と答へた。それが彼の最初の言葉であつたのだが、それで私には彼がアンダルシヤ風にSを發音しないことが分つた。また、そんなことから彼も私と同じく旅行者であることが決まつた。但し考古學的の感興はすこしも持つてはゐない男だつた。

「これは少しは喫めますよ。」と、言つて、私は遽り抜きのハバナを一本彼に手渡しした。彼は一寸頭を下げて、私から貰つた葉巻に火を點けて、また、もう一度お辭義をしながら、さも滿足らしく美味さうに喫ひ始めた。

「あゝ！」と彼は口や鼻腔からゆつくりと煙を吐き出して、

「隨分と久しかぶりに喫つたですよ！」

西班牙では、こちらから差し出した煙草を先方が受け取ることは丁度東洋でパンや鹽を分け合ふのが交驩である如く相互の親しみを成り立たせるのであつた。この私の友も私が豫期した以上に話し好きであることを示し始めた。だが、彼はモンティラ縣が鄕里だとは言つてゐない。また附近の村の名も知つてゐない。そして私がこの近所に崩れた城壁だとか彫刻のある石があるやうな場所はなからうかと訊くと、彼はそんなものには寸毫も氣を注けてゐないと到頭白狀した。代りに、彼は馬にかけては鑑定家だと言つた。彼は私の馬を批評した。そんなことは彼には造作の無いことであつた。それから自分の馬のことを言つて有名なるコルドヴの種だと言つた。全く優良なる逸品で、彼の言ふところで

は疲勞と言ふことを知らない種のもので、或る日に速歩で晝間の間に九十哩もとツ走らせたと言ふのであつた。かう話してゐる間に、この未知の男は突然口を噤んでしまつた。恰も話し過ぎたのを自分で驚いて口惜しがつてゐるやうであつた。

「その時は大急ぎでコルドヴまで行かなけやなんねいかつたんですよ。」と少し狼狽して、

「訴訟事があつたんできあ。」

彼がかう言つてゐる間に私は案内人を見た。名をアントニオと言ふ私の案内人は眼を伏せて下を向いてゐた。

この岩蔭と泉とが氣に適つたので、私はモンティラの友人達が案内人の兵糧嚢に入れてくれた上等の幾片かのハムの辨當のことを思ひ出した。私はそれを案内人に持つて來させて、この即席遊山の辨當の仲間入りをするやうにこの未知の男を招待した。彼が久しぶりに煙草に有り附いた位なら、少くとも四十八時間も斷食してゐるに違ひないと思つた。彼は餓えたる狼の如くに食つた。私の出現はこの憐れな惡魔に對しては全く神の出現であつたかと思はれた。だが、私の案内人のアントニオは少ししか食べないで、飲まないで、この旅行の初めの頃は恐ろしい饒舌家だつたのにこゝでは一言も口を利かなかつた。未知のお客が彼には拘泥になつたと見え、お互ひに信じ合へないことから、彼等同志が反撥し合つてゐるらしかつた。その原因は私には分らなかつた。

パンもハムも最後の一破片に至るまで食ひ盡くされた。で、私は

案内人に手綱を持つやうに命じて、初めて知り合ひになつたこの未知の男と別れかけると、彼は私が
今夜は何處で泊る積りかと訊いた。
案内人が目くばせをするのに氣付かぬ間に、私はクエルヴオの宿舍へ行くところだと答へてしま
つた。
「旦那のやうなお方には不向きな宿舍でさあ。でも私もあそこへ行くのですから、なんなら一つお伴
をしませう。」
「それは願つたり叶つたりだねえ。」と私は答へながら馬に乘つた。手綱を持つてゐた案内人は再び
合圖をした。私は肩を聳やかして、大丈夫だよ、私は全く安心してゐるんだからと答へてやつた。そ
して吾々は出發した。
アントニオの仔細めいた合圖やその不安げな態度や、未知の男が口を滑らせた數語、殊に九十哩
疾走の話やそれに就て辻褄の合はぬ說明等から推して、この新らしい道伴れに關する私の意見なるも
のは定まつて來た。疑ひもなく私は一人の密輸入者かそれとも恐らくは一人の山賊と行動を共にして
ゐたのだ。だが、それは構はないぢやないか？　私は西班牙人の特質を知りぬいてゐる積りだ。共に
食ひ共に喫つたことのある彼に對しては何等の恐怖の念をも持たなくて可いと信じてゐた。却つて、
目先きの見えない、道中の總ゆる危難には一つの魔除けにすら成り得る。おまけに私は山賊とはどん
なものかと知ることが出來たのを喜んだ。每日山賊に逢へるものではないのだし、殊に相手が穩やか

で素直だと分つてゐれば、そんな險呑な男と道伴れになつてゐることに魅力をすら見出される。
私はこの未知の男を次第々々に打解けさせるやうにしたいと望んだ。そして案内人が瞬きをしてゐ
るのには頓着をしないで、山賊の話へ導いて行つた。勿論、私は充分敬意を籠めて彼等のことを話し
た。當時アンダルシヤにはホセ・マリアと言ふ有名な山賊がゐて、彼の荒稼ぎは人々の口の端に上つ
てゐた。「私がホセ・マリアを道伴れにしてゐるとしたなら。」と私は自問してみた。で、私はこの英
雄のことに就いて知つてゐる限りの逸話を話した……總て、勿論、彼を褒め嘆へて、彼の勇俠と太つ
腹なことを聲を大にして讃美した。「ホセ・マリアは高がケチな野郎でさあ。」とこの未知の男は冷然
と答へた。
「正直に言つてゐる積りかしら。」と私は自分に訊いて見た。それと言ふのは、注意深くこの道伴れを觀察した後に、私はアンダルシヤの多くの町々の門
に貼紙がしてあつたので見覺えてゐるホセ・マリアの人相書と彼とを適てはめて考へ始めたからであ
つた。然うだ。確に彼だつた。美しい金髮、碧い眼、大きな口、美しい齒、小さい手、立派な襦衣、
銀ボタンの附いた天鵞絨の胴衣、白革の脚胖と栗毛の馬。正しくその通り。然し彼のお忍び姿は尊敬
して呉れやう！
吾々一行は宿舍に着いた。果して彼が言つた通りであつた……言はゞ、最も見すぼらしい、今まで
見たこともないやうな宿屋だ。大きな一室があつて、臺所、客間、寢室を兼ねてゐた。部屋の眞中の

平たい石の上には火が燃え盛つて、煙は一つの穴をぬけて天井に通ると言ふよりは、寧ろ、天井に低く迷してゐる方で、それが床から五六、呎のところで雲となつて漂つてゐた。壁に沿つて、床の上には五六枚の馬の脊覆ひがあつたが、それがお客用の寢床なのであつた。家から——否な今言つた唯一の客間から——約二十歩を隔てたところに小舍のやうなものがあるのが、厩舍に代用されてゐるのだ。この快適な住宅にはその時刻には、一人の老婆と十歳か十二歳位かの一人の少女としか居なかつた。ともに襤褸にくるまつて、煤のやうに眞つ黑い顏をしてゐる。

「これは昔のムンダ城下の殘留民の全部だ。おゝ！　シイザアよ、おゝ！　セキスタス・ポムペイよ！　卿等が今のこのムンダの空氣の中に蘇生へつて來たならば、どんなに吃驚して目をまはすことだらう！」と私は思つた。

老婆は私の道伴れを見ると驚きの聲を放つて、

「あら！　ホセ殿の親方ぢや！」

ホセ殿は顏を顰めて何か命令するやうに手を擧げると、老婆は默つてしまつた。私は案內人に向つて、ホセに見付からないやうに合圖をしながら、今夜一晚を共に過ごさねばならないこの男に關しては何事も知らせてくれなくてもよく承知してゐる旨を通じて置いた。晚餐は思つたよりは上等であつた。床から一呎位の高さの小さいお膳に載せて供せられたが、老鷄と米と唐辛子の煮込みや唐辛子の油揚げや最後が唐辛子の生膾入りのガスパッチョ（スープの一種）。この素的な調味よろしき三四

皿は吾々をしてモンティラ產の葡萄酒の壜を幾度も傾けさせた。それがまたなか〳〵甘く飮める酒であつた。

晚餐が終ると、壁に立て掛けてあつたマンドリンに眼が止つて——西班牙には到る處にマンドリンがあつた——私は給仕をしてゐる少女にそれを彈けるのかと訊いた。

「彈けないの。」と少女は答へて、

「だけどホセ殿の親方はそれは上手ですわ。」

「何か一つ歌つてくれませんか。」と私は話しかけて、

「私は素的にお國の音樂が好きですよ。」

「あんな上等の葉卷を御馳走になつた好い旦那に向つては斷り切れねいや。」とホセ殿上機嫌に答へてマンドリンを受け取ると、御自身の伴奏で歌ひはじめた。彼の聲は嗄れてゐる方であつたが、寧ろそれが氣持の好いものであつた。歌詞に至つては一言も私には分らなかつた。

「私の聞き違ひかも知らないが、君が今唱つたのは西班牙の歌曲では無いね。私がこの縣で聞いたことのある舞踏曲に似てゐる、言葉はバスク語のやうに聞えましたよ。」

「その通り。」とホセは眞面目な顏で答へた。マンドリンを床に置くと妙に悲しさうな表情になつて、耐らなく眠たいとこぼした。小さな卓子の上のランプに照らされてゐる彼の顏容は氣高いと同時に獰猛で、ミルトンの詩中の惡魔を思ひ浮べさせた。あの惡魔と同じく、恐らくこの友も逃げだして來た

天國のことを思ひ出してゐる——罪のために遁げ出さねばならなくなつた天國のことを。で、私は努めて彼を會話に伴れ込まうとしたが、彼は何とも答へなかつた。その位にまで彼は悲しい思ひ出に耽つてゐた。

この時分までには、老婆は一本の綱から垂れてゐる襤褸で出來た古風な衝立の蔭になつてゐる部屋の一隅へ、休息のために入つた。少女もこの婦人用のこの休息所へ老婆に蹤いて退つた。すると私の案内人は立ち上つて、私と一緒に厩舍に來てくれと言つた。これを聞くと、ホセは驚いて眼を覺したかの如く、何處へ行くのだと荒つぽい言葉で訊いた。

「厩舍でさあ。」と案内人は答へた。

「何用で？　馬には秣草がうんと當てがつてあるぢやないか。この室で横になれよ、旦那はそれをお許し下さるわな。」

「旦那の馬の健康が惡いやうだ。旦那に診て頂きたいと思つてね、旦那は手當を御存じだらうから。」

アントニオは私とだけ内々に話したがつてゐたことは明瞭であつた。だが私はホセ殿の猜疑を呼び起したくはなかつた。またこの際は滿腔の信頼を置いてゐることを見せるやうにしむけるのが最上の策だと思つた。そこで私は馬のことは何も知つてゐない上に非常に眠たいと言つた。ホセ殿は厩舍まで案内人に蹤いて行つたが直ぐに獨りで歸つて來た。そして、馬に何の異狀もないが、案内人が大層大切がつて胴衣で擦つて汗を出させ、夜通しそれをやり續ける積りでゐると言つた。が、私は直ぐに

襤褸の下に體軀を延し、用心深く外套にくるまつて、襤褸は身に觸れさせないやうにした。私の傍に持ち込んで來た勝手な振舞を許して貰つて、ホセは扉の前で横になつて、先づ小銃の裝藥を新たに詰め換へると、枕代りの兵糧囊の下に注意しながら置いた。吾々はお互ひにお休みを交して五分間も經つと二人とも熟睡に陷入つた。

私はこんなやうな場所でも充分眠れる位に疲れてゐると信じた。しかし一時間の後に非常に不愉快な痒さで最初の假睡から覺めた。その厭な原因が解つて來ると直ぐにこんな非衞生的な屋根の下よりは戸外で夜を過ごす方が勝つてゐると確く信じた。爪先き歩みをして扉に達し、正しき者の眠りを眠つてゐるホセ殿を跨いで、彼を起さないやうに辛つと家から逃れ出ることが出來た。戸口の傍に大きな木の据椅子があつた。その上に横になつて、出來るだけ具合よく眠らうとした。この夜の第二回目の眠りの眼を閉ぢかけると一人の男と一匹の馬が私の前をすこしも音を發てないやうにして通り過ぎる影が眼に入つたやうな氣がした。飛び上るとアントニオだなと思つた。こんな時刻に厩舍を脫け出す彼を見ると驚いたまゝ、彼に逢ふために馳け出した。彼は私が近寄ると立ち停つた。

「奴は何處に居るのです？」と彼は低い聲で私に訊いた。

「舍宿で眠つてゐるよ。南京蟲なんか平氣だよ。おや、君は何故馬を伴れ出したんだ？」

その時に私はアントニオが厩舍を脫け出すのに少しの音も發てないやうにと注意深くも馬の四足を襤褸片で包むでゐるのを發見した。

「もつと低い聲でお話しなさつて下さい。後生ですから。」と言つて、

「旦那は奴が何者だか御存じないのですよ。奴はホセ・ナヴロ（ホセ・マリアとは別人）つてアンダルシヤで誰一人知らぬ者の無い名うての山賊なんです。私は今日一日あなたに合圖をしつゞけたのに旦那は解つて下さらなかつたのです。」

「山賊であらうが無からうが、何を構ふことがある？」と私は答へて、

「彼は吾々から何も奪りやしないし、確かに奪らうともしてゐないよ。」

「全くです。だが、奴の首には二百ドウカ（一ドウカは我が四圓五十錢。）の懸賞があるのです。私はこゝから約一里半を行くと槍騎兵の派出所がある場所を知つてゐますから、彼が惡黨だとは君の口からも言つて、君も知肝高でナヴロ以外の者は傍に寄付けないのです。」

「なんて、魔が、君にさしてゐるんだ。」と私は言つて、「貴樣は俺を知つてやがるな。俺が何者だとあの旦那に告げてでも見ろ、貴樣の首は捻ぢ切つてやる。」と言つてゐました。彼奴と一緒に居てやつて下さい、旦那、あなたは何も怖いことは無い。あなたが一緒に居てやつて下されば奴は疑ひは持ちませんから。」

私達は話してゐる間に宿舍から餘程遠い處まで來た。もう馬の蹄の音が宿舍の者には聞えない。アントニオは片眼を瞬きしながら襤褸の布呂敷を外して馬に乘る支度をした。私は賴んでみたり脅したりしてさへも彼を止めようと努めた。

「私は貧乏人でがす、旦那。」と彼は答へて、

「二百ドウカをみす〳〵逃がしたくねいんです。おまけにあそこのあの惡黨をこの國から追つ拂ふことが出來まさあ。だが、御用心なさいよ。ナヴロが目を覺すと直ぐに小銃に取つ付きますぞ、でずかららそこを御用心なさい。私は後戻りが出來ないところまで來ました。お大事になさい。」

この男は慾に目がくらんでもう鞍に跨がつてゐた。馬に拍車を入れて直ぐに闇の中に消えて私の目に見えなくなつた。

私はこの案內人に厭な氣がした。また少なからず不安になつて來た。一寸考へた擧句、私の採るべき方針を決めて宿舍に戻つて來た。ホセ殿は連日の疲勞と警戒を癒しながら、言ふまでもなく眠つてゐた。私は彼をおこす前には手荒く彼を搖ぶらなければならなかつた。私は彼の獰猛な顏容と、私が豫め用心に置き所を移して置いた彼の小銃を探すときの彼の動作とは決して忘れられなかつた。

「君。」と私は言つて、

「君を煩はすのは御免を蒙るとして、一つお訊きしたいことがあるのだがねえ。君はこゝへ來る六人の槍騎兵に逢つてもいゝのかい？」

彼は立ち上つて、恐ろしさうな口調で、

「誰が旦那にさう言ひました？」

「忠告の出所は何處だつて、それが役にさへ立てばいゝではないか？」

「旦那の案内人が裏切りやがつた。だが、思ひ知らせて呉れよう。何處に居るのです？」

「知らない、厩舎だらうと思ふが……知らせて呉れたのは或る人なんだ。」

「誰ですか？　するとあの婆ッ？」

「私の知らない人だつたよ。餘計なことはぬきにして、君はその兵隊から逃げるのが有利なのかい、どうだい。逃げたいのなら一刻も猶豫はしてゐられないが、さうでなければ、お休みなさいと言ひもしようし、また折角のところを起しだてしたお詫も言はなければならんのだがねえ。」

「あの案内人――彼奴だ！　初めつから私は奴を疑つてゐた。だが彼奴のことは何とでもしてみせてくれる！　さよなら、旦那。御恩は神樣が貴方に酬いて下さる。私は貴方が思つてゐなさる程の悪黨ではない。この私にでもまだ勇敢なる者から同情せられてもいゝところが幾らか殘つてゐる。さよなら、旦那、一つ心殘りと言ふのは貴方からのお借りをお拂ひすることが出來ないことだ。」

「私が君に盡したことに酬いてくれるのなら、ホセ殿、どうか誰も疑はないと約束してくれ給へ――復讐のことなどは考へて呉れ給ふな。お持ちよ――君への葉巻がある。御機嫌よう！」と、私は私の手を差し出した。

彼は何とも答へないで私の手を握り返すと、小銃と兵糧嚢を摑んで、私には解らない訛りのある言葉で老婆に二言三言言ひ置いて厩舎に駈けつけた。二三分經つと廣い野原に馬を走らす蹄音が聞えて來た。

扨て私は据椅子に歸つてみたが眠れなかつた。私にはふ權利があるのだらうか、單にハムだとか飯だとかを一緒に食つたと言ふだけの理由から……と自分に訊いてゐた。私は法の掟を守つてゐる案内人を裏切つたのではなかつたらうか？　私こそ惡黨の復讐に案内人を曝らす者ではなからうか？　だが、同宿の好からの務めは？　「野蠻人の偏見」と私は獨り言を言つた。「私は今後あの山賊が罪でも犯したら、どんな罪に對してでも責任を持たねばならない。」だが、あらゆる理性を否定するこの良心の本能は果して偏見だらうか？　恐らく私が置かれたるこの微妙なる位置にあつては何等悔恨の念なく切りぬけることが出來るだらうか？　私が自分の行爲の道德に關して非常な不安に迷つてゐると、六人の槍騎兵がアントニオを伴れて來るのを見た。アントニオはおづおづと後部から蹤いて來た。私は途中で彼等を迎へて、山賊は二時間も前に逃げて行つたと話した。老婆は伍長から訊かれると、彼女はナヴロはよく知つてはゐたが獨り暮しなので、命懸けで訴へ出ることは出來なかつたと答へた。また彼女はナヴロは何時も彼女の家へ來た時には夜中に出發する習慣になつてゐると言つた。私はと言ふと、私の旅行券を見せるために數里の道を行つて市長の面前で宣誓書に署名しなければならなかつた。その後で私の考古學の研究を續けることが許

された。アントニオは私に恨みを含んでゐた——彼は、二百ドウカの賞金を手に入れるのを妨げたのは私だと疑つてゐたから——でも、吾々は仲よくコルドヴで別れた。そこで私は私の財布として許し得るだけの多額の心附を彼に贈つてやつた。

二

私はコルドヴで數日を暮した。豫てからそこのドミニカン宗派の文庫には、往昔のムンダに關する面白い文獻がある筈だと聞いてゐた。そこの善良なる坊さん達に好遇せられて日を過した。夕暮には町を散歩した。日沒になるとコルドヴでは無數の怠け者が堤に出て來た。堤はグァダルキヴィル河の右の河岸になつてゐた。昔から製革業で名を賣つたこの國のことゝて、このあたりは鞣皮の臭が鼻をついた。然し一方では、一瞥の價値が充分にある光景を樂しむことが出來た。夕暮の鐘が鳴り響く數分前になると一群の婦人が、かなり高い堤の下の水際に集まるのだ。この女人群に男は唯の一人だつて交つてはゐない。鐘が鳴れば夜が始まるとしてある。最後の鐘の音とともに總ての婦人は着物を脫いで河に飛び込む。續いて、叫ぶ、笑ふ、大騷ぎだ。堤の上からは男共がその水浴の女達を眺めてゐる、よくは見えないのに眼だけは見張つてゐる。とは言へ、白い茫うつとした姿が河の深い藍色の水の中に動くのを見てゐると詩情をそゝられる、そして、少しく空想を弄するならばデイアナと水浴の女神像を心に描く位のことは、アクティオンと同じ運命に陷らなくとも、さして困難ではない。なんでも或る時は不良少年共が寺の鐘突き男に贈賄していつもよりは二十分も前に突かせたことがあつたと言ふ話だ。陽があつても、こゝの女神像は躊躇しないのだ。太陽よりは寺の鐘の方を餘計に信じてゐて無邪氣に浴衣を脫いだのだ——浴衣は極めて簡單に作られてもゐる。その時私はそこに居合はさなかつた。私の居た頃の寺男は頑固者であつた。夕暮の陽が暗くて、猫ででもなければ蜜柑賣りの婆さんとコルドヴ第一の美人のおしやれさんと見別がつかない程度だつた。

或る晩、もう周圍が見えなくなつた頃、私は堤の欄杆に倚りそつて煙草を喫つてゐると、一人の婦人が川に通ずる階段を登つて來て私の傍に腰掛けた。頭髪に大きな素馨の一房を飾つてゐるのが強い芳香を放つてゐた。彼女は質素と言ふよりは寧ろ貧しげに着物を着てゐた。流行を追ふ婦人達は黑は朝の間だけ、夕暮になるとフランス風の着物を着るのである。この浴衣の女が私に寄り添つて來ると、頭に掛けてゐた顏藏ひが彼女の肩に滑り落ちた。そして星明りで、彼女が美しくて、若く、姿勢がよくつて大きな眼だと言ふことを知つた。私は大急ぎで私の葉卷を投げ捨てた。彼女は私の愼み深いのに目をとめた——全くフランス人の儀禮だと——そして彼女は煙草の臭ひが大好きで、柔らかな紙卷ならば自分にでも喫へると早口に言つた。都合よく私は卷煙草も函に入れてゐたから彼女に侑めた。彼女は心易く一本貰つて、子供が一錢で賣つて呉れるコルクの燃え殘しの端から點火した。お互ひに煙草を喫ひながら、私共は長い間話した——美しい浴衣の女と私——氣が付くと私と彼女と二人しか堤の上にはゐなかつた。私はカフェへでも行つて、何か

氷菓子でも食べに行かないかと言つてみても失禮ではあるまいと思つた。いくらか羞かしさうに躊躇した後で彼女は同意した。その前に何時頃かと訊くのであつた。私は時計に時間を鳴らしてみたが、それが非常に彼女を驚かした。

「お國の方はなんていゝ發明をなさるでせう！　貴方のお國は何處？」

「フランス人です、そして貴女の素直な下男です、奥さん、それともお嬢さん！　貴女は多分コルドヴ生れでいらつしやるでせう？」

「いゝえ。」

「では少くともアンダルシヤのお方？　貴女の柔かな語調から私はさうと當てゝゐますけれど……」

「貴方がそんなに綿密に人の語調がお分りでしたら、私がどんな人間かもおわかりになつていらつしやるわ。」

「貴女は天國のお方だ——極樂から數歩離れた。」と言つたこの比喩は友のフランシスコ・セルヴィラと言ふ有名なる鬪牛士から聞いたもので、アンダルシヤの人だと言つたのであつた。

「あらまあ、極樂ですつて！　この邊では極樂なんて私共には緣がないと言つてゐますわ。」

「では貴方はムール人、もしくは——」と、あとはぐつと詰つてしまつた。まさか「猶太人」とは言へなかつた。

「構はず言つて御覽なさいよ！　ずつとさあ！　貴方は私がジプシイだつてよく御存じなのに。私貴方に占ひをして上げませうか？　貴方はラ・カルメンシタのことをお聞きになつて？　私がそのカルメンシタですわ。」

當時私は途方もない無神論者で——思ひ起すと十五年も前のことではあつたが——魔法使ひの女と同席したつて毫も怖毛を振るつて逃げ出すなんてことは無かつた。「好いとも」と、私は獨り言を言つた。

「先週は山賊——それとも追剝——と一緒に飯を食つたし、今晩は惡魔に使へる美しい侍女と氷菓子を食ふのだ！　旅行をするといろ〳〵のものが見られるから面白いて！」

私はこの女と親しくしたいと思つたのは外にも理由があつた。恥を言ふやうだが大學を出ると私は卜占術の研究に凝つて多くの時間を費したし、また、瞑土から亡靈を呼び出さうと幾度も試みたものだ。この研究熱の病み魅きから今は治つてゐるやうなものゝ、やはり迷信に關する好奇心は殘つてゐた。そして卜占の技術がどの程度までジプシイの中に發達してゐるかを確かめたいと言ふ興味が湧いて來た。

話しながら私達は珈琲店に入つた。そして硝子張りの中に蠟燭を點した小さな卓子に腰を下した。そこで私はこのジプシイ美人を觀察する機會を捕へた。上流の紳士連は氷菓子を食べながらこんなお伴と一緒にゐる私を見て呆れてゐた。

私はカルメン孃が果して眞のジプシイ族かと疑はざるを得なかつた——兎も角も彼女はその種族の

中では私が今まで見たことのない一等の美人であつた。女が美人であるには、と、西班牙人が言つてゐるのは、三十の美點を具備しなければならない。女の體軀の三つの部分に相當するそれ〴〵十個の形容詞をあてはめることが出來るやうに、美人たるものは三つの黒い點を持たねばならない——眼、睫毛、眉。三つのきやしやな美しき點——指、脣、毛、等々。その他のことはブラントームの美人傳でも調べてもらはう。ところで、こゝの吾ジブシイ嬢は美人としてあらゆる點を具へてゐる完璧とい言ふわけではない。彼女の皮膚は頗る滑かではあるが銅色に近い方だ。眼は斜視だが大きくて切れ長い。脣は少々厚い。その間から恰好がよくつて皮をむいた巴旦杏の如く白い齒が見られる。彼女の頭髪は恐らくは荒い方らしいが蒼光りがして烏の羽に於いて見受けられるやうに長くて豐富だ。餘りくど〳〵しい說明のために讀者諸君を怠屈させては濟まないから、簡單に言つてしまふと、彼女に一つの缺點が見出されると他の一つの美點が補つてゐる。それが對照の妙を極めて、却つて引つ立つのであつた。一種異つた野性の美人——初めて見ると驚くけれどその後は決して忘れられない顏容である。特に眼は異なつてゐて、淫蕩であると同時に獰猛だ。どんな人間の眼にも見られない目付きだ。西班牙の諺に一口に「ジブシイの眼、狼の眼」と言つてゐる。うまく言つたものだ。但し、諸君が狼の眼なるもの、表情べ調べるために動物園へ行く暇がないとあらば、雀を狙ふ猫の眼を御覽なさい！

運勢の卜占を珈琲店で行つて貰ふのは他の人が變に思ふだらうと氣が着いたから、私はこの美しい

卜占者に貴女の家へ行つて見てもらひたいもんだがと頼んだ。彼女は二つ返事で快諾したが時刻を知りたいから、と言つてもう一度私の時計を鳴らしてみてくれと言ふのだ。

「ほんとに純金製？」と彼女は注意深く私の時計をじろじろと見てゐた。

出てみると道は眞暗である。店は多く閉されてゐて街は殆んど遺棄せられてゐるやうに淋しい。吾吾はグァダルキヴィル河に架けられた橋を越えた。そして町端れの殆んど裝飾や贅澤つ氣の無い一軒の家に達した。一人の子供が吾々のために扉を開けてくれた。ジブシイのその子供は私には判らない言葉で彼女に話した。それはジブシイ語であつた。子供は直ぐに出て行くと私共は小さい卓子と椅子二脚と箱が一つだけある、比較的廣い部屋へ入つた。私はそこの水瓶と、一山の蜜柑と、玉葱の一束を忘れることは出來ない。

二人だけになると直ぐにジブシイ女は箱から使ひ古した一揃ひのカルタと磁石と干物にしたカメレオン、その他彼女の卜占に必要なる品々を取り出して、いろ〳〵の魔法の儀式を始めたのであつた。彼女の豫言をこゝに述べるのは無用だ、たゞその爲ることから見ると、彼女は相當に修練を積んだ卜占師だと言ふことは明かだ。

が、不幸にして邪魔が入つて來た。突然烈しく扉が開けられた。黒い外套で眼まで包んだ一人の男が部屋へ入つて來て、そこのジブシイ女を無作法な態度で詰つた。男の言ふことが私には分らなかつた。が、その話しつ振りから、男が非常に不機嫌だと言ふことだけは解つた。彼は驚きも怒りも表情

には出してゐない。だが女は大急ぎで男の傍へ行つて、私を前に据ゑて置いて以前に使つたことのある判らない言葉の驚く可き快辯でまくしたてた。私に判つたのは「ペーロ」と言ふ言葉が幾度も使はれたことだけで、その言葉はジプシイが「他國人」のことを言はれてゐると思つたから、聊さか巧妙な辯明をしなければなるまいと豫想して、もう椅子の片脚を握つて、この侵入者の頭上に一撃を喰はせる危機一髪の時期を伺つてゐると、男は手荒く女を突き除けて、つか〳〵と私の處へ來たが、ふと退いて叫んだ。

「あゝ旦那、あなたですか！」

今度は私の方から彼を見た。そして友人ホセ殿だと認めた。と、その瞬間、奴を絞首臺に送らなかつたのに悔恨を感じた。

「やあ、君ですか。私の勇ましい好漢！」と、私は苦々しさを笑ひに混ぎらせて叫んだ。

「君はこの婦人が私に本當の面白い豫言を言つてくれる間際に邪魔を入れたんだぜ。」

「相變らずだぜ——よしやがれ！」と、嗤いて、凄い眼で女を睨めつけた。

ジプシイ女は例の言葉で彼に饒舌り續けた。彼女は次第に興奮した。彼女の眼は輝いて血走つた。顎の筋肉がひきつゝて慄へた。顏が縮こまつた。足を踏み鳴らした。それが男に何事かをしろと迫きたてゝゐるのだと知れた。男はそれを躊躇した。彼女が可愛い手を彼女の首のところで手早く往き來させてゐる意味が判つて來た。誰かの首を切つてしまへと言ふのらしい。もしかしたら、その首と言ふのはこの私の首のことだ！

女の流暢な早口にも拘らず、ホセ殿は二三言早口に答へた。すると女は輕蔑し切つた深い一瞥を男に吳れて、自分は部屋の一隅にトルコ風に腰掛けて蜜柑の山から一つ摘んで皮をむいて食べ始めた。ホセ殿は私の腕を抱へて扉を開けて街に伴れ出した。私達は二百歩ばかり默つて歩いた。と、彼は腕を延して言つた。

「眞つ直ぐに行きなせい、橋に出るから！」

彼はくるりと背後を向けて急いで歸つて行つた。私はやゝ悄氣て、不機嫌になつて宿へ歸つて來た。着物を脫ぐとき氣が着いたのだが、一等の惡いことには時計が無くなつてしまつてゐた！

翌朝になつて、いろ〳〵考へた末、時計を探したり取り戻しに出懸けたり、またそれを探索するために法律の助けを借りたりすることは止めにした。修道院の古文書に關する自分の仕事を濟せると、私はセヴィレに出懸けた。アンダルシヤを數ケ月間放浪して、マドリッドに歸ることにしたが、それには、またコルドヴへ寄らなければならなかつた。私はそこに長逗留はしたくなかつた。この美しい町も水浴の女達にも厭氣がさしてゐた。だが、そこには訪問せねばならない二三人の友人がゐたし、果さねばならない仕事もあつたししたから、三四日の間はこの囘々教の公達の住んだ古都に足を停めねばならなかつた。

修道院へ顏出しに出懸けると、豫てから、私のムンダの位置決定の研究に非常な興味と好意を寄せ

て呉れてゐたドミニカン派の坊さんの一人が、兩手を擴げて私を歡迎した。

「神の功德を讃へて下さい。」と彼は言つて、「よくいらつしやいました。私共は貴方はお死になつたと思つて、私までがお祈りを上げてゐたのです——而もそれを悔いなかつた——貴方の靈魂の御冥福を祈つてゐたのです。ところが貴方は殺されてはゐなさらなかつた。貴方が追剝にお逢ひになつたことを知つてゐたのですよ。」

「どうしたことなのです。」と、私は驚いて訊いた。

「それはねえ、それ、貴方はよく文庫で私共が時刻をお尋ねすると、貴方の立派な時計を鳴らしてゐらつしやつたでせう。あの時計が見つかつたのですよ。そして貴方のお手許に返るやうになつたのです——」

「あれは言はゞ——」と私は周章てゝ、

「なにね、落したのだとばかり思つてゐるのですが……」

「犯人は抑留中ですよ。」と、お坊さんは言つて、

「其奴は小錢一つ取るためにも人を擊つと言ふ種類の奴ですからね、私共は、奴が貴方を殺したのだとばかり恐ろしく心配してゐました。私はお伴をして市長のところへ行きます。時計を取り戻して來ませう。そして、お國へお歸りになつたら、西班牙の警察は無能だなどとは言はないやうにして下さい！」

「正直に申しますが。」と、私は答へて、

「私は寧ろ時計を失くした方が、可愛さうな男が絞首られる證人になるよりはましですよ。殊に況んや——その理由は。」

「おう、すこしも御心配御無用。其奴は證據充分ですよ。當局だつて同じ男を二度とは絞め殺せませんのです。絞めると言つたつて絞首臺に送るのですよ。貴方のを奪つた奴は、あれで貴族なのですから、明後日は間違なく絞首臺へ送り屆けるのです。もうこの際一つや二つの窃盜事件は彼には影響はないのです。私もどうかして泥坊だけであつて欲しかつたのですけど、幾人も〳〵殺人をして、それがまたいづれ劣らぬ殘酷なやり方なんです。」

「名は何と言ふの？」

「この國ではホセ・ナヴロと言つて知られてゐます。然しバスク語でもう一つあるんですが、貴方にも私にも發音が出來ません。一見するだけの男ではあるのです。それに貴方はこの國の特徴を御研究になるのがお好きなのですから、西班牙ではかう言ふ惡漢が、どう言ふ具合に、この世からあの世へ送られるかを見る機會を外さないがいゝですよ。奴は教會にゐますからマルティネズ師が御案内いたしますよ。」

私の友のドミニカン派の坊さんは私が「風變りな絞首」の諸裝置を見るやうに頑強に主張するのであつた。私は斷り切れなくなつた。私は葉卷の包みを用意して囚人に逢ひに行つたが、それは私の出

しやばりに對する申譯のつもりであつた。

私が案内せられてホセ殿に逢つた時は、彼は食事を濟せたばかしであつた。彼は私に冷やかに一禮して私から贈つた葉巻のお禮を述べた。それからそれを數へて、中から二三本だけ抜き取つた殘りを私に返した。自分には、もう、そんなに澤山は要らないことを知つてゐたー

私はお金とか何か他の力で彼が或る程度の減刑に浴するやうな方法を私に執れやしまいかと彼に訊ねた。最初彼は肩を竦めて悲しさうに笑つた。然し氣を換へて、彼の靈魂の供養のために彌撒を上げてくれと私に頼んだ。

そしてまた言ひ難くさうにして、

「貴方に危害を加へた婦人のためにもまた彌撒を上げて頂けるでせうか？」

「お安い御用ですよ。」と私は答へて、

「だが、私はこの國ではどの女からも危害を受けなかつたと思ふがね。」

彼は私の手を取つて眞面目にそれを握つた。そして暫らく默つてゐて、

「一つお願ひをしてみませうか？　旦那がお國へお歸りの際に多分ナヴレをお通りになるでせう。少くともヴィトリアはお通りでせう、あまり遠くはないのだから。」

「通るよ。」と私は答へて、

「確かヴィトリアは通るでせう。バムペルナへもまはらないものでもない。だから君のお頼みなら喜んで寄り道をして上げますよ。」

「はあ、もしもバムペルナへお出懸けになれば旦那を引き止めるやうな面白いものが二つや三つはありますよ。立派な町ですからねえ。このメダルをお渡ししておいて置きませう（と言つて首にかけた銀メダルを私に示して）紙に包んで行つて下さい。」と、彼は暫らくくこみ上げる感情を抑へて、

「これを一人の善良なる婦人に渡すなり、人に托して渡すなりして下さい。宛名はお知らせしますから。そして私が死んだとだけ言つて、どんな風に死んだかは言はないで下さい。」

私は彼の望みを果してやると約束した。

翌日また私は彼を尋ねて彼と晝間の或る時間を過した。次の話はその時彼自らの口から聞きとつたところである。

三

彼は言つた——私はバッファンの谷のエリゾンドで生れました。名前はホセ・リザラベンゴア殿。旦那は西班牙のことはよく御存じだから、かう言へば、私がバスク國の者で古くからの耶蘇教徒だとお判りでせう。假りにも殿と言ふ肩書を附けるのはその家柄があるからですよ。もし私がエリゾンドに居るのなら、羊の皮に書いた私の系圖をお目にかけますよ。私は教會に遣られて學問をさせられましたが、その道はからきし駄目でした。餘りテニスに凝つて、それが身の破滅になりました。吾々ナ

ヴロつ兒がテニスを演ると何も彼も忘れてしまひます。或日私がアラヴの若者と試合をしてそれに勝つと喧嘩を吹つかけられました。二人は鐵の輪の嵌つた棍棒で渡り合つたものです。それにも私は勝ちましたが、そのために鄕里を賣ることになりました。私は龍騎兵に出逢つたのを幸ひにアラマンザの騎兵隊へ志願しました。私の國を出た奴等は直ぐに兵隊商賣には得手るのです。私は忽ち伍長に昇進して既に曹長にまで漕ぎ付けようとしてゐたのを、運惡くセヴィレの煙草工場の衞兵に任命せられました。セヴィレへお出懸けになつたことがあれば、グァダルキヴィル河畔の城壁の外側のあの大きな煙草工場にお氣附きでしたでせう。今でも私の目にはあの扉やその脇の衞兵の詰所が見えるやうです。非番の時には西班牙人は、カルタをしたり眠つたりしてゐましたが、私は氣儘なナヴロ人ですから、いつも勝手に働いてゐました。私は鐵砲の導火針を支へる眞鍮の針金の鎖を作つてゐました。或る日のこと友達が叫ぶのです。

「時計が鳴つてる、女工が出懸けるぞ！」と。

御存じの如く四五百人の女工共が煙草工場に備はれてゐるのですが、その部屋へは檢察官の許可がないと男子は立入れないのです。女でも若い者は、特に暑い時など、みんな素肌で働いてゐましたからです。若い女が食事を濟ませて仕事に歸る時には澤山の若い奴等がその通路へ見物に出懸けるのです。いろんな女が通るのですよ。この女共の中で、絹の肩掛をやらうと言はれて、それを斷る者は滅多にないのですから、未經驗者はこゝの女釣では一寸身を

屈めさへすれば魚は釣れるつてわけです。他の連中が眺めてゐる間に、私だけは戸に近く腰掛けて殘つてゐました。當時、私は若かつたし、慕鄕症だつたしで、青いスカートを着け、編んだ頭髮を肩まで垂れてゐる鄕里の女より外には、美しい女は無いものだと信じてゐました。それにアンダルシヤの女共は嫌ひでした。私はまだ彼女等の作法に親しんでゐなかつた。いつも滅らず口ばかりたゝいてゐて、眞面目さがなく、柔しい言葉一つ利く奴が居ない。私は鎖をひねくりながら働らいてゐると、誰だか「ジタニタを御覽よ！」と言つた者があつた。顏を擡げて私は彼女を見ました。それは金曜日でした。私は忘れようたつて忘れられない。それがカルメンでした。旦那はカルメンを御存じです。數ケ月以前に、彼女の家で、私は旦那と逢つたぢやありませんか。

カルメンは、短かい赤いスカートを着けてゐました。下には澤山穴の開いた白い靴下が見えるのです。モロッコ革の小さい靴を穿いてゐて、緋のリボンで縛つてゐました。また肩を見せびらかすやうに肩掛をまくると、肌衣には大きなアカシアの花束を留めてゐるのが見えました。それから口にも一輪の花を銜へて、コルドヴの牧場で育つた逞ましい牝馬のやうな姿態で歩いて來ました。鄕里でこんな風な女にでも出逢つたら鄕里の者はみな穢らはしいと言つて十字を切つたでせう。セヴィレでは誰でも彼でもこの娘に出鱈目なお世辭を浴せかけるのですっ彼女は握り拳を腰に當てながら、その連中を振り顧いて、生え拔きのジプシイ女らしい圖々しさで洒あ〳〵と進んできました。最初彼女は私を動かし得なかつた。私は自分のやりかけの仕事を續けてゐた。だが彼女は女と猫の通性通りに、來ね

ば呼ぶ、呼べば來らずで、私の前に立ち塞がつて、アンダルシヤ風に話しかけたのです。
「兄さんてば、私の箱の鍵をさげて置くんだから、その鎖、私に下さらない？」
「これは僕の導火針をさげとくんだよ。」と、私は答へました。
「あら、導火針ですつて！　では兄さんはレースの編物をするの。男の癖に針が要るつてをかしいわねえ。」
そこに群つた者共は笑ひました。私は顏が赧くなるのを感じましたが、返事をしませんでした。
「ねえ、私の好きな兄さん。」と、彼女は言つて、
「妾のマントに黒レースを二丈一尺ばかり編んで呉れない？　私の兩眼の間に投げつけました。旦那の前で
と言つて　扇の間から花を手に取ると撥指で彈いて、
すが、その時には私は額に彈丸を食つたやうな氣がしました。私はどうしでいゝか判らなくなつた。
私は板のやうに堅くなつて突つ立ちました。彼女がそのまゝ工場へ入つてしまふと私の足許には花が
散らかつてゐました。何が私にとつ魅いたか私には判らない。仲間の奴等が見てゐない間に私は花を
拾つて胴衣の中へ仕納ひ込みました。
それがそも〳〵最初の失敗でした。
二三時間經つてもまだ私はその出來事を考へ込んでゐました。旦那、想像してみて下さい。そこへ飛び込んだ時の光景つたらないんて、門衞詰所に飛び込んで來ました。彼は工場の大部屋で女工が一人斬殺られたから衞兵を一人よこ

してもらひたいと言ふのです。軍曹は私に兵隊を二人連れて行つて調べて來いと命じました。私は兵隊二人を引卒して行きました。旦那、想像してみて下さい。そこへ飛び込んだ時の光景つたらないんです——なにしろ三百人ばかりの女工が、肌着一枚、乃至は半裸體で——叫ぶ、泣く、手を振り首を振つてわめく、その騒つたら雷鳴だつてこゝへは聞えはしまいと思はれる位。片隅では一人の女工が血塗れになつて床に寢そべつて、見ると顏を横十文字——X形に小刀で斬りつけられてゐる。今し健氣な女工から看護を受けてゐるこの怪我人の反對側に、三四の友人から抱き塞がれて佇つ立つてゐるのはカルメンだつたのです。怪我人は泣き叫んで、あゝ、もう瀕死だ！　早くお坊さんを呼んで下さい！　と言つてゐました。カルメンは無言で、齒を食ひしばつて、カメレオンのやうに眼玉をくるりくるりと動かしてゐます。
「どうしたんだい？」と、私は訊ねました。私がこの事件を一通り諒み承むのには大骨が折れました。その場の女達が一時に話しかけるのです。
事件の起りと言ふのは、最初怪我人の方で、トリオナの馬市で驢馬を買ふ位のお金なら懐中にちやんと持つてゐるよと自慢したらしいのです。
「お默り！」と、カルメンはなか〳〵默つてはゐられない性質だから「お前さんは箒一本だつて買へやしないぢやないか？」と、きめつけたんです。
これで相手はぐつと詰つた。箒と言ふ言葉を持ち出されたので恐らく疑念を感じたらしい。そこ

で、自分はジプシイなり悪魔の娘なりに生れて來る光榮を荷つてゐないから箒の知識は持ち合さないが、カルメンシタ御令嬢は市長さんが蠅を追つ拂ふために二人の從者を伴れて御散步になる時には、驢馬とお馴染みになれませうよと言ひ返した。

「いゝわ、そんなら。」とカルメンは答へて、

「煩つぺたに蠅が休む場所をこしらへて進げますよ。碁盤をこしらへて上げるわよう。」

と言つて、目にも止まらぬ早業で、葉卷を切る小刀でその女工の顏にX形の十字を刻み附けてしまつたのです。

事件は全く明瞭なので、私はカルメンの腕を抑へました。

「姐さん。」と、丁寧に、「私と一緒に來て貰はう。」

彼女は、私なら見知つてゐるとばかりに一瞥を呉れて、もう諦めたと言つた風に、

「行くわ、私の肩掛は何處へ行つたでせう？」

彼女は大きな美しい眼だけが見えるやうに、すつかり頭を包んで、羊のやうに柔順に私が引卒してゐる二人の兵隊の後から蹤いて來ました。詰所では、軍曹は、事件が重大だから加害者は監獄署へ送り屆けねばならん、彼女の曳つぱり役は私だと言ふのです。そこで彼女を二人の龍騎兵の間に挾ませて、私は伍長のお役目通りにその背後から蹤いて行きました。私達は町に向つて出發しました。最初の間は彼女は默り込んでゐました。然し、旦那の御存じの、例の蛇街路——その名の如く曲りくねつ

てゐる——へかゝつて來ると、彼女は肩掛を肩から滑らせて、誇らしげな顏を見せて、出來るだけ私の方へ顧り向いて言ひました。

「士官さん、何處へ私を伴れて行くのさア？」

「監獄だよ、お氣の毒さま。」と、私は出來るだけ丁寧に答へた——本物の軍人が、囚人、殊に女囚に對して答へねばならない口調で答へました。

「あゝ！　私はどうなるのでせう！　士官さん、私を憐れんで下さい。貴方はお若くて、非常に御親切です。」

それから聲を落して、

「私を逃がして下さい。私は貴方に卜巫の小石を進げてよら惚れられるのですもの。」と、言つた。それを持つてゐると、貴方は總ゆる女から

（旦那、その卜巫の小石と言ふのは磁石なんです。ジプシイ仲間ではその使用法を知つてさへゐれば魔法が使へると言つてゐます。それを少しばかり水に溶かして女に飮ませると、どんな女でも厭とは言へなくなると言ふのですよ。）

私は出來るだけ眞面目な顏をして、

「こゝで吾々は冗談を言つてはゐられない。監獄へ行かにやならん。それが命令で、如何とも致しかたがない。」

私共バスク人には、西班牙人が聞くと直ぐに悟ることの出來る一種の訛りがあるのです。だが、西班牙人は、「はい。貴方」とさへ言葉を口から出すことは出來ないのです。ところで、カルメンは苦もなく私の生れ故郷を悟つてしまひました。旦那も御存じの通りにジプシイには特有の故郷と言ふものはない、處定めぬ漂泊ばかりしてゐるんですから、到る處の言葉を話します。そして彼等の大部分はポルトガルへ行つても、フランスへ行つても、バスクでもカタロニアでも同じなんです。ムール人の中へ入つてもイギリス人の中へ入つても話が通じます。だからカルメンもバスク訛りをかなりよく知つてゐました。

「まあ！　私の首つたけの士官さん！」と、突然彼女は言つて、

「貴方もお郷里の方ねえ！」

（郷里の言葉つてえのが、ねえ旦那、實に綺麗な言葉でしてねえ、旅の空でそいつを聞かされると胸を刺されるやうなんです。私の懺悔は郷里のお坊さんに聞いて貰ひたいですよ。と、彼は吃やいた。そして、一寸口を緘んで、また話しはじめた。）

お郷里言葉を聞かされて、すつかり感動させられて、私は「僕はエリゾンド生れだよ。」と答へました。

「あら、妾はエッチャラール生れよ。」と、彼女は言ひました。（そこは私の郷里から四時間の旅行で行けるところでした。）妾ねえ、ジプシイに伴れられてセヴィレの町へ來たの。妾は、もう一度阿母

様の傍へ歸りたいとばかり思つて、そのために煙草工場で働らいてお金を儲けてゐたんですわ。私だけしか阿母様のたよりになる者はゐないのです。外には二十本ばかりのサイダーに搾る林檎の樹の植わつてゐる小さい庭園があるばかりです。あゝ！　あの眞つ白く雪の積つた山の近くにゐられるのだつたら！　私が巾着切りや、腐れ玉子を賣り付けるこの國の者でないからつて、女工達はいつも私を馬鹿にしてゐたんですの。それに、私はセヴィレの青二才共が短刀をひからして空威張りをしてみたところで、お郷里生れの、青の大黒帽を被つて、鐵の輪の嵌つた棍棒を持つ兄さん達はびくともしやしないと言つてやつたもんだから、卑劣な女工達はみんなよつてたかつて、私一人を目の敵にしてゐたのだわ……ちよいと、士官さん！　お郷里者の妾を助けては下さらない？」

カルメンは嘘を吐いてたんですよ、旦那。あの女はいつも嘘ばかり吐いてゐたんです。あの女は、生涯の中に一言だつて本當の言葉を言つたことがあるかどうかと私は疑つてゐます。だが、その時、私は女の言つたことが本當だと信じてしまひました。彼女の方が私よりは強かつたのです。彼女は生つ囓りのバスク語で話すのです。でも、私は彼女はナヴレ生れだと信じました。彼女の目と口と顏容はどう見てもジプシイなのです。私は愚弄せられて——氣が狂つて——もう何もかも判からなくなりました。私は私が引卒してゐる二人の西班牙兵が、もしも私共の同郷者に向つて惡口でも言つたら、丁度先刻カルメンが行つたやうに、私も奴等の顏に十字を斬り着けてやるぞとまで考へたりしてゐました。本當に私は醉つぱらひのやうになりました。私は馬鹿げたことを口にするやうになりました。

そして、どんな馬鹿なまねでもやりかねなくなつてしまひました。

「妾がねえ、ちよいと貴官を衝いてさ、それで貴官がわざと轉んで下さりさへすれば、私はそこの新米の兵隊なんかには捕まりやしないんだけど。」と、彼女は言ひました。

事實、私は「命令」なんかは忘れて答へました。

「おやり！　お郷里の孃さん。そして私は郷里の御山の聖母樣の御救ひをお祈りしてみよう。」

その時私達はセヴィレでは到る處にある狹い小路を通つてゐました。すると、カルメンはだしぬけに背向きになると拳を固めて、ドンと私の胸を突きました。私はわざと、じぶんで引つくり返りました。一つ飛びで私を跨いで、彼女は駈け出しました。俗に「バスク女の」脚と言はれてゐる兩脚をすつかり露して逃げ出すのです。それが素的に速いし、また美しい恰好なんです！　私は間もなく起き上つたが、槍で道を塞ぐやうにして、それを横に置いたので、同行の兵隊は彼女を追つ駈ける出鼻を挫かれました。でも私は彼女を追つ駈けるし、私の後からは二人の兵隊が蹤いて駈け出して來ました。だが、拍車だとか、サーベルだとか槍なんかで裝身めしてゐるので、とても彼女に追つ着けやしません！　こゝでその時の話をする時間よりは、よつぽど早い間に彼女は何處へか消えてしまひました。おまけに、この附近の婦達が彼女の肩を持つて逃亡を助けてやつて、吾々をひやかして、道を間違へて敎へて呉れたりしました。さん〴〵走らせられたり、往復させられたりした擧句が、私共は犯人の届け先きの監獄長官の身柄引受證を持たないで、すご〳〵空手で詰所に歸つて來たのです。その態つ

て無かつたですよ！　二人の部下は、罰を逃れようと思つて、カルメンと私がバスク語で會話をしたことや、私程の大の男があんな少女の一突きで轉んだのは不自然だと言ふことを申し立てました。これらのことで私に嫌疑がかゝりましたが、事實これは判り切つたことなんですよ。その日の勤務時間が終つて階下へ下りて來ると、私は位を下げられて一ケ月の營倉へ叩き込まれました。これが入營以來はじめての罰でした。おかげで、すんでのことに、もう、手に入つてゐた軍曹の金條とも緣切れになつちまひました。

入獄後の最初の數日は實に悲慘でした。軍隊に入つた最初の頃は、私はすくなくとも士官まで漕げ付けられると空想してゐました。ロンガでもミナでもます。チャンバランガラはミナと同じく黑人で、旦那のお國へ亡命してゐる男ですが、あれでも大佐でした。彼の弟と私は二十回もテニスを演りましたが、私同樣に素寒貧でした。そこで私は獨り言を言ひました。

「無疵で勤め上げた今までの月日は、今度のことで丸潰れだ。自分で自分に黑星をつけちまつたわい！　今後上官から信用を取り返さうとするには、新兵で出直すのよりも十倍も働かなくてはならない。ところで、俺は何のために罰を受けたのだ？　自分を愚弄してゐるジプシイの小娘のためだ！　そいつの方では今時分は町の何處かの隅つこで何をしてやがるか知れやしない！」

と、言つてはゐるもの〻、私は彼女のことが忘れられなくなりました。旦那はお判りになりますで

せうか――私は彼女が逃げ出す途端に、穴だらけの靴下をパッと見せつけたのが、どうしても眼先きから離れないのです。私は監獄の窓の横格子から覗いて、街路を通るあらゆる婦人を眺めましたが、あの娘ほどの別嬪は一人も通りません。それどころか、私は我を忘れて彼女が私に投げつけた花を、しつかりと握つてゐるのでした。花は干乾びてゐましたけれど、まだ不思議に匂ひが殘つてゐました。もしも魔法使ひなる者が本當にゐるものなら、カルメンはその一人でしたよ。或日のこと、看守が入つて來て私に上等のパンを渡して呉れました。

「おい、お前の從妹からの差し入れだぜ。」と、言ふのです。

私はパンを取り上げました――だつてセヴィレの町には從妹なんかは無いのです。これは恐らく人違ひだらうと考へながら、そのパンを手にしてみると、實に美味さうなんです――非常に清新で善い品でしたから、差出人は誰、受取人は誰なんて考へないことにして食べることにしました。小刀で切りかけると何だか堅いものに當りました。よく調べると、イギリス製の小さい鑢が一本出ました。これはパンを焼く前に竈の中へ入れたものなんです。それからまた四圓金貨が出て來ました。これでも一切なんです。一日の檻禁を避けるために一箇町村へ火を放つ位です。おまけに彼女は敏俊だから、そのパンで一方では看守共を愚弄したのです。一時間もかゝれば、この小さな鑢で一等太い格子でも斷ち切られるし、金貨が四圓あれば近くの古着屋へ飛び込んで、着てゐる獄衣を世間竝の着物に着換

へることも出來ます。旦那にだつて、古郷にゐれば鶫の雛を奪りに、何十遍となく絶壁へ登つたことのある男にとつては、大地から三十呎に足りない窓を飛び込して市中に逃げ出す位のことは維作もないことだとはお判りになりますでせう。だが、私は逃げたくありませんでした。私はまだ軍人としての名譽を保つてゐて、脫獄は非常なる犯罪だと思はれてなりませんでした。それでゐて、女が私を忘れないでゐてくれたこの記念品には深く慨たれました。誰でも牢屋にゐると、外界に友人が一人でもあつて、それが自分のことを思つてゐて呉れると考へるのは嬉しいものなんです。その金貨だけは寧ろ腹が立ちました。どうかして送り返したいと思つたのですが、借し人が何處にゐるのか判りませんのです。それを探し出すのは容易なこと、思へません。

位階を下げられてから、もうこれで厭な思ひをするのは濟んだものと、私は思つてゐました。ろがまだ一つの屈辱が私を待つてゐました。

それは放免になつてから、再び勤務に服して、たゞの一兵卒に落とされて歩哨に立たされた日のことです。すこし氣の利いた奴なら、そんな時にどんな氣持がするか、旦那にはちよいとお判りにならぬでせう。ほんたうに、こんなことなら銃殺に處せられた方がましだ。それならそれで、少くとも小隊の前を單獨で歩くことが出來る、自分は重大なことをやつたのだとは思へるだらう、人々が顔でも見てくれるだらうと思つて、しみ〴〵と情けなくなつてしまひました。

私は大佐の家の門に歩哨に立たされたのでした。大佐は若くて金滿家で、遊び好きな好人物でし

た。若い士官達がやつて來るし、澤山の市民や、婦人や、また、女優連だと言ふことでした――が、多勢遊びに來ました。私としては、町にゐる奴が私をジロジロ見るために相談してやつて來やがるんだと言ふ氣がしました。大佐の馬車が侍女を乘せて着きました。降りて來たのは誰？　ジタニラ（カルメンのこと）だ！　彼女は着飾つて、黃金とリボンで勢一ぱいの華やかさです。金箔づくめの衣裳に、金箔つきの青い靴。滿身には花や金絲です。手にはバスク風の太鼓を持つてゐました。彼女と一緒に二人のジプシイの女が居ました。一人はお婆さんでした。いつでも彼女等には一人のお婆さんが隨いてゐるものなんです。それからギターを抱へたやはりジプシイのお爺さんが一人ゐて、それがギターを彈きながら他の女達を踊らせるのです。上流社會ではよくジプシイの女共を彼等の宴會の席に招いて、ジプシイ獨特のロマリス（踊の名）を踊らせます。また、屢々その外の目的から招くこともあります。

カルメンは私を認めました。私共はお互ひに一瞥を交しました。何故とも知らず、私は足許百尺の下にでも埋れたいやうな氣がしました。

「今日は！　お鄕里の士官さん！　山出しの新兵さんみたいに、今日は番兵さんなのね。」と彼女は言ひました。

そして私が返事をしない間に彼女は家の中へ入つてしまひました。

お客共はみな中庭に集まつてゐました。群がる見物人があるにも拘らず、私は欄杆の間から内部のことを一つ殘らず見るのでした。カスタネットの音も太鼓の音も哄笑も喝采も聞きました。時々私はカルメンが太鼓を抱へたまゝ飛び上る時に、彼女の頭だけを見るのでした。それから士官達が何だか彼女の言つてることに半疊を入れてゐるのを聞くと私の顏は眞つ赤に血の氣が潮すのでしたが、彼女の返事は聞えては來ませんでした。その日からだと思ひます。私は眞劍になつて彼女を戀し始めました。と言ふのは、三四度も私は中庭に突擊して、彼女と冗戲け散らしてゐる、あのキザな士官共を串刺しにしてくれようと思つた位でした。この悶々の苦しみは一時間も續きました。するとジプシイ連中が出て來て、彼女等を送つて行く馬車が曳かれました。カルメンは通りすがりに、彼女一流の――旦那も御存じの――あの斜し目で私をぢいつと見て、低い聲で、

「お鄕里のお方、うまい天麩羅が召し上りたいのなら、トリアネ（町名）のバスティア爺のところへ行つて御覽んなさいよ。」と、言ひました。

彼女は仔羊の如くひらりと馬車に乘ると、駁者は螺馬に一鞭當てゝ、この陽氣な連中を伴れて立ち去りました。何處へ行つちまつたものだか分りませんでした。

お察しにもなるでせうが、步哨の時間が過ぎると、私はトリアネへ出懸けました。だが、その以前に髯を剃らせたり、軍服に刷毛をかけたり、まるで觀兵式に行く時のやうでした。彼女は、ヲラ・バスティア爺の家にゐました。バスティアは古い蜜柑賣りのジプシイで、ムール人のやうに色の黑い爺さんでしたが、町の人達は多勢この家へ魚の天麩羅を食べに出懸けるのです。私が思ふに、それより

も、この家をカルメンが本陣としはじめて以後大繁昌を來したのでした。

「リラお爺さん。」と、彼女は私を見ると直ぐに言つて、

「妾、今日はもうお休みにするのよ。明日だつてあるぢやないの。さあ、いらつしやいよ。一緒に散歩しませうよ。」

彼女は肩掛で顔を包んで私と一緒に街路に出たのですが、私には何處へ行くのやらわかりませんでした。

「姐さん。」と、私は言ひました。

「私が監獄にゐる間に、貴女は私に贈り物をして下さつたですが、お禮を申上げねばなりませんですよ。私はパンを頂戴したですよ。鑢は槍の先きを磨くのに使ひました。そして貴女の記念に大事にしてゐます。だけど、あのお金はこゝにそつくり持つてゐますからお返しします。」

「あら！　お金をそつくり持つてゐたんだつて！」と、彼女は大きな聲で笑つた。

「でもそんなら猶ほ好いわ。今妾は文無しよ。だつて構ひやしない。犬だつて歩き廻れば餓ゑ死はしやしない。いらつしやいよ。みんな食つちまひませう。妾に御馳走をして頂戴な。」

私達はセヴィリアの町へと道をとりました。蛇通りの入口で彼女は一打の蜜柑を買つて、私のハンカチに包んで私に持たせました。少し行つてから、パンと腸詰めとマンザニイラ產の葡萄酒を一本買ひました。しまひに彼女は菓子屋の店へ入りました。そこで私から彼女に返した例の四圓金貨と自

分のポケットにあつた金貨に足して、別に二三の銀貨を一緒にして、勘定臺の上に投げました。終ひには私の有りつたけを吳れと言ひました。私は僅かの小粒しかなかつたのでしたが、全部を手渡ししました。もうこれきりだと思ふと羞しくなりました。彼女は出來れば店支拂をさせる氣だつたと思ひました。彼女は最良で、高價の品ばかり選りとつて——砂糖漬けの卵の黄味だとか、巴旦杏の一種だとか、果物の砂糖漬など——お金の續くかぎりは買ひ集めました。私はそれの紙包みを抱へねばなりませんでした。旦那は多分カンディレホの街路を御存じだらうと思ひますが、あそこには國法嚴守者として有名なるドン・ペドロ王の頭像がありますのです。私共はこの街路の一軒の古びた家の前で止まりました。彼女は路地に入つて行つて階下の戸を叩きました。彼女は最良で、高價の品ばかり選りとつて——砂糖漬けの卵の黄味だとか、巴旦杏の一種だとか、果物の砂糖漬など——お金の續くかぎりは買ひ集めました。私はそれの紙包みを抱へねばなりませんでした。旦那は多分カンディレホの街路を御存じだらうと思ひますが、あそこには國法嚴守者として有名なるドン・ペドロ王の頭像がありますのです。私共はこの街路の一軒の古びた家の前で止まりました。彼女は路地に入つて行つて階下の戸を叩きました。

あの頭像を見たら一寸反省してもよかつたのでした。惡魔の女中そつくりのジプシイの女が、戸を開けてくれました。カルメンは彼女にジプシイ語で何事かを言ひました。お婆さんは初めブツ、サと言つてゐました。しかしカルメンは御機嫌取りに蜜柑二つとボン〳〵一摑みとを吳れてやつて、猶ほ葡萄酒の口を切つて飲ませてやることも許してやりました。その上自分の外套を婆さんに着せてやつて、戸口の處まで伴れ出してから、戸口には横木の閂を下ろしてしまひました。私共だけが殘ると、カルメンは夢中になつて、踊つたり、歌つたりしはじめました。

お前さんは妾の情夫でヨウ——、

妾はお前さんの情婦でヨウ——、

私は部屋の眞中にうんとこしよと紙包みを持たされたまゝ、置き處が判らなくつて佇つ立つてゐました。彼女はそれをみんな床の上に放り出しました。そして私の首に抱きついて叫びました。

「借りは拂ふさ、借りは拂ふさ——これが黑ん坊さん（ジプシイは自分等のことをかう自稱してゐる。）の法律よ。」と。

あゝ！　旦那——その日です！　その日です！　その日を思ひ出すと明日のことなんかは私は忘れつちまうのです！

（ホセは暫らく默つてしまつた。それから、また、葉巻に火を點けて話を續けた。）

私とカルメンとは一日中、食つたり、飮んだり、それから——その他一切のことを爲ちらかしたのです。彼女はまるで六歳位の子供のやうに砂糖菓子を食べると、今度は菓子を握つた手をお婆さんの水瓶の中へ突つ込んで、「清涼砂糖水の製造だよ。」と言ひました。それから砂糖漬けの卵の黃味を壁に叩きつけて——「これは蠅除けでござい。」と言ふ御挨拶。凡そ爲つくさない馬鹿騷ぎと出鱈目が無いと言つた具合でした。私は彼女の踊を所望しました。ところが樂器が無かつたのです。すると、彼女は咄嗟に何の躊躇もなくお婆さんの唯一の皿を取り上げると粉々に壞して、その破片で象牙か黑檀かのやうに拍子をかしく、上手にカタカタと打ち鳴らしながら、ロマリスを踊りました。かう言ふ娘と一緒にゐるのなら、誰だつて退屈しつこ無しでさあ——私は請け合ひますよ！　夜が近づいて來て「營舍へ歸らなけりやならない。」と、私は言つて、

「點呼があるんだから。」

「營舍へ！」と、彼女はシツペ返しに、さも輕蔑したやうに言つて、

「ぢや、お前さんは黑ん坊だわ。そして鞭の先きで追ひ立てられやうつてんだわ！　顏容も氣質も眞物のカナリヤだわよう！　雛鷄みたいな心臟を持つてゐてさあ！」

私は腰を落ちつけました。どうせ營倉送りだと諦めました。ところが、朝になつて、お別れにしようと言ひ始めたのは彼女でした。

「お聞きよ、ねえ、ホセイタ。」と、彼女は言つて、

「お前さんに支拂は濟んだよ——さうだわねい。私共仲間の掟によると、これでもう借りは皆濟だわよ。お前さんは他種族だからさあ。だがお前さんは好い人だつたわ、妾は氣に適つた。私共はこれで別離さ。あばよ。」

私は今度は何時ごろ逢つて呉れるかと聞きました。

「お前さんが、もうすこしお馬鹿さんでなくなつたらねえ。」と、彼女は笑ひながら答へた。そして、少しく眞面目な語調で、

「貴方は、ねえ、妾がすこしばかり貴方に惚れたつてえことは分つたでしよ。だけど、永くは續きやしないのさ。でもお前さんが妾達の仲間に入つて來るのなら、妾はお前さんの情婦になつて上げることよ。だが、これは馬鹿らしいことさ——出來つこなし

だわ。まあ、お聞き、お前さんは割の良い取引をしたんだわよう。お前さんは悪魔にぶつゝかつたんだ。さうよ――悪魔と！　悪魔は黒いものだとは決まつてゐないし、それにお前さんの首を捻ぢ切りもしなかつた。妾は羊の毛を着てはゐるが、それで羊ぢやないんさ。さあ、行つて聖母様の前へ蠟燭をお立て。聖母さんにそれ位のことはして貰つていゝともさ。さあ、あばよをもう一遍。もう二度とこのカルメンシタのことを考へてはいけないよ。そんなことをすると『木足の寡婦』（最後に絞殺せられた男の妻。）にでも娶合はせますよ。」

しやべり止むと、門の横木を外して街路に出て、肩掛に包まつて向うへ行つてしまひました。

彼女は本音を言つたのでした。私はもう彼女のことは考へない方が賢かつたんです。だが、私はカンディレヨ街でカルメンと過した一日のことより他のことは何も考へられなくなりました。終日町をうろつき廻つては、どうかしてもう一度逢ひたいとばかり考へ込んでゐました。私は婆さんや天数羅屋の爺父さんに逢つて、彼女のことを訊きました。二人とも彼女は赤土の國（ポルトガルのこと。）へ行つたと言ひました。これは多分カルメンの差し金を守つて、二人ともさう言つてゐるんだらうと思ひましたが果して二人が虚言を吐いてゐたことが解つて來ました。カンディレヨ街の一日から數週間經つて、私は町の門の一つの歩哨に立たされました。この門から少し離れた處に城壁に破れ目があるので、そこで人々は晝間は通行したのだが、夜間は歩哨が密輸入者の警戒に張番をしました。

その日の晝間私はリラ・パスティア爺さんが私の同僚と何か喋舌りながら詰所の附近をぶらついてゐるのを見ました。同僚はこの爺さんや魚のことにはお馴染みで、またそこの天数羅は今でも美味かつたのでした。爺さんは私に近づいて來てカルメンの消足を聞いたかと問ひました。

「否。」と、私は答へると、

「そんなら直ぐに判りまさあね、大將。」と、言ひました。

果してその通りでした。夜、私は、城壁の破れ目の歩哨に立つてゐました。伍長が引き上げると間もなく、一人の女が私の傍に近寄つて來ました。私は心中カルメンだとは悟つたのでしたが、でも言ひました。

「去れ。こゝを通ることはならんぞ！」

「おや、野暮はおよしなさいよ。」と、自分はカルメンですよと私に知らせて置いてから、かう答へるのでした。

「何だと、お前がカルメンだつて？」

「然うだわ、妾だわよう、お同郷のお方。ねッ、手つ取り早く會話をしないこと？　あんたお金が欲しくはないこと？　荷物を持つた人が五六人この道を通るんだからさ――お通しよ。」

「ならん。」と私は答へて、

「通さすもんかい。苟くも命令だ。」

「命令、命令ですつて！　命令なんて、お前さんはカンディレヨ街では思出しもしなかつた癖にさ。」

「あゝ！」と、その日の追憶に身も心も轉動して、私は答へました——

「あれなら私の勤務を忘れたつて好い。だが、私は密輸入者なんかからお金なんか貰ひたく無い。」

「そんなに密輸入者のお金が要らないつてんならもう一度ドロテア婆さんの家で一緒に食事をすることはどう思つて？」

「ならん。」と半ば氣息を窒まらせて、やつと努めて、

「俺には出來ない！」

「いゝわよう。そんなに頑固で話が判らないんなら、妾には訴へて出るところがあるわよう。お前さんの上役の士官にドロテア婆さんの處へ行きませうよと申し込んでやるわ。あれはお人好しらしいから、お前さんの代りに、見ないことにするやうな物判りのいゝ兵隊さんを番兵にするわ。あばよ、カナリヤさん。命令一下で、お前さんが絞首臺へやられる時には笑つて上げませうよ。」

私は弱氣でした。彼女を呼び戻しました。そして、是非ともと言ふことならジプシイ共を通してやらう、その代りに私が望んでゐる代償を呉れ給へと約束しました。彼女は翌日の會見を約束すると、だん〳〵近付いて來る仲間を呼ぶために、走つて行きました。その仲間は五人で内一人がバスティア爺。一同はイギリスの商品をうんと背負つてゐました。カルメンは見張りをしてゐました。彼女は巡邏兵を見付け次第に彼女の樂器を鳴らして警告するつて約束してゐましたが、その必要もなく、密輸

入者達は苦もなく仕事を仕遂げてしまひました。カルメンは私を待つてゐましたが決して上機嫌ではありませんでした。

翌日私はカンディレヨ街へ出懸けて行きました。

「妾はね、こちらからお頼みしなければならんやうな男は嫌ひなんさ。」と、彼女は言つて、

「お前さんは最初は何も妾に求めるところなく盡してくれたぢやないの。今日はお前さんは妾に駈け引きをしたんだよ。妾は今日何故こゝへ來たのだか氣が知れないよ。もうお前さんのことなどは念頭になくなつてゐたのさ。だから、去つてお呉れ。御骨折のお禮にはお金がこゝにあるから！」

私は將にその金を彼女の顔に叩きつけるところでした。この際、女をひつぱたくのを止めるために、異常な自制をしなければなりませんでした。一時間も議論をした擧句、カンカンに怒つて私は外へ出ました。長い時間の間、私はまるで狂人のやうに、どこゝゝとなく町をさまよひ歩きました。遂に私はお寺に入りました。そして眞つ暗な隅つこを探して、そこに腰掛けてわツと泣き伏しました。突然、聲が聞えて來ました。

「龍騎兵の涙！　その涙で媚藥を作らへてやりたいわ！」

見上げると私の前にはカルメンが立つてゐた！

「ねえ、お同鄕の兵隊さん、貴方はまだ妾に惚れてゐるの。私は一層お前さんを愛さねばならないと思ふのだわ。お前さんが出て行つてから、どうしたわけやら、妾は自分の處置に困つちまつたんだ

から。今度は妾の方が頼み人になつたことわかつて呉れるわねえ。カンディレヨ街路へ行く氣があつて？」

そこで仲直りをしました。だが、カルメンの機嫌と來たら、こゝの天候のやうにかはりやすいので す。太陽がきらきらと照りつけてゐる時が一等嵐が近づいてゐるつていんです。彼女はも一度ドロテア婆さんの家で逢ふと約束したんでしたが、到頭來ませんでした。そして婆さんは澄した顏で、カルメンは商用で（密輸入のこと。）ボルトガルへ行きましたと答へました。

懲りてゐるので、私はカルメンが居さうな處を方々と探しました。また一日に二十遍もカンディレヨ街路を往復しました。或る晩、私はドロテアの家に入りました。私は幾杯も茴香酒の杯を婆さんに振舞つて、それまでにすつかり手馴づけ置きました。そこへカルメンが若い男を伴れて入つて來ました。私の聯隊の若い中尉なんです。

「直ぐお逃げつたら。」と彼女はバスク語で、私に言ひました。私は押し默つて、怒りが心頭に達しました。

「あの兵隊は何をしてゐるんだ？」と中尉は怒鳴つて、

「出ろ、こゝん處から出て行け！」

私は動くことが出來ませんでした。私は四肢が役に立たなくなつたやうな氣がしました。士官は私がびくともしなかつたのを見て、また帽子に手をかけようともしないのを見て、私の襟頭を抓んで激し、揺ぶりました。私はこゝで何を言つたか覺えてゐません。中尉は短劍を拔くし、私も拔きました。婆さんが私の腕を握つたもんだから、中尉は私の前額に一太刀浴せました。その傷痕が今に殘つてゐます。私は一歩退いて、一衝きで、婆さんを床へ突つ轉ばしました。と、中尉は私に押つ蔽さつて來ましたから、私は私の切つ先きを向けると、私の劍の上に彼は彼の體軀を突き差したことになりました。カルメンはランプを消して婆さんに逃げろと言ひました。私はと言ふと、直ぐに街路に飛び出して何處をどう走つたか夢中で驅け出しました。誰だか私の後から來るやうでした。正氣に返ると カルメンが私の傍にゐました。彼女は私の傍を離れませんでした。

「頓間なカナリヤさん。」と彼女は言つて、

「お前さんは馬鹿な眞似をするのがお上手だよ。どうせ、まあいゝのよ、ジプシイの別嬪さんが傍にさて置いたんだが、今それがお判りだらうねえ。だけど、へゐれば萬病退散だわ。お前さんこのハンケチで頭をおこゝの小路で待つてゐるんですよ。妾は直ぐに歸つて來るからさ。」

彼女は出て行くと直ぐに歸つて來ました。私に縞の外套を持つて來て呉れましたが、それを何處で手に入れたのやらわかりません。彼女は私に軍服を脫がせて、襯衣の上から外套を被せました。斯う言ふ扮裝で、顏の傷をハンカチで包んで見ると、セヴィレの町へ密柑水を賣りに來るヴレンチアの農夫よろしくの風態となりました。それから狹い道端れの一軒の家へ私を伴れ込んだのですが、それが

ドロテア婆さんの家とそつくりなんです。彼女ともう一人のジプシイ女が私の傷口を洗つて、重醫よりはよほど上手に手當をして、或る飲み物を呉れました——それが何だか判りませんでした。それから蒲團に寢せつけました。私は熟睡しました。

女達はその飲み物に鎭靜劑を入れたらしかつたと言ふのは、翌日遲くまで私は眼が覺めませんでした。起きると頭痛が激しくて熱さへあるやうでした。暫らく經つと、前夜私が一役引き受けたあの恐ろしい芝居の出來事を思ひ出しました。

傷の繃帶を爲換ると、カルメンとその友達は二人とも私の蒲團の側にしやがみながら、二言三言の俗語で話しました。それはどうやら私の看護に就いての相談らしくありました。二人は私が直ぐに癒ると言つてくれました。だが、セヴィレの町を逃げ出さねばならぬことは絶對的に必要なことでした。それも出來るだけ早くしなければなりません。もしも捕まつたら確かに銃殺に處せられます。

「ねえ、お前さん。」とカルメンは言つて、「お前さんはどうにかしなくてはならない。王樣がお米も鹽鱈も呉れなくなつた今となつては、何か生きて行く道を探さねばならない。お前さんは頓間だからね。氣の利いた泥坊にはなれつこなしだ。だが敏捷くつて力があるんだよ。だからさ、度胸を決めて海岸へ出て密輸入者におなりよ。妾はお前さんに絞首臺行きにして上げると言つたでせう。その方が銃殺よりはよつぽどましだよ。それに自身の警戒さへ覺えてしまへば、義勇兵や巡邏隊に捕ツつかまるまではお大名暮しだよ。」

少女のやうな惡魔が私の新生涯を私に敎へながら、私の運命の烙印を押してしまつたのはかう言ふ風な具合でした——且つ、眞實のことを言へば、死刑に相當するやうなことを爲出來した今となつてみれば、私の前に開けた唯一の生活はそれしかなかつたのです。申し上げる必要もありませんが、彼女は苦もなく私を口說き落しました。こんな無謀な、また、不敵な生き方によりて、私と彼女は一層の深みに陷り込んで行つたやうに思はれました。これから後は私に對する彼女の愛情は確實だと自信しました。私は折り〳〵噂では、アンダルシヤの野山を良馬に跨がり、愛人を馬の尻に乘せて、鐵砲片手に橫行する密輸入者があることを聞きました。で、私はもうこの美しいジプシイ女を從へて山越し谷越しをする自分の姿を描いてゐました。このことを彼女に話すと、彼女は腹を抱へて大笑ひをして、三つの輪を組んだ上に毛布を掛けて出來上るテントの下へ、情夫が各自一人づつの情婦を伴れ込んで、露營で過す一夜ほど樂しいものはないと話すのでした。

「お前と一緒に山の中へ入り込んでさへしまへば、私はお前を確實に手に入れたことになるんだ。」と私は言つて、

「山にはお前を配け取りしようと言ふ中尉も居ないからね。」

「あらお前さんは妬いてるのかい。そんな心配はつまんないぢやないの。どうしてさうも馬鹿なんだらう！　私がお前さんに惚れてるのが解らないのかい。妾はお前さんにお金なんかをねだつたことがないぢやないか？」と、彼女は答へるのです。

こんな風に言はれると、私は女の首を絞めてしまひたくなるくらゐにまでゾク〳〵と嬉しくなるのでした。

お話を端折ることにしませう。カルメンは町の人並の着物を私に整へて呉れて、私はそれを着込んで、こつそりと人目を避けてセヴィレの町を逃げ出しました。私は一人の茴香酒賣りに宛てた、バスティア（爺）の手紙を懐ろにしてエレズ（地名）へ行きました。この宛名の男の家が密輸入者の集合所になつてゐました。私はその連中に紹介せられました。その頭目はダンカイレと呼ぶ男で、私を仲間に加へてくれました。吾々はガウシン（地名）に出發しました。豫て打ち合はせてあつた通りに、私はそこでカルメンと落合ひました。仕事をする時には、彼女は間諜の役を勤めてゐましたが、彼女以上の敏腕家はありませんでした。彼女はジブラルタルから歸つて來たのですが、或る船の船長と協定して、イギリスの貨物を陸揚させることに決めて、吾々はその貨物を海岸で待つと言ふ手筈になりました。吾々はエステボナ（地名）附近で船が來るのを待つてゐました。貨物の一部分は山に隱匿して、殘りはロンダへ搬びました。カルメンは先發してゐました。それから彼女はもう一遍歸つて來て町へ持ち込む時刻を知らせました。この最初の冒險と次ぎの二三はまんまと成功しました。密輸入者の生活は兵隊よりは私の氣にいりました。私はカルメンに贈り物をしました。お金はあるし情婦もあるしでした。悔恨などの感じは毛頭もありませんでした。ジプシイの諺の通りに、「快樂の痛痒さはちつとも痛痒くない」のでありました。吾々は到る處で歡迎を受けました。仲間の者は私を好遇し

てくれて、中にはいくらか私を重んじてくれる者もありました。と言ふ理由は、私は既に人を一人殺したからで、仲間にはこれに似た手柄話しを持ち合はさない奴がゐなかつたからです。が、そんなことにも勝りて、この私の新らしい生涯の中で有力な魅力となつたのはカルメンと屢々逢へることでした。彼女は以前に優つた戀情を私に示してくれましたと言ふ風をすることを禁じて、仲間に對しては一言でも二人の情合ひの問題を口にしてはならないと、いろ〳〵の方法で誓ひを立てさせました。私は全然この女の前では弱氣でしたから、彼女の總ての出鱈目に服從しました。且つまた、この女が堅氣な娘の「しをらしさ」を見せてくれたのはこれが初めてのことだつたので、彼女は昔の出鱈目をすつかり放棄したのだ、と信じたくらゐにまで、私は馬鹿正直でありました。

吾々の團隊組織は八人か十人かでありましたが、肝心な時と場合にだけ集まるのであつて、日頃は二三人一組みで方々の村落や町に散らかつてゐました。それ〴〵職業を持ち商賣をしてゐる風を裝つてゐました。鑄掛屋もゐるし、博勞もゐました。私は行商人に化けました。だけど、私は町場へは出掛けませんでした。セヴィレの例の事件があつたからです。或る日、と言ふよりは、或る晩のこと、吾々の仲間はウェガの麓で落合ひました。ダンカイレは大元氣でした。

「直ぐに、もう一人の仲間が來るぜ。」と彼は言つた。ダンカイレと私とは他の者よりは一足先きにそこへ着きま

「カルメンは素晴らしくうまい手段を出したでなあ。奴さんはタリファ（地名）の監獄から、奴さんのロム（情夫の意）をどうやら脱獄したんだぜ。」

この頃、私もジプシイの訛が解りかゝつて來てゐました。仲間が大方それを使つてゐたからです。で、ロムと聞くとぞつとして身の毛がよだちました。

「なにッ！　カルメンの亭主！　亭主があつたのかい？」と私は聞きました。

「あるとも。あの女のやうに喰へないジプシイで、「片目ガルシャ」つてい野郎だが、氣の毒に食ら ひ込んでゐたんだ。カルメンはうまく立ち廻つて、軍醫をちよろまかしたので、情夫は自由になるこ とが出來た。實に、どうも彼女と來たら全身が黄金と言つた價値だよ。この計畫をめぐらしてから二 ケ年だが、掛りの士官が轉任するまではどうにも手が出せなかつた。それが、交替があつたので、奴 め素早く話を付ける手段を見付けたものらしい。」

この消足をどんな氣で私が聞いたか御想像に任せます。間もなく私は「片目ガルシャ」に逢ひました。奴こそ最兇最惡のジプシイ型で、色も黑いが根性はそれ以上に黑いといふ代物でした。私が生涯中で二度と逢つたことのない無類の惡黨でした。カルメンは彼と一緒に來ました。そして、彼女が彼を私の面前で情夫扱ひにして話をする時には、いつも私に彼女特有の「目の合圖」をして、彼の背後では顏を顰めました。私は腹が立つて、その晩は一言も彼女に口をきゝませんでした。朝になつて荷作りをして、將に出發しかけんとすると、十二人の騎馬隊が我々を追つかけて來ました。日頃、盛ん

に血凄ぐさい氣焰を揚げてゐるアンダルシヤ人共は、いざかう言ふ場合になつて來ると、からつきし意氣地がなくなつて、周章て狼狽いて、我れ勝ちに逃げ出すのでした。こゝで取り亂さないでゐたのは、ダンカイレ、ガルシャ、レメンダドと呼ぶエジヤ生れの青年及びカルメンだけでした。他の奴等は騾馬を棄てゝ、溪谷の間に逃げ込みました。そこなら、追つ驅けやうにも騎馬では入られないのです。私共も長く騾馬に未練を殘してはゐられませんでした。私共は大急ぎで戰利品の中から高價なやうなものだけ拔き出して、肩に背負つて驅け出しました。それから岩を越え、嶮しいでこぼこだらけの急傾斜に沿つて逃げ延びることにしました。荷物を轉がして置いて、精一杯の速力でその後を追ひながら踵で滑るのです。この間に騎馬隊は吾々を的ひ擊ちました。ヒユーッと耳許を飛ぶ彈丸の音を私は初めて聞きました。そいつを聞くと氣が氣ではありませんでした。女房の一人でも持たうかと言ふ心掛けの若者には、生命を堵けて聞いて見ようつていものではないのです。憐れなレメンダドを除いて一同は逃げました。彼は腰に一發打たれたのでした。その時、私は荷物を投げ出して彼を助けに行くと、

「間拔け！　死者をかまつてゐられるかい？　荷物を持ちやがれ。その木綿の靴下を捨てることはなんねえぞ。」とガルシャが叫びました。

カルメンも「うつちやつてお置き。」と私に言ひました。

疲れ果てゝ、止むを得ず私はレメンダドの死體をある岩蔭の根に置きました。ガルシャは進み出

て、この青年に鐵砲を打ち始めました。

「かうして置けば、誰が見たつて見別けられつこ無しだ。」と、十二發の彈がめちやくちやに打ち碎いたその青年の顏を見下して言ひました。

こんなやうな生活が、旦那、私の生活でした。夕方、疲れ果てゝ、食ふ物もなく、驟馬を失くしたためがつかりして、或る灌木林にたどり着きました。それから何かこそ〳〵話でもするやうな風をして、氣乘りますか？　ポケットから一組のカルタを取り出すと、焚火に照らされてダンカイレを相手に賭博をしはじめました。その間、私は横になつて星を見てゐました。憐れなレメンダドのことを思ひ出して、彼の運命と入れ替りになつた方がよかつたと考へました。カルメンは私の傍に身を跼めて、時々何か歌ひながら樂器をかきならしてゐました。それから何かこそ〳〵話でもするやうな風をして、氣乘りしない私に二度も三度も接吻しました。

「お前は惡魔だ。」と、私は彼女に言ひました。

「さうともさ。」と、彼女は答へるのです。

數時間休んでからカルメンはガウシンへ出發しました。朝になると山羊飼ひの少年がパンを運んで呉れました。私共は一日中同じ地點に居て、夜を待つてガウシンの方へ出懸けました。吾々はカルメンの消足を待ちましたが、何も聞きませんでした。翌朝、一人の驟馬曳きが、立派な裝をしてバラソルを手にした一人の貴婦人と、一見その侍女と思はれる一人の少女とを案内してやつて來るのが見えました。

「驟馬が二頭と女が二人よ、それがサンタクロースさんからこちとらへの進物と來らあ。ならうことなら驟馬が四匹欲しいな。だが、まあ、いゝ。お手のものだ。」

と、ガルシャは私共に話して、小銃片手に小徑を下つて草叢の中へ身をかくしました。ダンカイレと私は少し離れて彼の後から尾いてゆきました。吾々の彈丸が屆くところまで一行が來るのを待つて、私達は躍り出して、驟馬曳きに「止まれ」を喰はせました。女が驚くと思の外——だつて吾々の風態は充分驚かすに足るものだつたのです——わつと聲を立てゝ笑ひ出しました。

「あら、まあ、お馬鹿ちやん。妾を素人と思つてるんだよ！」

それはカルメンでした。餘りうまく變裝してゐるので見別けが着きませんでした。もし外の言葉を使つて話したのなら、どうしても判らないところでした。

彼女は驟馬から下りて、ガルシャとダンカイレとに低い聲で話しました。

「カナリヤさん。お前さんが絞首される前にもう一度逢へますよ。妾は仕事の都合でジブラルタルへ行きますがね。直ぐに私のことを聞かして上げるから。」

彼女から、吾々の數日の隱れ家が見付かる場所を敎へてもらつて別れました。すると間もなく彼女から若干のお金が屆くし、またお金よりは更に尊い指令を受け取りました。それはジブラルタルからグラナダへ向けて、斯々の道を通つて、二人の英國の貴族が通ると言ふのでした。賢き者には一言で

ました。

「驟馬が二頭と女が二人よ、それがサンタクロースさんからこちとらへの進物と來らあ。ならうことなら驟馬が四匹欲しいな。だが、まあ、いゝ。お手のものだ。」

と、ガルシャは私共に話して、小銃片手に小徑を下つて草叢の中へ身をかくしました。ダンカイレと私は少し離れて彼の後から尾いてゆきました。吾々の彈丸が屆くところまで一行が來るのを待つて、私達は躍り出して、驟馬曳きに「止まれ」を喰はせました。女が驚くと思の外——だつて吾々の風態は充分驚かすに足るものだつたのです——わつと聲を立てゝ笑ひ出しました。

「あら、まあ、お馬鹿ちやん。妾を素人と思つてるんだよ！」

それはカルメンでした。餘りうまく變裝してゐるので見別けが着きませんでした。もし外の言葉を使つて話したのなら、どうしても判らないところでした。

彼女は驟馬から下りて、ガルシャとダンカイレとに低い聲で話しました。

「カナリヤさん。お前さんが絞首される前にもう一度逢へますよ。妾は仕事の都合でジブラルタルへ行きますがね。直ぐに私のことを聞かして上げるから。」

彼女から、吾々の數日の隱れ家が見付かる場所を敎へてもらつて別れました。すると間もなく彼女から若干のお金が屆くし、またお金よりは更に尊い指令を受け取りました。それはジブラルタルからグラナダへ向けて、斯々の道を通つて、二人の英國の貴族が通ると言ふのでした。賢き者には一言で

充分！　その二人はお金をたんと持つてゐたのです。ガルシャは二人とも殺すと言ひ張つたのでしたが、私とダンカイレはさうまでしなくつてもと言つてもと言つて反對しました。で、金と時計と襯衣とだけ奪りました。中で、襯衣は一等必要に迫られてゐたのでした。

旦那、人間は知らず識らず惡黨になつて行くものです。

ために鬪ひます。災難が度重なつて、山の生活から脫けきれなくなつて、密輸入者がいつとはなく强盜に轉換してゐました。私共は英國人事件からジブラルタル附近に居てはいけなからうと言ふことにした。いつぞや旦那は、ホセ・マリア（こゝのホセ・ナヴロとは別人）のことをお話しになりましたね。私が彼と知り合ひになつたのはそこでした。奴はなつて、ロンダの山奥に身を隱すことになりました。

仕事に行くのには、情婦を伴れ歩く男でした。それが別嬪で、立居振舞の節度がよろしく、不貞腐れを言はない、素的な亭主孝行！——にも拘はらず、野郎の方ではひどく虐待してゐました。野郎はしよつちう娘の尻を追つかけてゐて情婦をいぢめまはしてゐる癖に、時には妬いても見せるのです。一度は短刀で斬りつけました。でも、女は一心一向に男に惚れてゐました。それが女の道で、殊にアンダルシヤ婦人はかう言ふ風に出來てゐました。その女は腕の傷痕を全く自慢の種にして、世界で一番美しいものゝやうに見せびらかしてゐました。それから、また、ホセ・マリアは仲間に對しても珍らしい性質の惡い男でした。或る時私共と共同で仕事をやつた時など、うまく立ち廻つて、利得は自分が丸取りにして、損はみんな吾々に着せたことがありました。だが、話を元へ戻しませう。私共はその後カルメンから消足がなかつたもんだから、ダンカイレが言ひました。

「このうちの一人だけはカルメンの消足を聞きにジブラルタルへ行かねばならない。彼女は何かそこで仕事の支度をしてゐるにちがひない。私が進んで行くところだが、あそこでは餘り顏が賣れ過ぎてゐる。」

すると片目が言ひました。

「俺も然うだ。海老共（英國人のこと）には今までの俺の惡戲が利きすぎてる。おまけに俺は片目と來てるから人目につき易い。」

「ぢや、俺が行かう。」と、私は順番だから言ひました。心ではカルメンに逢へるのが嬉しかつたのです。「ところで、どうすれば好いんだい？」

二人は、

「兎に角、どう辿つたつてもいゝからサン・ロックへ出ろ。そしてジブラルタルへ着いたら、ロロナと言ふチョコレート賣りの婆あが居る處を探し當てろ。婆さんが見付かつたら、何事があつたか判るんだ。」

と、答へました。

吾々はガウシンの山奥へ出懸けること、、そこで私だけ二人に別れて、果物賣りに化けてジブラルタルへ行くことに話しをきめました。ロンダで仲間が私に旅行券を手に入れて呉れました。ガウシン

で一匹の騾馬を貰ひました。それに密柑やメロンを積んで私は出懸けました。首尾よくジブラルタルへ着くと、ロロナ婆さんは相當に名を賣つてゐることを知りました。だが、その本人は死んだものやら絞首臺へ送られたものやら、わかりませんのです。これではカルメンと連絡が絶えたも同然と私は考へました。私は騾馬を厩舎に繋いで、密柑を擔いで、それを賣り歩く風をして、町を歩き廻りました。しかし、實際は誰か知つてゐる者に逢へやしないかと思つてゐました。ジブラルタルと言ふ處は無數に札つきが集まる處で、世界各國の食ひ詰め者が皆寄つてゐます。まるで混亂の塔と言つた具合で、街を十歩行けば十ケ國の語が聞かれます。從つて、澤山のジプシイとは逢ひましたが、どうも彼等を信用することが出來ませんでした。私にも判るし、向うでも判つてゐました。雙方同じ仲間だとは判つてゐたのでした。二日ばかり無駄骨を折つて、探し廻つてみても、遂にロロナのことも、カルメンのことも判らず終ひになりました。では何か置物でもして仲間のところへ歸らねばならんかしらと考へながら、日暮れに或る町を歩いてゐると、一軒の窓から、「密柑屋さん。」と呼ぶ女の聲がしました。ひよいと見上げると、露臺の上の欄杆に凭れてゐるのは正しくカルメンで、その傍には緋の軍服と金の肩章、髪を縮らせた堂々たる風采の貴族らしい士官がゐました。カルメンは？　と言ふと、これも素晴らしく着裝つて、肩には肩掛、頭髪には金の櫛、絹布にくるまつてゐて、相變らず狡猾で——平日のやうに大きく笑つてゐました。英國の士官は未熟な西班牙語で、登つて來てくれ、奥樣が密柑を欲してゐると言ひました。カルメンはバスク語で、私に、「おいで、何も驚かなくていゝ。」と

言ひました。彼女の爲ることには私は驚きませんのです。で、彼女とこゝで再會したのは嬉しいのかがつかりしたのか、私には判りませんでした。春の高い、白粉を塗つた從者が出て來て、私を立派な客間へ案内してくれました。カルメンは直ぐにバスク語で私に話しました。

「いゝかい、お前さんは西班牙語はちつとも判らないことにして、妾とも知り合つてゐないことにするんだよ。」

かう言ふと、英國人の方へ向いて言ひました。

「この男がバスク人だつて、私が貴官に言つた通りでせう——妙な訛ぢやありませんか。何と言ふ間抜け面をしてゐるんでせう？　納屋へ追ひつめられた猫つてえ面でせう。」

「そんなら、手前は。」と、私はバスク語で、

「面の皮千枚張りのお轉婆だよ。手前の旦つくの眼の前で、手前の面の皮を引んむいてくれるぞ。」

「私の旦那だつて！」と、彼女は叫んで、

「それがまあ、お前さんの力で發見した全部なのかい？　そして、この海老助（英國人のこと）を妬いてゐるんだね？　まあ、呆れた！　ほんとにお前さんはカンディレヨ街で逢つた時の以前よりは一層お馬鹿さんにおなりだつた。解らないのかい——お馬鹿さんとは言ふものゝ——妾はね、これでちやんと仕事をしてゐるんだよ。それも素晴らしく鮮やかな手段を使つてなんだよ。この家は妾のものさ、またこの海老助の金貨も妾のものさ。妾は奴の鼻つ先きをとつて引き廻して、二度とは逃げ出せないところ

へ伴れ込んでやるんだよ。」と、言ひました。
「そんなら俺だつて。」と、私は答へて、
「お前が仕事だ、仕事だと言ふ建て前から、かうも冗戯け散らしてゐるんなら、二度と再び働けないやうに、ぎやふんと言ふ目にあはして呉れるからさう思へ。」
「あら、まあ！　お前は妾に指圖がましいことの出來る情夫だつたかしら？　私は片目一人で澤山だよ。こゝでお前は何を見たと言ふの？　自分で妾の『好うちやん』と言はれる唯一の者だと思つてゐればそれで澤山ぢやないか？」
「何を言つてゐますのですか？」と、英國の士官が聞きました。
「咽喉が渇いてゐるつてんです。どうか一杯飲まして下さいと言つてゐます。」と、カルメンは答へて、長椅子の上に身を投げると、自分のこの通譯振りをどつと笑ひました。
旦那、カルメンが笑ふときには道理を話したつて駄目です。誰も彼も一緒になつて彼女と笑ふので す。大男の英國士官も、まるで阿呆のやうに、一緒になつて笑ひました。それから從者に飲み物を私に持つて來てやつてくれと命じました。
私が飲んでゐると、カルメンが言ひました。
「海老助の指の指輪がお判りかい？　お前さんが欲しいのなら上げるわ。」
然し私は答へました。

「俺達が鐵輪の棍棒を一本づつ手にして、こいつを山の上に立たせることが出來るのなら、指の一本やそこらは當方から呉れてやるとも。」
士官は、
「マキラ？　マキラとは何のことでありますか？」と、聞きとがめました。
「マキラですつて！」と、カルメンは大きな聲で言つて、笑ひながら、
「マキラつていのは密柑のことですわ。妙な言葉ぢやありませんか？　奴さんは旦那に密柑を食べて頂きたいと言つてゐますのよ。」
「さうですか？」と士官は答へて、「大層よろしい、明日もつと澤山のマキラを持つて來て下さい。」
私共が話してゐると、從者が來て食卓が出來たと言ひました。すると、英國人は腕をカルメンに差し延ばし、私に銀貨を一枚握ぎらせました。カルメンは楚々として、恰も一人では歩けないと言つた風です。彼女は始終笑ひながら、私に言ひました。
「ねえ、ちよいと。今日は食卓へはお前さんを案内することは出來ないのよ。だが、明日兵營の太鼓が鳴り次第に密柑を持つて來るんだよ。カンディレヨ街の時よりはずつと立派に部屋を整へて置きますよ。そして妾が相變らずお前さんのカルメンシタだつたつてわかるわ。それから、一寸ねえ、仕事の相談もあるしねえ。」
私は返事をしませんでした。直ぐに町へ下りました。すると、英國の士官は、「明日、マキラ、持

つて來て下さい。」と、言ひました。カルメンはまた大きな聲を立てゝ、笑ひました。

私は飛び出しました。何處へ向つて、何をしたんだか夢中でした。夜もろく〳〵眠れないで、朝はしきりに腹が立つてなりませんでした。もう彼女とは逢はないことにして、ジブラルタルを發つてしまはうかと思ひました。だが、太鼓の音が鳴り始めると、總ての力が拔けてしまひました。私は密柑の籠を抱へて、カメルンのところへ急いで行きました。彼女の窓の扉が少し開いてゐて、彼女の大きな眼が私の方を覗いてゐるのが見えました。白粉を塗つた從者が私を案内しました。カルメンはその從者に何か使ひを言ひつけました。二人だけになるが早いか、彼女は例の鰐のやうな高笑ひを爆發させて、私の首つ玉に囓りつきました。私はこの女を斯うも可愛いと思つたことはありませんでした。花嫁のやうに着飾つて、香水を塗つて、高價な家具と絹の壁飾り——あゝ！　それに引き較べて、私は泥坊そのまゝの風姿でした！

「好うちやん！」と、カルメンは言つて、

「私はこゝで、何も彼もたゝき壞してやりたいんだよ。こゝへ火を放けて、お山へ逃げ込みたいんだ！」

それから抱擁、そして哄笑！　彼女は踊つて、着物を引き裂きました。猿だつて、こんなに躍り上つたり、顰めつ面をしたり、惡巫山戲はしませんでした。やがて、眞顏にかへつた時、彼女は言ひました。

「お聞き。仕事の話をしますよ。妾はね、あの海老助をロンダまで連れ出すつもりさ。あそこには私の妹が一人居てね、——尼さんになつてゐる。（と、一層大きく笑つて）そのとき私達は、後でお前さんに知らせるが、或る場所を通るのさ。お前さん達は奴さんを襲つて、剝がしてしまふのさ。一層のこと斬殺した方がいゝんだがねえ、だが。」と、どうかした時に彼女が表はす、例の惡魔的な、他人にまねられない微笑を漏らして——「お前さんは、しなければならないことを御存じかい？　片目を最つ先きにお出し。お前さんは少し背後に居たがいゝ。海老助は膽つ玉が据つてゐて、腕も達者だよ。上等のピストルを持つてゐるしねえ。お判りかい？」

彼女はまた大笑ひをして言葉を切りました。私は慄然としました。

「いけない！」と、私は答へて、

「成る程俺はガルシャを憎んではゐる。だが、仲間だ。何時の日か奴をお前のために無き者にする時は來るであらう。だが、その淸算は俺の國の方式通りに決めてからにしたい。俺はふとしたことから密輸入者になり下つてはゐるけれど、どこまでも純粹のナヴロ人であらねばならない。諺にもある通り、『竹を割つたナヴロっ兒』だぜ。」

彼女は答へました。

「お前はお馬鹿さんだよ——阿呆で——ほんとの異國人だよ。自分の吐く唾が遠くへ飛ぶからと言つて、大男だと買ひ被つてゐる小人さんだ。お前は私を愛してはゐないんだ——出て行つてお呉れ！」

彼女の方から出て行けと言はれると私は出ることが出來ません。私は出發すること、仲間を伴れて引き返すこと、英國人を待ち伏せすることを約束しました。彼女の方では、ロンダに向つてジブラルタルを去る時が來るまでは假病を使ふのだと約束しました。で、私は二日間ジブラルタルに滯在しました。彼女は厚かましくも變裝して、私の宿へ私に逢ひに來ました。私はまた私の考へがありました。私は英國人とカルメンが通る場所と時とを敎はつて、吾々の溜り所へ歸りました。ダンカイレとガルシャとが私を待つてゐました。私共は綺麗に燃える松笠の焚火に照らされて、森の中で夜を過しました。私はガルシャにカルタを挑みました。彼は承諾しました。二回目の時に、私は彼が瞞着したのだと言ひました。彼は笑ひました。彼は小銃に手をかけましたが、私はそれを踏んまへて叫びました。

「貴樣はどんな若者とも短刀を振り廻すと言ふ話だが、一番俺を向うに廻してやつてみろ。」

ダンカイレは吾々を引き分けようとしました。私は早くも三つ四つ拳固をガルシャに喰らはせました。彼は短刀を抜きました。私も抜きました。私共はダンカイレに介添人に立つてくれと言ひ渡し尋常に勝負をするのを見てくれと言ひました。彼は止めだては出來ないと見て取つて退きました。ガルシャは既に二十日鼠に飛びつく猫のやうに身を屈めて左手で帽子を摑んで楯とし、短刀を右に眞直ぐ突き延べました。それはアンダルシヤ式の構へです。私はナヴロ人らしく立つて、彼の眞正面に左手を揚げて左足を延ばし、短刀を右の腰脇にして構へました。私は巨人よりも強いと意氣込みました。彼は電の如く飛びかゝつて來ました。私は左足でくるりと體軀をかはしたら、彼は空を突きました。私の短刀は餘りに深く突き刺したので、私の手は彼の顎の下へかくれました。私は力を籠めて短刀を引いたので折れました。萬事休す！　刀身の折れが、腕位の太い血潮がほとばしるとき一緒に流れ出ました。彼は丸太の如く突つ伏しました。

「どうしたんだ？」と、ダンカイレが言ひました。

「聞いてくれ。」と私は言つて、

「吾々二人は兩立出來なかつたんだ。俺はカルメンに惚れてゐて、俺だけ一人になりたかつたんだ。おまけに、ガルシャは兇猛だ、俺は奴があの憐れなレメンダドをどんな扱ひにしやがつたかを忘れられないのだ。今となつては吾々は二人つきりだ。だが吾々は善い人間なのだ。おい、俺と友達になつてくれるか——生きるも、死ぬるもだ！」

ダンカイレは手を差し延ばした。彼は五十歳の男であつた。

「色の戀のつて惡魔に呉れつちまへだ！」と、彼は叫んで、

「カルメンがそんなに要るのなら、さう言つて賴めばガルシャは銀貨一枚で賣つてくれたんだ。だが二人つきりになつたなあ——明日はどうする？」

「明日のことなら俺が引き受けた。」と、私は答へて、

「もう、世界を束にして來たからつて庇ともねえや！」

私共はガルシャを埋めて二百歩ほど遠い處で露營しました。翌日、カルメンと英國人が二人の騾馬曳きと下男を伴れて通りかゝりました。私はダンカイレに言ひました。

「俺は英國人に向ふから、お前は外の奴をおどかしてくれ。飛道具は持つてゐない。」

英國人はしたゝか者でした。もしもカルメンが奴の腕に一突き與へないでゐたら、私は擊たれるところでした。

簡單に申しますと、その日から私はカルメンを再びものにしました。そして、その時、私が彼女に最初に言つた言葉は、お前は寡婦になつたのだぞと言ふことでした。彼女はことの仔細を聞いてから言ひました。

「お前さんはいつになつてもお坊ちやんだよ。ガルシャはお前を殺してた筈だよ。お前のナヴレ式の構へなんて馬鹿々々しいよ。ガルシャはお前よりは數等の腕達者を何人となく殺してゐるんだよ。つまり、奴さんの年貢の納め時が來てゐたのさ。いまにお前さんの時が來らあね。」

「お前の時も來るぜ。ほんとに私の情婦らしくしてゐないと。」と、私は答へました。

「いゝともさ！」と彼女は答へて、「妾は珈琲の滓で幾度となく卜なつて知つてゐますよ。私達は一緒に死ぬる罫が出てゐますよ。撒いた種子なら刈らずばなるまいさ！」そして、何か氣分のむしやくしやする時に、それから脫れ出ようとして、何時もやる習慣通りに、カルメンは樂器をかき鳴らしました。

人は自分のことを話す時には兎角他人のことを忘れ勝ちになります。こんな風なこまかな話は確かに旦那には退屈でしたでせう。だが、直ぐにこの話も終りです。私共の暮らした生活は長く續くことでせう？　ダンカイレと私とは以前よりは一層賴もしい數人の仲間を加へて、協力しました。吾々は密輸入をやつてゐました。正直を申すと、時には追ひ剝ぎもしました。だが、それは最後の手段で食つて行けない時だけでした。また、私共は旅人に手荒なことはしないで、お金だけ奪ることに堅く決めてゐました。

二三ヶ月は私はカルメンと一緒に幸福でした。彼女は私共の仕事をするのにいつも役に立つて、吾吾が搔つ攫ふのに適當な品物がある毎に注意してくれました。彼女は時にはマラガに、時にはコルドワに、また時には私から一言言へば、何處からでも何を置いてもやつて來て、人里離れた木賃宿へでも、露營へでも來て私に逢ひました。たゞ一度だけ、マラガでしたが、彼女は私に氣をもませたことがあります。私は彼女が或る富豪に目をつけてゐることを知りました。その富豪に對して、恐らくは例のジブラルタルで行つた手段を繰り返す計畫らしかつたのです。ダンカイレが止めだてするにも拘らず、私は彼女の後を追つて、白晝マラガへ飛び出しました。カルメンを探し當てると、有無を言はさず伴れて歸りました。「お判りかい。」と、彼女は言つて、二人は激しく言ひ合ひをしました。

「お前が妾の情夫になつてから後は、妾はお前の好うちやんであつた時よりは惚れてゐないんだよ。私は苦勞を背負はされたり、命令されたりしたくはないんだよ。私の望むのは自由で氣儘に振舞ひたいんだよ。氣をお注けよ——あんまり妾を壓迫してはいけないよ。餘り妾を困らせると、私は誰でもお前がガルシヤをあはせたやうな境遇に、お前を逢はせるやうな男をつれて來るんだよ。」

ダンカイレは私達を和めました。然し吾々はもう心から消し去ることの出來ないことを言ひ合つてしまひました。二人はもう昔のやうな仲よしにはなれませんでした。それから暫らく經つと運の惡いことが起きました。兵隊に襲はれたのでした。ダンカイレと仲間二人とが殺されました。また二人は監獄へ入れられました。私は重傷を負はされました。そのとき、私の駿馬がゐなかつたら私だつて兵隊の手に捕へられたのでした。全くへとへとに疲れ果てた上に一發食はされたまゝ一人の仲間と森の中へ驅け込みました。馬から下りると、正氣を失ひました。俺も、草叢で命を落す手負ひ兎と同じだなどと考へました。仲間は豫て知つてゐた洞窟へ私を入れました。そして、カルメンを探しに行きました。彼女はグラナダにゐましたが、直ぐに引き返して來ました。十五日間、彼女は私の傍を離れませんでした。彼女は眼も閉ぢませんでした。彼女はどんな婦人でも、最愛の男に對して表はし得ないやうな熟練と注意とを以て私を看護してくれました。私が立ち上ることが出來るやうになるや否や、彼女は私を再びグラナダへこつそりと攜んでくれました。ジプシイは到る處に安全な宿を探し得るのです。私は、私を探してゐる市長の家から二軒目の家で六週間以上も過しました。一度ならず私は窓

の蔭から市長が通るところを見ました。遂に私の健康は回復しましたが、その病床にゐる間に私はかなり考へさせられて、この生活から足を洗はうと決心しました。私はこれをカルメンに話して、西班牙を逃げ出してアメリカの新領土に渡つて、眞面目な暮しがしたいと言ひました。彼女は私を笑ひました。

「妾達はね、キャベツを育て、生きてゆく柄ぢやないんだよ。」と、彼女は言つて、

「妾達の運命は他國人の上は前を攫ねて、おまんまを食べてゆくのさ。お聞き、妾はジプラルタルのナタン・ベン・ヨセフとちよいとした仕事の手筈をきめて來たんだよ。奴さんは木綿の船荷を持つてゐるんだが、それを通すにはお前さんに手傳つてもらはなけりやならないんだよ。あの男は、お前さんが助かつたことを知つてゐるんだよ。だからお前さんを當てにしてゐるんだよ。だから、もしもお前さんが裏切つたら、私達はジプラルタルに居る諜報係に何と言つて申開きをしたもんでせう？」

私はかう說き伏せられると、ずる〳〵べつたりに、またもや、この極道仕事を始めたのでした。

私がグラナダに隱れてゐる時に鬪牛の興行があつて、カルメンは出掛けました。歸つて來ると彼女はルーカスと言ふ名前の、素的に腕達者な鬪手士の噂をしました。彼女はルーカスの馬の名前や男の着込んでゐる刺繡をした胴衣の價値が、いくら〳〵したと言ふやうなことまで知つてゐました。私と一緒に生き殘つた仲間のイナニトが、數日經つてから、カルメンとルーカスとをザカティンの或る行商人の家で見たと言ひました。私はカルメンに、どうして、また、何故あんな鬪

牛士と知り合ひになつたのだと訊きました。

「ルーカスは男らしい男だからさ、何か仕事が一緒に出來ると思つたからだわ。「騒々しい川には水か石かゞある』（ジプシイの諺）つてえためしだよ。兎に角二つの内の一つに落ちるんだよ——奴のお金を捲き上げるか、それとも、奴は乘馬もうまいし度胸も出來てゐるから吾々の仲間に入れてやるかだよ。お前さんも仲間が次第に殺されたんだから補充しなくてはならないぢやないの。あれを仲間に入れておやりよ。」」

「俺は奴のお金もいらない、身柄もいらない。」と、私は答へて、

「奴と話をすることはならない、禁めるぞ。」」

「氣をつけるがいゝ。」と彼女は言葉を返して、

「人が妾に何か爲るのをさしとめる時には直ぐにそのことが成つてゐるんだよ。」

都合の好いことには闘牛士はマラガに向つて發つてしまひましたから、私は例の猶太人の木綿の密輸入の仕事に取りかゝりました。私は、この仕事にはどつさり用事がありました。カルメンも同じでした。私はルーカスのことを忘れてゐました。カルメンも亦その用事の間は同樣に忘れてゐました。その時分のことでしたよ、ねえ旦那、旦那に初めてモンティラでお目にかゝり、後にコルドヴでお目にかゝりました。あの時のことはお話しいたしますまい。旦那の方では私よりは當時のことは却つてよく御存じですよ。

カルメンは貴方の時計を盜んだのです。その上貴方のお金を狙つてゐました。また、貴方の指に嵌めていらつしやる指輪を非常に欲しがつてゐました。彼女が言ふには、それは魔法の力がある指輪ださうで、彼女は矢鱈にそれを取りたがつてゐました。私共は激しい喧嘩をしました。私はぶん擲つてやりました。彼女は眞つ蒼になつて泣きました。彼女が泣くのを見たのはこれが初めてゞ、彼女の涙は非常に力強いものでありました。後で、私は彼女の許しを願つたのですが彼女は終日苦り切つてゐました。私がモンティラに向ふ時、彼女は接吻をしませんでした。三日たつて、彼女が私に逢ひに來たときは、彼女は雲雀のやうに快活になつてゐましたが、私は憂鬱でありました。總てを水に流して私達は戀人同志らしく二日を過しました。別れ際に彼女は、

「コルドヴにお祭があるから見に行くわよ。そしてお金を持つてゐる奴が見付かつたら、お前さんに知らして上げるよ。」と、言ひました。

私は彼女を行かせました。一人ぼつちになると、私はそのお祭のこと、彼女の機嫌が急激に變つて來たことを考へました。奴の方から先きに頭を下げて來たところを考へてみると、カルメン奴、もう復讐をしやがつたんだな、と思ひました。

一人の農夫がコルドヴに闘牛の興行があると話しました。と、私の血は煮え返りました。そして、馬鹿のやうになつて私はそこへ行きました。農夫は私にルーカスを指で示して呉れました。柵に近い椅子にカルメンがゐるのが直ぐに分りました。私は豫て疑つてゐた事實を確かめるためには、暫らく

彼女から目を離さないやうにしなければなりませんでした。ルーカスは豫想通りに色男然として牛を扱つてゐました。彼は鮮かな手振りで牛からリボンを抜き取つて、それをカルメンに、手渡ししました。と、カルメンは卽座に頭髪にそのリボンを括りつけました。ルーカスは馬もろとも撥ね返されて、牛がそれに乘りかゝつて突き刺したのです。私はカルメンを見ましたが、彼女はもう見えなくなつてゐました。そのとき私が場外へ出ることは不可能で、興行がはねるまでは待つてゐなければなりませんでした。それから、旦那の御存じのあの家へ行きました。そこで私は、おとなしく夜遲く夜中まで待つてゐました。明け方の二時頃に彼女は歸つて來ました。私が居たので少し喫驚しました。

「一緒に來い。」と私は言ひました。

「えゝ、行くわ。」と、彼女は答へました。私は馬を曳つぱつて來て、彼女をその尻に乘せました。二人は夜通し一言も口を利かずに進みました。夜明け方、ある修道者の庵室の近所の、一軒の荒れた宿舍に辿りつきました。そこで私はカルメンに言ひました。

「おい、よくお聞き！　私は一切のことを忘れる。過ぎ去つたことは何も言ふまい。唯一つだけ私に誓つて呉れ。それは私と一緒にアメリカへ渡ることだ。そこでお前と私とは平和に暮らすことだ。」

「厭だよ。」と、彼女は苦り切つて言つて、

「アメリカなどへは行かないよ。妾はこゝに居るのが一等好きです。」

「ルーカスの傍に居られるからだらう。だが、假りに奴が癒つたにしても、俺は奴をそのまゝ生かしては置かないつもりだぜ。とは言つても、何も奴のことを氣に惱むこともないだらうなあ。お前の情夫を殺すことには厭きゝゝしてゐる。俺が殺さねばならぬのはお前だつたよ。」

彼女は野蠻な眼で私を凝乎と見据ゑてから言ひました。

「妾はいつもお前さんが妾を殺すのだとは思つてゐたんだよ。妾が初めてお前さんに逢つたとき、私の家の戸口でお坊さんに逢つたんだよ。それから今晩コルドヴを脫け出るときに、お前さんは何も見なかつたかい？　一匹の野兎が私達の馬の脚の間を通つて道を横ぎつたんだよ。これは卜占にちやんと出てゐるんだ！」

「おい、カルメンシタ。」と、私は訊きました。

「お前が、もう私に惚れてゐないつていのは、眞實なんだな？」

彼女は何とも答へませんでした。敷物の上に胡坐をかいて坐りながら、指先きで床の上にしきりに何事かを書いてゐました。

「ねえ、カルメン、どうかして生活の方法を一變させる氣持になつては呉れないか。」と、私は懇願しました。

「どうかして別れゝゝにならないやうな場所へ行つて暮らさうぢやないか。お前も知る通り、こゝから程遠からぬ一本の樹の下には百二十と言ふお金が埋めてある。おまけにベン・ヨセフの手にもお金

が預けてある。」

彼女は笑つて返事をしませんでした。

「妾が先、お前が後。かうなるものとは諦らめて居るのさ。」

「も一度考へてみてくれ。」と、私は言葉を續けて、

「もう私は我慢が出來なくなつた。私は行き詰つてしまつた。お前の腹をきめてくれ、さうすると私も決心するから。」

かう言ひ置いて、私は庵室の方へ歩いて行きました。修道士は朝の祈りを上げてゐました。私はそのお勤行が濟むのを待つてゐました。私はまた祈りたいと思ひました。しかし、それが出來ませんでした。修道士が立ち上るのを待つてその傍に行きました。

「父よ。」と、私は言つて、

「どうか、非常な危險なところにゐる者のためにお祈りを願はれませんでせうか？」

「私は苦しんでゐなさるお方には、どなたのためにも皆お祈りして上げますぢや喃う。」

「やがて造物主の御前に出ようとしてゐる一人の者の魂のためにお祈りをして頂けませうか？」

「お易いことぢや。」と、答へて、凝乎つと私を見て、私の樣子に何か變つたところでも見附かつたのか、何でも打明けて言はせようとして、

「何處かでお目にかゝつたことのあるお方のやうだな。」と言ひました。

私は銀貨を一枚修道士の腰掛けの上に置いて、

「何時彌撒を上げて頂けますでせう？」と、訊ねました。

「半時の內には、な。あそこの宿舍の息子さんが支度に來ますぢや。なあ、若い衆さん、貴方は何か良心を苦しめてゐるものをお持ちぢやないかな？　クリスト樣の信者の申すことを一つ聞いてはみなさらんかな？」

私は泣かんばかりになりました。また來ますからと言つて、そこを飛び出しました。私は草の上に伏して、鐘の音が鳴るまでそこにゐました。それから起き上つて、近寄つたものゝ、御堂の外に立つてゐました。そして、彌撒が上がり終ると、宿舍へ歸りました。私はカルメンが逃げ出してゐて呉ればいゝ、ことによると私の馬に乘つて逃げ出してゐるかも知れんと思ひました。だが、彼女は居ました。彼女は私に怖れをなしたものと、他人から言はれたくないのでした。私が居ない間に着物の裾を解いてそこから鉛玉を取り出してゐました。彼女は卓子に向つて、井に水を一杯入れたものゝ底へ、鉛を投げ入れ、投げ入れしたのを一心になつて見てゐます。彼女はその卜占に夢中になつて、最初は私に氣付きませんでした。それから鉛の一片を摘み出してあちらこちらと向け返しては、悲しげな顏をしました。時々呟くやうに魔法の歌を唄ひました。この歌はマリー・パディラ、別名バリ・クラリサと言つて、ドン・ペドロ王の愛妾であつた魔法使ひのジプシイの大女王を呼び出す時に唄ふものでありました。

「カルメン。」と、私は言つて、
「私と一緒に來るのかい？」
彼女は立ち上つて、井を放り投げ、肩掛を着て「出懸けますとも」と言はんばかりの態度になりました。宿の人が私の馬を曳いて來たので、彼女を背後に乘せて、出發しました。
「ねえ、カルメン。」と、暫らくして私は言ひました。
「お前ほんたうに私に隨いて來てくれるのかい、さうではないのかい？」
「妾は死ぬるまでお前さんに蹤いて行くのです、えゝ。だけど、お前さんとは、もう、一緒には生きてはゆきませんよ。」
私共は淋しい溪谷へ入りました。私は馬をとめました。そして肩掛を取つて、足許に投げつけて腰に拳固を當てゝ、私を睨みながら、身じろきもせずに立つてゐました。
「お前さんは私を殺すのだ、私にはよく判つてゐる。」と、言つて、
「これは運命ですよ。だけど、お前さんは私を心から從はせてゐたんぢやない。」
「御請だ、どうか理性的であつてくれ。」と、私は言つて、
「よく聞いてくれ。過ぎ去つたことはみんな忘れつちまうんだから。おまけに、よくお前も知つてゐる通りに、一生を棒に振つたのはこの私だ。私が泥坊になり下り、人殺しまで行つたのは、みんなお

前のためだ！　カルメン！　私のカルメン！　私にお前を救はせてくれ、そしてお前と一緒にこの私をも救つてくれ！」
「ホセ、お前さんは妾に出來ないことをしろと言ふのだね。妾は、もうお前に惚れてゐないのに、お前は妾に惚れてゐるんだよ。そして、たゞそれだけの理由で妾を殺したがつてゐる。妾は造作もなく嘘なら吐けるんだが、もうそれも面倒になつちやつた。妾達二人の間はもう終つてしまつてゐる。お前は妾の情夫だから、情婦の妾を殺す權利はあるんですよ。だが、カルメンは何時だつて自由だよ。生れたまゝにカリイ人（黒人・ジプシイは自稱してゐる）として死ぬるんだよ。」
「では、お前はルーカスに惚れてるのか？」
「えゝ、惚れてゐましたよ、お前さんと同じく、一時はね。多分お前さん程ではなかつたんだらうがね。今となつては誰にも惚れてはゐない、そして、お前さんに惚れたこの妾が憎らしい。」
私は彼女の足許に自分を投げ出しました。彼女の手を取り上げました。涙を流してその手を濡らしました。私は彼女を喜ばせるためには終世泥坊をしてゐたつていゝとまで言ひました。私は何事をもしました。また私は彼女の心に二人が一緒に暮らした幸福なる時代を呼び起させようとしました。たゞ、彼女が私を愛してゐてさへ呉れゝば旦那、あらゆることを。私は全部を彼女に提供しましたと願ひました。しかし、彼女は言ひました。
「お前を愛することは、もう駄目、それからお前と一緒に生きたくもない！」

私はカッとのぼせて——短刀を抜きました。どうかして恐がつて、哀願してくれゝばいゝと念じました。だが、彼女は惡魔でした。

「最後だ！」と、私は怒鳴つて、

「私と一緒に生きてくれろ！」

「厭だ、厭だ、厭だ！」と、彼女は足を踏み鳴らしながら答へました。そして、彼女は指から、私が贈つた指輪を抜きとつて藪の中へ投げ込みました。

私は彼女を二度突きました。短刀は、私のが折れたときのにした、あれでした。カルメンは二突き目に泣きもしないで倒れました。今でも彼女の輝く黑い目が凝乎と私を眺めたのを思ひ出すことが出來ます。やがてその眼は混濁して、そして閉ぢました。私は一時間ばかり彼女の體軀の傍に茫然と立つてゐました。それから、カルメンが生前に、死んだら森の中に埋めてもらひたいと屢々言つたことを思ひ出しました。私は短刀で穴を掘つて、彼女を横たへました。また、長い時間かゝつて、到頭指輪を探し當てました。それを彼女と一緒にして、小さい十字架とともに埋めました。がこれは恐らくいけなかつたことです！

それから私は馬を飛ばしてコルドヴまで駈けつけ、取つ付きの衞兵詰所へ自白して出ました。私はカルメンを殺したとは申し立てましたが、彼女を埋めた場所は言ひたくありませんでした。修道士は聖者でした。カルメンのために祈つてくれてゐます。カルメンの靈魂のためには彌撒も上げてくれてゐます。可哀想な女！　彼女があんな風に育てたカリイ人達の咎です。

附記

西班牙へ行くと——今では往昔よりは多いくらゐにまで——歐洲全土に散在してゐる例の漂泊民族がゐます。それはボヘミヤ人ともジプシイともジタナ人ともジンガリ族とも、いろ〳〵の名のある民族です。その大多數は南部及び東部の諸州卽ちアンダルシヤ、エストラマドウラ及びメルシヤ王國内に住む、と言ふよりは、漂泊の生活を送つてゐるのです。カタロニアにも隨分澤山居ます。このカタロニアに居る連中がよく佛蘭西へも流れ込んで、佛蘭西南部の市と言ふ市には、よく見受けられるのです。一般に男子は博勞、獸醫、騾馬の毛刈りを業とし、それにくつつけて鑄掛屋もやります。言ふまでもなく密輸入やその他、國法で禁じてある仕事もやつてゐるのです。あらゆる種類の丸藥類を賣つてゐます。

このジプシイの肉體的特質は、書き立てるのよりは實際に見た方が一層判りがいゝのです。一度眼で、一人でも見て置くと、直ぐに他の千人の人中からでも見別けがつくのです。彼等の容貌と表情とは、殊に他の人種とは際立つて目立ちます。非常に色が黑くつて、彼等が交り込んで住む土着人種よりは更に黑いのです。目は、藪睨みで、非常に黑くて、長い密生した睫毛で蔽はれてゐます。較べよ

うとすると野獣の目付だけしかありません。獰猛さ、そして、同時に臆病さがその目に表はれてゐます。この點では彼等の目は非常によく民族の特性と一致してゐます。狡猾で向う見ずでありながら、また、同時に攻撃を恐れてゐます。男は多く脊が高くて、痩せ形で、敏捷です。でぶ〳〵肥えた者は一人もゐないと言つていゝと思ひます。獨逸にゐるジプシイ女には屢々美人がゐます。西班牙にゐる女には、美しいのは極めて稀です。でも若い間は滿更でないとしても、一度母親となつたが最後、斷然醜くなります。男も女も不潔なことはお話になりません。また、ジプシイ女の頭髪の汚なさと言つたら實に怖るべきもので、それを見たことの無い人には、假りに硬ばつた、塵埃だらけの馬の毛を想像してみられても、とても及ばないと言つた程度のものです。アンダルシヤの大きな町々に見る娘達の中には、他の者よりはいくらか見られるのがあつて、身だしなみなんかに氣をつけてゐる者もゐます。この連中はお金のために踊りを踊るのですが、この踊りは、謝肉祭の舞踏の中でも禁じられてゐる種類のものに甚だ似てゐます。英吉利の牧師ボロウ氏は、西班牙に於けるジプシイに關して非常に興味ある二巻の本の著者です。牧師は聖書協會の傳道の費用でジプシイに傳導しようとしたのです。氏はジプシイ娘が他の種族の男子に靡いたと言ふ先例は絶無だと確言してゐます。私から考へると、氏のジプシイ娘への讃辭は大いに誇張せられてゐるものです。それは何よりも先づ、氏の例に擧つたのは醜女の場合のことだつたのです。美しいのに至つては、總ての西班牙婦人と同じく戀する男を選ぶのに氣むづかしいと言ふだけのことです。男は、女の氣に入るやうでなければならないし、女に價

する者でなければならないことは言はずもがなです。ボロウ氏は、彼女等の德性の證據として氏自身の德性、特に氏の單純さを表はすやうな特徴を發表したまでゝす。氏の知人なる一人の不良紳士が一人の美しいジタナに澤山の金貨を贈呈したが駄目だつたと言ふことを、氏は言つてゐます。この逸話を作者は一人のアンダルシヤ人に話したら、その男が言ふのには、それは娘に銀貨の二つ三つもお出しになつた方が却つてよく成功したでせう、ジプシイ女に金貨などを贈るのは、宿屋の女給さんに百萬二百萬と言ふお金を約束すると同じく、口說く方法としては却つて惡いのですと話しました。それは兎も角として、ジプシイ女の亭主孝行は素晴らしいものです。亭主がいざと言ふ場合に、それを助けんがためには、彼女はどんな危險でも慘苦でも厭ひませぬ。ジプシイが自分のことをロミ（こゝでは夫婦の意）と呼ぶのは、彼等が結婚を尊重してゐる證據だと思ひます。一般的に彼等の根本道德は愛國心——その愛國心なるものは、同一民族間の個人に對しては忠實なる關係を表はし、同族よく相助け、また相寄つて行ふ仕事に關しては必ず侵すことなき祕密を保つと言ふ意味であるならば——まさにそれであると言ふことが出來ます。そして、實は、總ゆる祕密の結社だとか、國禁を破つてことを成す團隊に於いては、これと同じ忠實さや團隊愛は見られるところではあるのです。

作者は數ケ月以前にヴォジュ（地名）に來り住んでゐるジプシイの一種族を訪問したことがありました。その種族中の最年長者たる一人の婦人の小屋の中に、一人の旅人——やはりジプシイ——で重患に罹つてゐる者が同居してゐました。この病人はよく看護の手の屆く施療病院を脫け出して、同一

人種の中で死にたいばかりにたよつて來たものでした。百日間もこの男はこの老婆の家に厄介になつてゐました。そしてそこの家族の子供等や親戚の者共よりは、よりよく遇てなされてゐました。病人には藁の寢臺と白い敷布のある布團を與へてあるのに、十一人かのこゝの家族の者共は三四尺の板の上にごろ寢をしてゐました。彼等が客を遇することはかう言つた程度です。斯くもお客に謙讓なるその老婆は、そのお客を目の前に据ゑて、私にかう言ひました。「もう直ぐ死なねばなりますまい！」と。つまり、この人種の生活は餘りに悲慘であるがため、死が近づいたからつて、それには何の怖れも感じてゐないと言ふのです。

ジプシイの著しい特徴は宗教には全く無關心だと言ふことです。それが、無神論者であるからとか、または、懷疑家であるからだとかではないのです。彼等は無神論そのものにも何等の歸依を持つてゐません。彼等の住む國の宗教が彼等の宗教になります。だから、住む國が變れば彼等の宗教も變ります。未開人に對しては迷信がよく宗教に代つて採用せられるものですが、ジプシイに至りては、その迷信も亦宗教と同じく無緣です。事實、他のものに不信（迷信）があればこそ、それを食ひ物としてゆける彼等ですから、彼等自身には迷信があり得やうがないのです。ですけれど、作者は西班牙のジプシイは死體に觸れることだけには不思議に恐れてゐることを知つてゐます。お金を呉れても、死體を墓地に搬ぶことに應ずるものは一人も居ないでせう。

作者は既にジプシイ女の大多數は卜占をやると言ひました。全く上手にやります。しかし儲かるのは戀のまじないと惚れ藥です。浮氣を封じるために、墓の足をつるすと言ふまじないをしたり、氣のない戀を燃え立たせるために磁石の粉を使つてみたり、賴まれたとあれば、惡魔の手助けを借りねばならないと言ふやうな強い呪ひをかけたりもいたします。昨年ある西班牙の淑女が作者に次のやうな話をしてくれました。或る日、彼女がアルカラ街を、悲觀して氣に惱んで通りかゝると、道端に踞んでゐた一人のジプシイの女がそこを通りかゝつた彼女に、

「奥樣、あなたの戀人はあなたに裏切つてゐます。」と、話しかけました。これは事實でありました。

「貴女のところに呼び返して上げませうか？」

かう言はれた時に、それはどんなに嬉しく承諾せられ、また、たつた一目で他人の心の奥底を讀んだジプシイ女に信賴が置かれたかは讀者諸君にお判りでせう。だが、人通りの激しいマドリッドの街中では魔法を使ふこともならないので、翌日或る場所で會ふことになりました。

「浮氣な男を呼び返すのは造作のないことです。」とそのジプシイが言ひました。そして、

「奥樣はそのお方からお貰ひになつたハンカチか肩掛かそれとも顏被をお持ちでせうか？」

絹の肩掛を渡しました。

「その肩掛の一隅に二圓銀貨を、また一隅には一圓銀貨を赤の絹絲で縫ひ込んで下さい。それからここに金貨とあそこに二十五錢銀貨を二つ。眞中には金貨、それも十圓金貨なら上等です！」

十圓金貨を初めとしてその他のお金が註文通りに縫ひ込まれました。

「さあ、それを私に下さい。眞夜中にはこれを靈廟へ私が持つて行きますから、一緒に來て御覽なさいまし、面白い魔法をお目にかけて上げますから。今から、お約束いたしますよ、明日になるとそのお方の心は屹度貴女へ返つて來ますとも。」

ジプシイ女だけが靈廟へ出懸けて行つたのです。淑女は魔法が恐くなつて行かなかつた……で、その不幸なる淑女の肩掛の行方と、浮氣な戀人が果たして呼び戻されたか否かは、擧げて讀者諸君の御想像にお任せします！

ジプシイは貧寒で指彈をせられてゐながら、でも、無智蒙昧な普通人の間には相當に尊敬せられて居つて、自分等でもそれを大いに得意としてゐるのです。彼等は自分では、賢い人種だと自惚れてゐて、自分等を丁寧に扱ふ人々を心から輕蔑してゐます。

「世間の人は馬鹿なもんですよ。」と、ヴォジュの一ジプシイ女が或る日作者に言ひました。

「あれでは瞞してみたつた張り合がありませんよ。先日も一人の農夫のおかみさんが町で私に呼びかけるのです。私がその家へ入つて行くと、煖爐がくすぶつて困つてゐるから、どうか直して貰ひたいと賴みました。私は豚の脂を澤山頂戴して、鄕里言葉でぶつぶつと呪文を言つてやりましたよ。『おかみさんは馬鹿だ。おかみさんは生れ落ちると馬鹿で、馬鹿のまんまで死ぬるんだ』とそしてその家から出る際になつて、立派な獨逸語で『煖爐をくすぶらさない一等い、方法は、中で火を燃さないで置くことさ』と言つてやつて、一目散に逃げ出しました。」

ジプシイの歷史は今日尙ほ一つの疑問としてあります。確實に判つてゐる點は、十五世紀の初頭に歐羅巴の東部に彼等の最初の少數の集團が表はれたことです。だが、それが何處から何故歐羅巴へ表はれたかは判つてゐません。また更に奇妙なことは、短日月の間に、どうして斯くも不思議な規模の下に非常に距離の隔つた國々へ增殖したのだらうかと言ふ問題です。ジプシイ自身も彼等の發生に就いては何の傳說も持つてゐません。彼等の多數はエジプトを故國のやうに言つてゐるにしても、これは古くから彼等の間に廣く擴がつた昔話を借りてゐるだけのことです。

ジプシイ語を研究した東洋の學者の大多數は彼等は元は印度から發生したものと信じてゐます。事實、ジプシイ語の語根の多數と形態とは梵語から出た語法によつたらしくあります。

ジプシイは長い間漂泊をしてゐる間に、色々の外國語を採用したらしく思はれます。多くの希臘語も入つてゐます。例へば「骨」「蹄鐵」「釘」等はそれです。現今では部落の數と同じくらゐにまで多數の方言があります。彼等は常に行く先き〳〵の國の言葉を、自分等本來の國語よりは、却つて巧みに使ひます。自分達の國語は他國人の前で勝手に話したいと思ふ時に使ふばかりです。もう數世紀も連絡の絕えてゐる獨逸のジプシイと西班牙のジプシイの言葉の間にも、共通なる方言が殘つてゐるには殘つてゐます。が、原語は隨分と變化してゐます。これは、より進化した言語に接觸したりそれを使ひ慣れたりした結果でせう。一方で獨逸語、他方で西班牙語が大いに彼等の原語を變化させたのですから、獨逸の「黑森」地方に住むジプシイと西班牙のアンダルシヤに住むジプシイとは話し

合ふことは出來ないでせう。とは言へ、二言三言話し合つてゐる内に同一語根から出た言葉を話してゐるものだとは分ると思ひます。屢々使用せねばならない彼等の方言だけは何處へ行つても共通らしいと思ひます。水、パン、肉、鹽、など。

數の名稱は殆んど同一です。斯く作者はジプシイ語に對する貧弱な知識をひけらかしたついでに、吾々佛蘭西の泥坊連中がジプシイ語から借用してゐる、彼等の隱語を二三すつぱぬきます。小說「巴里の祕密」にはジプシイ語の短刀と言ふ語が、その編中の泥坊の言葉としてそのまゝ使つてあります。ヴィドック氏はジプシイ語の馬と言ふ言葉をジプシイ語のまゝに使つてゐます。また巴里の俗語でジプシイのことを言ひ表はしてゐる言葉は、あれはあのまゝがジプシイ語なのです。また小學校の子供が平氣で使ふ顏と言ふ語もジプシイ語なのです。

以上によつて、カルメンの讀者諸君は、私のジプシイ語研究の一端を御認め下すつたことゝ存じます。文を結ぶにあたつて、ふと思ひ出したジプシイの諺を左に――「閉ぢた口に蠅は入らない」（日本の「もの言へば脣寒し秋の風」に當る。）

カルメン 終

コロンバ

コロンバ

一

さあれ、御身の仇討には御安堵あれよ
彼女一人にてことは足りなん
——ニオロの挽歌——

千八百十——年十月初めのこと、英吉利陸軍部内にその人ありと知られたる愛蘭土人、大佐、サー・トーマス・ネヴィルは、娘を伴れて伊太利旅行を濟ませ、その歸りを馬耳塞のボーヴォー旅館に宿をとつた。兎角旅行者達と言ふものは、自分達の旅行なるものを熱心に果てしなく賞めたてたがるものだ。ところが一方、それに對して反動が起り、ざらにある旅行者とは、少々こちらは變つたところがあるぞと見せんがために、或る種の連中は、ホレースの題目たる、所謂「何も感心することはない」と言つた風を裝つて得意になつてゐた。大佐の一人娘のリディア孃も後者の連中の一人で、なかなか容易なことでは旅行先きのことには滿足をしなかつた。ラファイエルの名作「變容」を見たつて、たゞの凡作と思はれ、ヴェスヴィアスの噴火山だつて自國のバーミンガムの製造工場の煙突から

煙を噴いてゐるのと同じに見えた。

要するに伊太利に對する彼女の主なる反對と言へば、その國は地方色と特色とが缺けてゐると言ふのだ。誰だつて、この地方色だとか特色だとか言ふ言葉の意味が分つてゐる人は勝手に說明をしてみるがいゝ。數年前までは、自分は一つぱし、それを了解んだつもりでゐたんだが、今となつてはなんのことだか、さつぱり分らなくなつてしまつてゐる！

初めリディア孃はアルプスを越した向う側へでも出懸けて行つたならば、そこには前人未踏の何か變つた面白いものが見附かるだらう、それを發見したなら、モリエールの喜劇の主人公のジュールダン氏よろしく、それを「社交界」へ持ち出して話すと相當にうけるだらうと、獨り喜びで喜んでゐた。ところが、そこにはもう一足お先きに孃の國から澤山の漫遊客が行つてしまつてゐた。孃は何一つ目新らしいものにめぐり合はさなかつたので、すつかりがつかりして、果ては反對派の酷評連の仲間へと馳せ參じたのである。

お互に伊太利の名作の話でもしてゐる時に、

「貴方は何處其處の何々宮殿でラファイエルの何々の繪を御覽になりましたでせう。あれは伊太利で一等ですな。」なんて御挨拶を受ける時位、癪に障ることはないものである、殊に、その作品は生憎とこちらは見逃してゐるところだつた場合腹立たしさはなほさらである。何も彼も全部に眼を通さうと言ふことになると長い時間をかけねばならないんだから、最も簡單なる方法と言へば何物をも默殺

すること、而もそれを故意にやつちまうことだ！

ボーヴォー旅館でリディア嬢はすつかり氣を腐らせてゐた。彼女はベラスギ族かサイクロピアン族かの建築にかゝつたセニイ市（伊太利の舊市街。）の城門の美しい一枚の素描を持ち歸つた。そして自分ではこれこそは多くの美術渉獵家の目こぼしで、大した掘り出し物だと思つてゐた。だから、嬢が同じ旅館で知り合ひになつた、フランシス・フェンウィックなる淑女から畫帖を見せられた時に、四行詩と押花の間から、今言つた同じ門の美しい鐵褐色で彩色した一枚の繪が飛び出した時の、その不愉快さと言つたら！

嬢は早速その素描を旅館の女中に吳れてしまつた。そして、ベラスギ族の建築なるものに對する彼女の一切の興味を投げ棄ててしまつた！

嬢の伊太利觀に共鳴してそれを分擔したのは嬢の父親の大佐であつた。大佐は嬢の母たる夫人を亡くしてから後は萬事の觀察は娘の意見通りであつた。大佐の感ずるところによると、伊太利は娘を不快にしただけで憎む可き罪を犯してゐる。從つて世界に於ける最も不愉快なる國は伊太利だ。事實、大佐は伊太利の繪畫や彫刻には特に反對を持つものではなかつた。然し彼が明言して憚らないことが一つあつた。それはこの國に於ては、いかにも狩獵が貧弱だと言ふことであつた。僅かに二三羽の痩せた、足の赤い鷓鴣を射ちとめるのに、ローマの郊外の平野を幾時間となく日に照らされて歩きまはらねばならないと言ふことであつた。

馬耳塞に着いた翌日、大佐は元の副官エリス大尉を午餐に招いた。大尉はコルシカ島で六週間を過して、歸つて來たばかりのところであつた。それから彼はリディアに——すばらしく上手に——コルシカ島特有の無賴漢の話をして聞かせた。これに似て非なる追剝の話ならば、彼女はローマとナポリの間の旅行の時に既に聞かされたことはあつたのだ。

後食が供せられると、大佐と副官は葡萄酒を飲みながら大いに狩獵の話にはずんだ。大佐は、どこの國だつて、より好適で、種類が多くて且つ豐富な獵場として、コルシカ島に追ひつくものはないと言ふことを知つた。

「野生の猪ならいくらでも居ますよ。」と、大尉は言つて、「だが野生の奴と家畜の豚との見別けがつかないといけないと言ふのは、兩方が恐ろしく似てゐるんですよ。で、もしも誤つて飼豚でも射つたとなると、その飼ひ主と一寸面倒な交渉をしなければやなりません。飼ひ主と言ふ奴は齒のところまでも全身武裝をしてゐて、草叢から飛び出して來て損害賠償を要求した上にかなり調戲つたりなにかします。それから野羊がゐます。いゝ獲物ですが一寸射つのに六ケ敷いです。牡鹿がゐますし、普通の鹿もゐます。雉、鷓鴣——どうもコルシカ島に群がつてゐた獲物の種類は一々數へ切れやしません。狩獵がお好きでしたらコルシカに限りますよ。あそこと來た日には、私の宿の亭主の言ひ草ぢやないが、下は鷓から、上は人間に至るまで、獲物の種類は想像も及ばぬと言ふところなんです。」

お茶を飲みながら、大尉は、前に話したのよりはもつと變つた話——この島では仇敵の緣者にまで復讐をすると言ふ話をして、もう一度リディアを喜ばせた。そして、この島の奇妙な景色や未開の土地柄、珍らしい特質、客扱ひ、また土人の原始的な風俗、習慣と言つたことを話して、リディアをしてすつかりコルシカ熱にのぼせ上げさせてしまつた。暇乞をするに先き立つて、大尉は彼女に小さい短刀を贈つた。それはその恰好や銅の鍔など面白いものだつたが、それに附屬した來歷の方が更に振るつてゐた。或る有名な無賴漢がその短刀を大尉に與れたのださうだが、その短刀は鍔も通れと四人も突き殺したほどの保證附きの名刀だつたと言ふのである。リディアはそれを彼女の帶革に狹んで、やや暫らくして、彼女の寢臺の脇机の上に置き、眠る前に二度ばかり鞘を拂つて眺めてみた。

大佐は一頭の野羊を射ちとめた夢を見た。すると飼主から損害賠償を求められた、大佐は心よくその罰金に應じた。と言ふのはその野羊の形が頗る變つてゐたからだ。體軀は野猪の如くで、牡鹿の角が生えてゐて、尻尾は孔雀だつた！

翌朝大佐は食事の時に娘に向つて、

「エリス大尉はコルシカ島では素晴らしい狩獵が出來ると言つてゐたつけが、もし、遠路でなかつたら、私は二週間ばかり出懸けてみたいもんだなあ。」

と、言はれて、リディアは答へた。

「行つたらいゝぢやないの？　阿父樣が狩獵をしていらつしやる間に、私は繪を描きますわ。エリスさんがお話しなすつたあの洞穴の繪を描いて私の畫帖に納めときたいわ。その洞穴つて言ふのはナポレオンが子供の時には寺小屋になつてゐたんですつて！」

大佐の小さな希望でも、娘から贊成されたのは恐らくこれが初めてであつたらう。計らずも娘が自分の希望に一も二もなく贊成をして呉れたので、大佐は大いに喜んだのであつたが、然しとても娘は承知はすまいと知りながらも、この旅行の計畫に、二三の反對意見を述べてみるだけの用意を怠らなかつた。大佐は土地の未開のことや、女の身でさう言ふ未開地を旅行するのは容易ではなからうと言ふことを話した——が無駄であつた！　彼女は何物をも怖れてゐなかつた。彼女は騎馬で旅行をすることを特に喜んだ。露天で眠ることを考へると彼女は嬉しくなつた。彼女は小亞細亞までも行くんだなどと言つて驚かせた。一口に言ふと、彼女は總ゆる父の反對に對して唯一つの答辯を持つてゐた。それは英吉利の婦人でコルシカ島へ行つた者が今までにない、だから彼女は是非そこへ行かねばならぬと言ふのであつた。それから、彼女が歸國して、友達に彼女の畫帖を見せる時には何たる得意を感ずるであらう！

「あら、貴女は何故その繪を外ねてお見のがしになるの？　……と言つたからつて、何も變つた繪ぢやないわよう！　たゞ、ねえ、これは私共の案內人に雇つた、あの有名なコルシカ島の無賴漢を、私が一寸スケッチしただけなの。」（と、言つてやると、相手の令孃は眼を丸くして、）

「あら！　貴女は、まあ、コルシカ島へ行つていらしたんですつて！」

當時フランスからコルシカ島への汽船の直航は開けてゐなかつたから、リディア嬢が探檢したいと言ふこの島へ向けて出帆する船は帆船を捜して雇はなければならなかつた。大佐はその日の内に巴里に約束してあつた宿の部屋の約束を取消して置いた。また、大佐はアジャッチオ（コルシカ島司の居る所。）通ひのスクナー型の船長と契約をした。それには二つの立派な船室があつて、食糧や飲用水を積み込んだ。船長は、その老水夫は素的に上手な料理人で魚の蒸煮にかけては竝ぶ者のない手腕を持つてゐると言つて、お嬢さんは屹度御愉快でせう。順風で浪も穩やかでせうからと誓つた。娘の希望に從つて、大佐は、船長に、他のお客は總て斷るやうにと言ふこと、海岸の山々の景色を展望するために、航路は海岸に沿つて執つてくれるやうにと賴んで置いた。

二

同出發と決つた日の朝の間に荷物類は一切積み込まれ、夕方順風に送られて船は帆を揚げることとなつた。大佐はその間に娘のリディアを伴れて馬耳塞の大街路のカンヌビェルを散歩してゐると、ばつたり船長と逢つた。船長は大佐に一人の親類の者を同船させては貰へないかと賴んだ。それは船長の長男の名付け親の副從弟にあたる者だが、のつぴきならぬ用事で、生れ故郷のコルシカ島へ行かねばならぬ身が、船便がなくて困つてゐると言ふのであつた。

「近衞の歩兵士官で好い男ですよ。若しナポレオンがいまだに皇帝でゐてくれたら、大佐には漕ぎ付

けてゐる人物ですよ。」

「士官なら。」と、大佐は、將に、「一緒に乘りこんで來たつていゝさ。」と答へかけると、リディアは叫んだ。

「歩兵の士官ですのよう！」

彼女の父が騎兵だから、彼女は他の兵種を輕蔑してゐた。

「恐らく無學ではないでせうか？　船に暈ふかも知れない、そのために私達の旅行の興味が損じられるわ。」

船長は英語は一語も解し得なかつた。然しリディアの表情から見て、リディアがどんなことを言つたかゞ判つた。そこで、彼はその親類の者なるものを丹念に賞め始めた。そして、この者はコルシカ島の伍長の家柄の一員で、何處から見ても紳士と言ふ意味に相當するものを持つてゐるから、大佐等の迷惑になるやうなれば、自分は彼を氣の付かないやうなところへ伴れ込みませうと言つて賴んだ。

大佐もリディアもコルシカに父子相傳の伍長が出る家柄があるのは面白いと思つた。しかし、それは士官の階級の男ではないと信じてゐたから、その男は貧乏で、船長はそれに同情して、船賃を助けてやらうとしてゐるに違ひないと思つた。もしも彼が士官だつたなら、話もせねばならず、生活も一緒にせねばならない。たゞの伍長と言ふのなら、彼の分隊が銃劍附きで表はれて來て、人の行きたがらないところへ彼を伴れて行くのでさへなければ何の心配もいらない。

「御親戚の方つていふ人、船にはお醉ひにならないこと？」

と、リディアは痛いところを尋ねた。

「どういたしまして、お孃樣、野郎の心臟は岩のやうでさあね、陸にゐやうと海の上であらうと。」

「ではい、わ、伴れて來させて上げるわ。」と　リディアは答へた。

大佐も同じやうに繰り返した。

「伴れて來させて上げるよ。」

それから二人は散步を續けた。

その夕の五時頃にマティ船長はそのスクーナ型に乘り込むやうにと二人を案內に來た。波止場まで來ると、船長の短艇の傍に、頤までボタンを嵌めた、長い、青の外套を着た立派な青年が一人立つて居た。彼は大きな黑い眼の、脊の高い、陽燒けのした男で、正直でもあり手堅くもある男と見えた。肩の具合や、口髭の縮れから、一見して彼は軍人だと分つた。それは當時口髭は決して普通人の間に見られないことであつたし、國民軍も衞兵屯所の習慣や服裝を一般の家庭にまで染み込ませてはゐなかつたから。

青年は大佐を見ると帽子を脫いだ。そして大佐が自分に示してくれた好意に對して、快活に感謝の意を述べた。

「お役にたつたのは滿足だよ。」と、大佐は言つて、短艇に乘つた。

「全く呑氣屋だなあ。」と、青年は低い聲で親戚の船長に伊太利語で言つた。

船長は青年に目くばせをして口の兩端を歪めた。それはそこの英吉利人は伊太利語を知つてゐるぞと言ふことを知らせた符牒で、また、なか〳〵偏屈な人だと言ふ意味を敎へたのであつた。青年は靜かに笑つて、額を輕く打ちながら返答をした。それは、どの英吉利人も多少偏屈でない者は居ないと言ふのであつた。それから、彼は親戚の船長の傍に坐つて、用意をしながら、しかし、非禮にわたらぬやうに、同行の若い婦人旅客の顏や姿を眺めるのであつた。

「フランスの兵卒はなか〳〵立派だからね。」と、大佐は令孃を顧みて、「よく士官と見違へることがあるんだよ。」

そして、彼は青年に向つて、佛蘭西語で、

「君は何聯隊かね？」

青年は親戚の船長の肱を輕く突いて、皮肉に微笑をしながら、近衞の步兵にもゐたが、今は輕步兵の第七聯隊にゐると言つた。

「ウォーターローの戰爭に行つたかい？　すこし若いやうに見受けられるが。」

「はい、大佐、あれが私の唯一の戰爭でした。」

「あれに出たのなら普通の戰爭に二度行つたも同じだよ。」と、大佐は答へた。

若いコルシカ人は脣を嚙んだ。

「お父さま。」と、リディアは英語で言つた。「この人にコルシカ人はナポレオンを好いてゐるかどうかと訊いて御覽なさいよ。」

大佐がそれを佛蘭西語に通譯をしない内に、青年は、抑揚は異國調ではあつたが、立派な英語で答へた。

「ねえお孃樣、自國に容れられる豫言者つて無いものです。私達ナポレオンの同鄕人は恐らくは佛蘭西人よりは、少なく彼を愛してゐます。私としては、尤も家庭では昔から彼の家庭とは仲違ひをしてゐましたが、大いに彼を愛しまた敬慕いたします。」

「君は英語が話せるね！」と、大佐が叫むだ。

「お聞きの遠りに拙いもんです。」

リディアはこの青年の呑氣らしい無遠慮な話し振りにいさゝか辟易したけれど、伍長風情と皇帝との間に個人的の仲違ひがあると聞かされては失笑さないでゐられなかつた。それは彼女にとつては、コルシカ島へ行くと見付けられる數多の不思議の前觸れのやうであつた。これは彼女の日記に特書して置くべきものだと思はれた。

「多分君は英國へ捕虜になつて行つてゐたんぢやないかい？」と、大佐は訊いた。

「いゝえ、子供の時分に佛蘭西に來てゐた英人の捕虜から英語を習つたのです。」

それから、ネヴィル孃の方へ向いて、彼は言つた。

「マティ船長は私に貴女は伊太利からお歸りがけだと言ひましたがね、すると純粹の伊太利語をお話しになるのでせうねえ、私共の方言がお判りになるかしら」

「娘は總ゆる伊太利の方言が判るんだよ。」と、大佐は言つて、

「語學の天才でね、どうして私なんかは及びもしない！」

「ぢやコルシカの民謠でこんなのがお判りになりますか？　羊飼が羊飼の女に言つた唄なんですよ。」

よしや、神聖な、神聖な樂園に這入らうとも、
君がゐてくれなけりや、わしは出て行くばかり

リディアにはこの意味はよく解つた。この引例の文句がいさゝか思ひ切つたものであり、且つ、それにもまして、思ひ切つてこの青年が自分の顏を見てゐるのを知ると、頰が赤くなつて來た。そして、伊太利語で「判りました」と答へた。

「では君は歸休で歸省するんだね。」と大佐が訊いた。

「いゝえ、半給にしたんですよ。私がウォーターローへ行つたからつてのと、ナポレオンと同鄕だつて言ふ譯でせう。私はこれで歌の文句ぢやないが、希望も空し、財布も空つぽで、鄕里へ返つて行くんですよ！」

大佐は手をポケットに入れて金貨を一枚さぐりながら、何と言つたものかと適當の言葉を探し出さうと腦味噌をしぼつた後に、この不幸な相手の手にうまくそれを渡したいと思つた。

「私も亦。」と大佐は上機嫌で言つた。

「やはり半給なんだよ。だが君の方は煙草代にも成るまい。これを受けてくれ給へ、伍長殿。」と、その金貨を、短艇の舷側に休ませてゐる青年の手に渡さうとした。

コルシカ青年は、眞つ赤になつて、佇つ立つて、腹を立てゝ、キツと脣を噛んだ。そして怒氣を含んで答へんとしたが、急に氣を換へて失笑した。大佐は吃驚して、手には金貨を握つたまゝ彼を眺めた。

「大佐殿。」と、青年は眞面目な顏になつて言つた。

「大佐殿に對して二つ御忠告をします。先づ、コルシカ人には決してお金を提供してはいけません。もしも、そんなことをなさるとコルシカつ兒はことによると貴官の顏にそれを敲きつけるやうな無禮をも致しかねません。第二には、彼等が欲しない位階を與へてはなりません。貴方は私を伍長と言つてますけれど、私は中尉です。大した差ではないけれど、差はやはり差です……。」

「中尉だつて！」と、大佐は叫んで、

「中尉だつたのかい！　でも船長は私に言つたんだよ。君も君の阿父さんも親戚も皆伍長だつて！」

これを聞くと、青年は身を退けて、一層激しく大笑ひをした。あんまり目に見えて上機嫌になつたので、大佐もそこにゐた二人の水夫も緒に釣り込まれてしまつた。

「御免下さい、大佐殿。」と、彼は言つた。

「貴官の錯誤は至極御尤です。やつと判りました。事實、私の家族は祖先に數人の伍長があつたことを誇つてゐます。然し、コルシカの伍長は鄕里の海岸では決して肩章を着けませんのです。一千百年の頃に數ケ村が高山地方の地頭連の暴壓に對して、一撲を起したことがありました。そして選ばれたる指揮者を『伍長』に任命しました。コルシカへ行くと、その時の指揮者の後裔はそれを大なる誇りとしてゐます。」

「どうも氣の毒をしちまつた。」と、大佐は答へて、

「まあ勘辨して貰ひませうか。そして、今、君は私の錯誤の起源を知つてくれたんだから、私の釋明は諒解してくれたんだらうねえ。」

「私の小憎らしい喋呵の方が正に罰せらる可きですよ。大佐殿。」と、このコルシカの青年は言つて、笑ひながら丁寧に握手をした。

「私は少しも惡意を持つてゐません。友人のマティ船長がうつかりしたことを言つて、貴方に紹介しちまつたもんだからですよ。自己紹介をしませうか。私はオルソ・デラ・レビアと言ふ半給の中尉です。それから、貴方は、二匹の立派な犬をお伴れになつてゐるところから見ると、狩獵をなさるつもりでコルシカへお出懸けになるんですね、私は光榮として、喜んで島の森や山を案内して上げますよ

——もしも地理を忘れてしまつてゐなければですけれど。」と、最後の一句を嘆息とともに言つた。

彼が斯う言つてゐる時に、短艇はスクーナ型の帆船に着いた。彼は先づリディアを、それから大佐を、それ〳〵手を差し出して船の上に引き上げた。

船へ乗り込むと、トーマス大佐は自分の失言を恥ち入つて、一千百年代の往昔から系統正しき名家の出たる紳士に對する、自分のあの非禮は、うまく水に流して貰へるもんだらうか、どうだらうかと苦になつてならなかつた。そこで、娘の意嚮も聞ひ質さないで、青年を晩饗に招待し、同時に釋明を繰り返して言つた。リディアはいさゝか眉を顰めたが、（實際は）伍長なる階級の正確なる意味を知ることが出來たのを喜んだ。お客の青年は彼女に對して好感を與へてゐた。且つ、その青年の何處かに氣高いところのあることも判つて來た。たゞ、唯一の批難は、青年があまり無愛想であけすけで、眞の物語の主人公たるには氣輕過ぎた點だ。

「デラ・レビア中尉。」と、大佐は葡萄酒の杯を手にして、英國風に一禮して、

「私は西班牙で多數のお郷里の軍人達と逢ひましたがね、それは素晴しい狙撃歩兵隊の人々でした。」

「はあ、あの連中の多くは歸つては來ませんのです。」と、若い中尉は眞面目に言つた。

大佐は話を續けた——

「どうも忘れようたつて忘れられないのは、ヴィットリアの戰ひの際に於けるコルシカ歩兵大隊の行動でしてね、どうしても、思ひ出さずには居られない理由があるんです。」と、言つて自分の胸を撫

でながら、

「その日は終日、その大隊は庭園の中からと生籬の蔭からとで吾々に向つて發射して、吾々の兵士や馬で、その手にかゝらなかつたものは極めて少數となりました。でも、愈々退却と言ふ命令を受けとると、敵の方では快速力で逃げ出しました。で、うまく平野まで逃がして置いたところで、今度はこちらの番で、小つぴどく追撃して復讐してやらうとしたんです。ところが敵の奴め——や、どうも失禮——敵ながら、勇敢なる軍人達と言ふ積りですが——方陣を作つてしまつたもんだから、どんなにしても崩すことが出來なくなつた。方陣の眞中に——私の方からも見えてるんです——小さな黒い馬に跨つた一人の士官がゐて、軍旗の傍に立ちながらしてゐる。幾度となく軍樂隊が太鼓を鳴らしては吾々に挑戰する。私は、選拔した二個中隊の騎兵を以て突撃を命じたんです、ところが敵の方陣を崩すどころの騒ぎぢやない。全く以つて驚き入つたことには、忽ち物の見事に横手へ掃き寄せられて、列を亂して大混亂の狀態で後戻りをする、主のない馬も一匹や二匹ではないと言ふ始末の中を、その惡魔のやうな樂隊は相變らずドンドンと太鼓を鳴らしてゐる！　硝煙が飛散して、敵の陣形如何にと見ると、軍旗の傍には敵の士官は、やはり葉巻を燻らしてゐた。私はカッとなつて自ら先頭になり、手兵を提つ携げて最後の突撃にかゝりました。敵の銃はもう射てない位にまで錆びついてゐたのでしたが、彼等は深さ六列の陣を敷いて、銃劍を味方の馬の首の正面に竝べたてゝ構へたものだから、吾々は言はゞ堅牢な城壁に向つて突貫してゐるやうな

ことになりました。私は聲を嗄らして、私の手兵を激勵し、自分の馬に拍車をうつて突進しました。すると、私が話した例の軍旗の傍にゐた士官は、遂に葉巻を口から捨てゝ、一人の兵士に私を指してゐました。そして「白帽をやつちまへ！」と、彼が言つたのを聞きました。私は兜に白い毛を立てゝゐました——が、私は次ぎに何も聞きませんでした。私は胸に一發もらつたんです！　どうもあの大隊は立派なものでしたよ、中尉、後で聞くと、輕歩兵第十八聯隊の第一大隊で全部コルシカ人による編成でしたが、ね。」

「さうです。」と、オルソは答へた。彼はこの話を聞いてゐる時に目を輝かせてゐた。

「あの大隊は本部隊の退却擁護の行動をとりながら、軍旗を守ると言ふ大任を果たしましたのです。でもあの勇ましい大隊の三分の二は、今、ヴィットリアの平原で最後の眠りに就いてゐます。」

「もしか、君はあの時の指揮官の名を知つてはゐないですか？」と、大佐は訊いた。

「あれが私の父です。當時父は十八聯隊の少佐でしたが、あの不運な日の苦戰に表はしたる勳功で、大佐に昇進しました。」

「君の御尊父！　實に勇士だつた。も一度お目にかゝれたらどんなに嬉しいだらう。私はきつと御尊父を憶えてゐますよ。御達者ですね？」

「いゝえ、大佐……」と、オルソはいさゝか蒼ざめて答へた。

「ウォーターローへ出征せられたのですか？」

「はあ。だが、父は戰場の露と消えるの幸運を持ちませんでした。彼は二年前に——コルシカで死にました。それはさうと、この海は綺麗ですなあ！　私は十年も地中海を見なかつた。お孃様は大西洋よりはこちらの海の方が美しいとはお思ひになりませんか？」

「すこし碧すぎると思ひます。波浪に、大西洋ほどの壯麗さがありません。」

「お孃様は野性美がお好きですな？　もしさうでしたなら、コルシカにはお氣に召すものが澤山ありますよ。」

「娘はね、何でも竝外れなら氣に入るんでね、だから、伊太利は氣に入らないのさ。」

「伊太利では私はピサ（地名）だけ知つてゐます。」と、オルソは答へた。

「あそこで數年學生をやりました。だが、靈廟や寺院や斜塔にはいつも感心してゐます。殊に靈廟は素的ですよ。貴孃はオルカナ（十四世紀の伊太利の畫家。）の名作「死」をお記憶でせう。私は、今でもあれが描ける だらうと思ふ位にまで、しつかりと心に殘つてゐます。」

リディアはオルソ中尉が熱中して長い講釋でも始めやしないかと心配して、欠呻をしながら、

「美しうございましたわ。御免遊ばせ、お父様、すこし頭痛がするやうですから、私は部屋へ引きとらせて頂きますわ。」

彼女は父の額に接吻して、オルソに一禮して、下りて行つた。

二人はまた狩獵の話やその外いろ〳〵と話した。話しながら、彼等はウォーターローでは敵味方の騎

隊にゐて、相對峙して銃火を交へた仲だとわかつて來た。こんな理由で却つて一層友誼を深めた。彼等はナポレオン、ウェリントン、ブリュヘルを評し、また鹿狩りや野猪や野羊狩りの話もした。到頭夜も更けたし葡萄酒の最後の杯も傾けたししたから、大佐はオルソとまた握手をして、お休みと言ひ、あんな滑稽な調子から始まつた二人の友情は、今後益々深められてゆくであらうと言つて、それぞれの船室へ下りて行つた。

三

美しい夜のことで、月の光りは波の上に漂ひ、船は微風に送られて靜かに海の上を滑つてゐた。リディアは微塵も眠らうとは思はなかつた。たゞ一人の俗物が同船してゐると言ふ事實があるので、一片の詩心のあるものならば誰だつて、月の夜の海上では感ずることの出來る情緒を、樂しむことから妨げられてゐた。

で、オルソ中尉はもうぐつすりと眠り込んだなと考へると同時に——彼は無風流な男だから——嬢は蹶ね起きて、外套に身をくるんで、女中を起して、一緒に甲板に出た。そこで見受けられるのは舵手一人だけであつた。舵手は、氣味惡い單調な調子で、コルシカ方言で一種の挽歌めいた歌を唄つてゐた。靜まり切つた夜の中で、この聞き慣れない歌には、獨得の魅力があつた。不幸にしてリディアにはその歌の意味は半分しか解らなかつた。ありふれた意味を持つ詩句の中に、舵手が熱狂して歌ふ數行が交つてゐて、それが強く彼女の好奇心を浚つた。だが、續いて大いに興が乘つて來て、こゝぞとばかりと言ふところで、パッタリと意味の分らない言葉が出て來た。でも、彼女は「殺人」がこの挽歌の主題だとは察することが出來た。刺客に對する呪詛、復讐の脅迫、被害者の讃美と言つたものが、兎も角もその挽歌に織り込んであつた。彼女はやつとその歌詞を數行覺えた。それを書き竝べてみると、

彈丸、銃丸、または銃劍たりとも、戰さの庭の彼を恐れさすには足りなかつた。
彼が穩やかなること、恰も頭上の眞夏の空のやうだ。
彼は鷲の友なる鷹のやうだ。味方にとりては蜂密の如く甘く、敵にとりては荒海の如く猛猛しい。
彼は總ての上に、太陽より暖かく、月よりも柔しく輝いた。
佛蘭西の敵は一指も染むることも出來なかつた彼、
その彼が自國の刺客によりて背後から射ちつけられた。
恰も昔ヴィットロがサンピィエロを欺し討ちにした如く。
敵共は面と對つて彼に向ふことは出來なかつた。……

十字勲章を我が寝臺の前の壁に掛けてくれ。
その勲章のリボンは赤い、我が襦衣は更に赤い。
十字勲章と赤血に染つた我が襦衣は更に我が息子のために保存して置け。
息子は襦衣に空いた孔二つを見るであらう。
一つ〳〵の孔を、他の者（敵）の襦衣に、あけて仕返しをしてくれ。
だが、それだけで充分なる復讐となり得やうか？
射つたことのある手、狙つたことのある眼、私の死んだことを考へぬいた心、それらがなくてはならない……。

舵手は突然歌をやめた。
「何故次ぎを續けないの？」と、リディアが訊いた。
舵手は頭で合圖をした。リディアは船の昇降口から一人の男が上つて來たのを知つた。それは、月の光りを賞さんがために甲板に出て來たオルソであつた。
「歌を續けて下さいな。」と、リディアは言つて、
「大層面白かつたのですもの。」

水夫は顔を差し延べて、息を凝らして言つた。
「人前では『リンベッコ』だけは出來ませんや。」
「それはどう言ふ意味ですの？」
舵手は口笛を吹き始めて何とも返事をしなかつた。
「地中海の風景に感心していらつしやるところを見付けましたぜ。ねえ、ネヴィル孃。」と、オルソは言つて、
「いかゞです、こんな好い月はとても他所では見られますまい。」
「私、月なんか見てゐたのではありません。一心にコルシカ語を習つてゐたのです。あの舵手さんが、私が今まで聞いたことのないやうな、哀しい歌を唄つてゐらしたのに、肝心なところでお廢めになつてしまひました。」
舵手は、さも羅針盤を更によく見ようとするかの如くに頭を屈めて、リディアの外套を手荒く曳つぱつた。オルソの居る處ではこの挽歌を唄つてはならないことが判つて來た。
「何を唄つてゐたんだい、バオロ・フラス（舵手の名）？　哀歌か挽歌か？　この令孃には判るんだから、お終ひまでお聞きになりたいと仰しやるんだよ。」
「忘れつちまひました、オル・サントンさん（オルソの愛稱）。」と答へて、直ぐに大きな聲で、てれかくしに聖母の讃美歌を唄つた。

リディアは何とも思はずに、讃美歌を聞いた。そして、その上舵手を強ひようとはしなかつた。いづれ、その内にこの秘密の説明は聞いて置かうぞとは考へた。

けれども、女中はフローレンス生れで、これがまたコルシカの方言を一語でも知りたくてならない點では、主人と同じ程度と來てゐたので、リディアが止める間もなく、オルソに訊いてしまつた。

「士官さん、『リンベッコ』つて何のこと？」

「リンベッコですつて！」と、オルソは言つて、

「やあ、それはねえ、コルシカ人に對して言ふ最も恐しい侮辱の言葉ですよ。意味はねえ、一人のコルシカ人がゐてその近親か最愛の人かゞ殺されたのに、お前は未だその下手人に復讐を果たしてゐないぞと言つて、咎めだてすることなんですよ。誰が、まあ、そんなことを貴女方に言ひました？」

「昨日、馬耳塞でゝすよ。」と、リディアは急いで答へて、

「船長さんがねえ、その言葉のお話をなさつたのですわ。」

「船長は誰の話をしました？」と、オルソは厄氣になつて訊くのであつた。

「おゝ！　なんでも、或る昔の話……一寸考へさせて下さい……さう〳〵、ヴニナ・ドルナノ（サンピエロの妻。）の時の話……」

「ヴニラの死は、あの勇ましい良人たるサンピエロと言ふコルシカの英雄を、貴女が好くやうになる多くの原因となりやしなかつたでせうか？」

「貴方はあの事件でサンピエロの行つたことが、英雄らしいと本氣にお考へになつてゐますの？」

「あれの行つた罪は當時の未開の狀態と習慣から考へると言ひ譯は立つと思ひますですよ、おまけにサンピエロは命賭けでゼェノエス人と戰爭をしてゐた際ですから、敵に内通してゐる婦人（妻のこと）を罰しないでゐては、彼を信賴してゐる味方の同志に顏が合はされないぢやありませんか？」

「ヴニナは。」と、舵手は言つて、

「良人の許しも得ずに出懸けてゐすまよ。サンピエロが彼女を絞め殺したのは當り前ですよ。」

「だけど。」と、リディアは遮つて、

「それは良人を助けたいばかりに行つたことで、良人に對する愛からですよ。彼女はゼェノエス人の前に良人のために生命乞ひに行つたのです。」

「良人の生命乞ひなんてことが良人の顏へ泥を塗ることになるんです！」

「自分の手で妻を殺すなんて！　化物です！」

「でも彼女は良人の手にかゝつて殺されたいと願つたんですよ。そんなら貴嬢はオセロも化物だとお思ひになりますか？」

「オセロはまるで較べものにはなりませんよ。オセロはあれは嫉妬ですよ。サンピエロは單に虛榮ですわ。」

「でも嫉妬も亦虛榮ぢやありませんか？　愛の虛榮です。多分貴嬢はその原因のことで言ひ譯をこし

らへていらつしやるのでせう？」

リディアは暫らく昂然としてオルソを見てから、舵手の方へ向いて船は何時になつたらコルシカへ着くかと訊いた。

「明後日です。」と答へて、

「風の都合がよかつたら。」

「目的地のアジャッチオへ今にも着きたいわ、もうこの船に厭いちまつたんですもの。」

彼女は立ち上つて女中の腕をとつて、暫らく甲板の上をあちらこちらと歩いた。オルソは舵手の傍に殘つてゐて、彼女と一緒に歩いたものだらうか、それとも彼女の氣に障つたらしい話はやめにしたものだらうかと迷つてゐた。

「マドンナの血を享けたか知らんが恐しい別嬪だなあ！」と舵手は叫んで、

「わしの寢床の蚤の奴めが皆あんなのだつたら、そのお相手したつて文句がねえだがなあ！」

多分リディアの耳にも、自分の美貌に對するこの露出しの讃辭が聞かれた、と言ふのは同時に彼女は船室へ下りて行つたから。

間もなくオルソも自分の船室に下つた。彼の姿が消えると同時に女中は再び甲板に來て、舵手と少しばかり話して、歸つて行つて主人に次の報告をした。

——オルソの姿が甲板に表はれると同時に舵手が歌ひ止めた挽歌と言ふのは、二年前に刺客の手に

倒れた、オルソの父なるデラ・レビア大佐の死を悼んで作られたその挽歌であつた。舵手は、オルソは父の加害者に復讐せんがために、コルシカへ歸島するものだと確信すると言ふのだ。そして彼の鄉里なるピエトラネラの村落には直ぐに「新鮮なる肉」（決闘騒ぎ、または殺戮事件の意。）が見られるにきまつてゐると言ふのであつた。言ひ換へれば、オルソは父を殺した下手人の嫌疑のある者の二三人を殺害する計畫だと言ふのである。事實、その下手人共は告發せられたのだが無罪を宣告せられたのだ。それは彼等は判事や辯護士や知事や警官とぐるになつてしまつたからだ。また、舵手は言葉を強めて言ふにはコルシカ島では正義は地を拂つてゐる、自分は裁判所の役人共を相手にする位ならよろしく鐵砲を手にしてかゝる方がましだと信じてゐる、殊に仇敵を持つた際には、人はSで始まる三つの言葉の内の一つを選ばねばならぬ。卽ち「射ち殺す（シュート）」か「刺し殺す（スタッブ）」か「逃げ出す（スカットル）」かだ——と。

この輿珠の深い報告に接してから、デラ・レビアに對するリディアの態度は著しく異つて來た。レビア中尉は忽ちにして小說的な英吉利娘の目には甚だ重要なる人物となつて映じて來た。彼の開けつ放しの態度と淡泊で善良らしい物の言ひ方は、最初の間こそ彼女には不快な印象を殘したものであつたが、今となつては却つて益々尊いものとなつて見えた、それこそ不屈の精神を蔽して、もろもろの感情を包んでゐたものだからだ。中尉は彼女にとりては、輕快の被衣の蔭に遠大な計畫を蔽うてゐる、フィエスコ伯の如く思はれた。たとへ二三人の惡者退治は、祖國の救濟と言ふやうな輝かしさとは較べられないにしても、それにしても、立派な復讐もまた賞讃に價しないとは言へない。且つ、結

局は、婦人と言ふものは、英雄はどこまでも英雄らしくあつて、決して策略を弄する底の人物でなきを好むにも因る。

斯くして、リディアはオルソを見直した。オルソには大變大きな目があつた。皓き齒、端麗なる容姿、相當なる敎育と上流社會にも通曉せる態度と習慣。

で、翌日は彼女は彼と多く語つた。彼の話は面白かつた。彼女は彼にコルシカ島のことで多くの質問を重ね、彼はまた熱心にそれを說明した。彼は年若くして島を去つた。最初は伊太利の學校へ、次ぎはサン・シア士官學校へ、でも島をば常に詩的連想を以て懷しがつてゐた。島の山や森や住民の特殊の感情を話す時、彼は夢中になつて興奮した。想像も出來る如くに、話の中で、復讐と言ふ言葉を幾度も使つた。諺にさへ一口に、コルシカ人の話と言へば復讐ときまつてゐるんだから、復讐の善し惡しを論じなくてはこの島人の話は出來なかつたのである。オルソは、島人が絕え間もなく復讐心に燃えてゐるのを批難して、却つてリディアを驚かせた程だつた。たゞ農民の刃物三昧に對しては、「こんなにまで眞劍なんです。」と、彼は言つて、「定つた形式を履んでから挑戰し合つて、そして斬り合ふのです。お前も氣を付けろ、私も氣を付けるから」と言ふのが、殺し合ひをする前に取り交す仇敵同志の挨拶になつてゐます。この島には何處の國よりも果し合ひがありますけれど、その犯罪の原因には何等の卑劣さはありません。島には殺人

犯こそ多いけれど、誰一人だつて物奪りはゐませんですからねえ。」

レビアが、復讐だの殺害だのと話してゐるのを聞きながら、リディアは彼の顏を注意して見たけれど、どんな感情の動きをもそこには見出されなかつた。で、孃は、この男は人並み優れた強い意志の力を具へてゐるのだから、誰にだつて自分の感情は蔽してゐて、勿論、生國の人にだつて見せやしないのだと考へた。從つてこの男の父なるデラ・レビア大佐の亡靈はさう長くかゝらないうちに、今しきりに呼び求めてゐる滿足を息子によりて得られるであらうと確く信じてしまつた。

この時までには船はコルシカが見えるところへ來た。船長は、海岸の主要なる地點を指して說明した。リディアは嘗て聞いたことのない處ばかり敎へられたのだつたけれども、その名を聞いてみると嬉しくなつた。名のない處を見てゐる位、退屈なものはないのだから。時々大佐の雙眼鏡には渴色の長衣を着込んで、銃身の長い鐵砲を手にした土人が、小さな馬に跨つて、小山を上り下りするのが映じた。リディアはあれこそ無賴漢でもあらうか、それとも父の仇討ちに出懸ける孝行息子でもあらうかと考へた。だが、オルソは說明して、彼等は隣村に所用に出懸ける平和な住民に過ぎない、鐵砲を持つてゐるのは必要があつてゞなくつて、そんな習慣だからだ、丁度恰も歐洲のハイカラさん達が、用もないのにステッキを振りまはすのと同じだと言つた。鐵砲は短劍ほどの高尙さもなく小說的でもない武器とは言へ、リディアは細卷きのステッキなどには勝つて、男子用には何處か勇ましい小意氣なところのあるものだと思つた。そしてバイロンの詩に出て來る英雄達は、鐵砲傷でみな

倒れて、古典的な短劍に倒れたものは一人もゐなかつたことを、思ひ出した。

三日の航海の後に、船は「血の海諸島」に着き、アジャッチオ灣の美しい回轉畫が人々の眼の前に展けて來た。それは恰もナポリ灣に似てゐた。そして船が港に入りかけると、山火事が岬を煙に包んだので、ヴェスヴィアスの噴火を思ひ出させ、又々ナポリに似てゐる點が一つ增えた。この上はアッチラの一軍隊がナポリ附近を荒らしまはしたら、この二つの灣は完全に同じものになるであらう、と言ふのは、アジャッチオの附近は總て荒寥として生氣がなかつたのだから。ナポリ灣では南岸カステラメーレから西の入口のミセノ岬に至るまで、美しい建物がずつと續いて見られるのに、アジャッチオ灣は禿げてゴツゴツした山々を背後に、陰氣な森が見られるばかりだから。一軒の別莊があるのでもなく、家らしい家があるのでもない。ただ、市街の周圍の高地の上のそこゝには、小さな新綠の樹海の中から二三の白い建物があるのが見えた——お寺かそれとも或る家族の墓地かであつた。こゝで見られる美と言へば、奇妙なまた憂鬱の美と言つた種類であつた。

當時の市街の樣子は、周圍から受ける寂莫の感じを特に一入深めてゐた。巷に騷音を聞かないし、僅かに三四の閑人共、それもいつも同じ顏ぶれの者が、見られるばかりだつた。

作物を商ふために市街へ來る數人の百姓女の外には、婦人は歩いてゐなかつた。伊太利の街のやうに聲高な笑ひ聲も唄ひ聲も聞えて來ない。木蔭にちらほら齒のところまで全身武裝してゐる百姓が集まつてカルタをしたり、それを眺めたりしてゐた。しかし勝負は靜肅に行はれて、勝負をしながら、

口論などをするものはない。もし勝負に熱中したとなると、バンとピストルが一發、それから嚇し文句が續くのである。コルシカつ兒は性來、生眞面目で憂默である。夕暮になると、二人位涼みに出る者もあるが、遊歩場をぶらつくのは大部分が外國人だ。コルシカ人となると、各自自分達の家の前にぢつと立つてゐて、巢の傍を離れない鷹のやうに、張り番をしてゐる。

四

ナポレオンが生れた家を訪ね、兎も角も正規の手續をとつて、そこの壁紙の一片を分讓して貰つてからは、リディアはコルシカ到着後二日間にして、もうふさぎ込んでしまつた。これは外國を旅行した人には誰にでもきまつて起きる感情だが、つまり異國の習慣なるものが、明らかに旅の男女を間はず、自分は天外の孤客だと言ふ念を起させるからである。リディアはよくも考へないで、こんな孤島へ來る氣になつたのを悔いた。然し、こゝでこのままコルシカを見棄てゝ歸國してしまつては、折角得たる向ふ見ずの旅行者たる名聲を臺なしにしてしまふので、こゝ暫く辛抱をして、出來るだけ時間潰しをやらうと決心した。先づ繪筆と畫帳を取り出して灣内の眺めを描いたり、また、よく外國で見受ける野菜作り型のメロン賣りの、日に燒けた、髯の白い、想像もつかないやうに獰猛な惡黨面をした百姓老爺の顏を描いたりした。こんなことだけでは氣散じにもならなかつたので、彼女は伍長の後裔（オルソのこと）ともつと打ち解けようと考へた。これは造作の無いことであつた。オルソは急いで歸村

をしようと言ふのでもなく、また、アジャッチオには知人が一人もゐなくなつてゐても一向平氣で幸福さうにしてゐたからであつた。それからリディアはこの山家育ちの熊(オルソのこと)を慣らして、フランスからその目的で歸國した、彼の不吉な計畫を斷念させてやらうと言ふ、崇高な仕事を成し遂げてみたいと決心した。彼の性格を少しばかり研究してみて、彼女はこの青年をこのまゝむざむざと死地に遣るのは、悔いても及ばぬ恨事であり、且つ彼女の纖手を以てして、よく一人のコルシカ人を正しき方向に轉換させることが出來たなら、どんなに尊い仕事になることだらうと考へた。

リディアと父の大佐との時間の消費方法は次のやうであつた。朝早く大佐とオルソは狩りに出懸ける。リディアは繪を描いたり、友達に宛てゝ自分は本當にアジャッチオに滯在してゐるのだと言ふことを證明するために、手紙を書く。六時になると獲物を携げて二人が歸つて來る。それから食事をする、リディアは歌ふ、大佐は眠る、若い者同志は遲くまで話をすると言つた具合であつた。

旅行の手續の形式を履むために、或る日大佐は知事を訪問しなければならなかつた。知事は當時アジャッチオ駐在の他の官吏連のやうに退屈し切つてゐた。そこへ英國の紳士で富裕で、名門の出で、美人の令孃の父たる人の到着と聞いては途方もなく喜んだ。で、大佐が訪問すると手厚く歡迎して、何でも盡力いたしませうと言つて、二三日經つと答禮の訪問にやつて來た。大佐は食事を濟ませたばかりのところで、長椅子に氣持よく腰を下して、もう、うとうととしてゐるし、リディアは壞れたピアノの前で自分の伴奏で歌つてゐるし、オルソは彼女の白い肩と美しい顏に見惚れながら、彼女の歌

を繰り返してゐるところであつた。知事が部屋に入ると、リディアは彈奏を止めた。大佐は彼女を知事に紹介した。

「デラ・レビア君は御紹介にも及びますまい。」と、大佐は言つた。「もう御存じでせう。」

「貴方はデラ・レビア大佐の御子息ですな?」と、知事は聊かひるみながら訊ねた。

「はあ、さうです。」と、オルソは答へた。

「私は御尊父を存じてゐましたよ。」

平凡な會話の種は直ぐに盡きた。大佐は一生懸命に骨を折つてみても、欠呻を抑制することが出來なかつた。オルソは不羈奔放な性質だから、權勢に誇る官僚とは話をしたがらなかつたので、リディアが談話を取り持つた。然し、知事は談話を折らなかつたので、リディつま嬉人と、パリを語り、社交界を語るのは嬉しくてならなかつた。彼は歐洲の名高い人々に多數の知己を持オルソに對しては少なからぬ好奇心で見守つてゐた。知事はお喋舌をしながらも、猶ほ

「貴方はデラ・レビア君とはフランスで初めてお逢ひになつたのですか?」とリディアに訊いた。

彼女は少しもぢもぢして、コルシカへ渡る船で初めて知り合ひになつたと言つた。

「あの方は實に見上げた青年ですよ。」と、知事は言つて、ふと、聲を低くし、また、だん〳〵低くして、

「あの方は何故コルシカへ來たのか話しませんでしたか?」

リディアは英吉利婦人らしい威厳を以つて、
「私は聞いてみませんでした。貴方がお聞きになつたらいかゞでございます？」
知事は暫らく默つてゐた。そして一寸の時間を置いて、オルソが大佐に英語で話しかけてゐるのを聞くと、オルソに向つて、
「貴方は隨分長く旅をしてゐたでせう。もうコルシカをお忘れになつたでせう——風俗や習慣など。」
「私が生國を出たのは非常に幼い時代だつたことは事實です。」
「まだ軍隊にお勤めになつてゐますか？」
「半給にさせられたのです。」
「貴方は佛蘭西の軍隊に隨分久しくいらつしつたから、もう佛蘭西人になつておしまひでしたでせう。」と、知事は劍のある口調で言つた。
コルシカ人は自分の國が佛蘭西領だと言ふことを知らせられたつて、それを少しも喜ばなかつた。彼等は獨立した人種だと思ひ、それが當然の要求として通つてゐるものと信じてゐた。オルソは少し機嫌を損じて答へた。
「貴方はコルシカ人が一本立ちの立派な人間として通るには、佛蘭西の軍隊に勤務せねばならんとお考へなのですか。」
「いや、とんでもないこと。」と、知事は答へて、

「そんなことは思つてもみないことです。たゞ私はこの國の或る習慣のことに就てゞすね、その習慣の中には私のやうな行政官吏としては、見ないで濟むことなら見たくないものだと言ふことを話したゞけなんです。」
知事は習慣なる言葉を特に强く言つて、特にむづかしい顏をした。それから間もなく彼は歸り支度をしたから、リディアは知事夫人を訪問することを約した。
知事が歸るとリディアは言つた。
「知事つてどんな者だかはつきりと知るために、コルシカ島へ今までに來て置けばよかつたと思ひますわ。今晚の御客樣は好いお方のやうに思へますわ。」
「私の考へでは。」と、オルソは言つて、
「全部的には貴女に共鳴は出來ませんな。私はあの知事の思ひ揚つた、そして同時に、わからない態度が頗る變つてゐるとしか思はれませんですよ。」
リディアは父の大佐をちらと見た。父は半ば眠つてゐた。嬢は聲をひそめて言つた。
「あの態度は貴方がお考へになるほど判らないつていことはないやうでしたわ。だつて、あのお方のおつしやることは分つてゐたぢやありませんか。」
「貴方は實に鋭敏なお方なのです、ネヴィル嬢。貴女があの人の言つたことの中から何か面白いことでもおさがしになつたとしたら、その滑稽を探し出したものは貴女だけなのです。」

「それはマルカリレ侯爵（モリエールの喜劇の中に出る人物。）に應はしい觀察ですわ。私はこれで卜占がすこし判るので
すからねえ、二目と見たお方なら、そのお方が何を考へてゐらつしやるかちやんと判ります。」
「これは大變だ！　脅かしてはいけません！　貴女が本當に私の心をお讀みになることが出來るとす
ると、私は喜んでいゝものやら、吃驚仰天していゝものやら判りません！」
「デラ・レビアさん。」と、リディアは赧くなつて、
「私共はこの數日知り合ひになつたに過ぎません。然し航海中と未開の國では——と申し上げること
を御免遊ばせ——友誼は社交界よりはよほど早く成立すると承つてゐます。ですから貴方を『友』
として、個人の內情に立ち入つたお話をしても堪忍して頂けますわねえ、それは『通り一遍の人』な
ら立ち入りもしませんでせうけれど。」
「お願ひですから『通り一遍の人』なんてつ仰しやらないで下さい。それは『友』と言つて頂く方が
遙かに嬉しいですよ。」
「それは結構ですわ、貴方の個人的の生活を犯すことなく、お話させて頂きますわ……私ねえ、そこ
で、ある確實な事實を見拔きました。その中には、本當に私が仰天しなきやならないこともあります
の。私は貴方の御家族に對して、殘忍な御被害があつたことをよく存じてゐます。また、貴方の生國
のお方の復讐的本能のことも、復讐をする形式も承はつてゐます。それは知事さんがお話しになつ
たやうなことなのですわ。」

オルソは、
「リディアは考へ當てたな？」
と、思つた時、颯つと死の如く蒼ざめた。
「あら、デラ・レビアさん。」と、彼女は續けて、
「私ねえ、貴方は紳士であり名譽あるお方だと判つてゐますの。御自身でもお生國でも、今時復讐な
ど言つて刃物三昧をするのは平凡な人達だ、あれは寧ろ決鬪と言ふ言葉にした方がいゝとお話にな
つてゐましたわねえ。」
「貴女は私が世間竝の刺客だと本氣でお考へになりますか？」
「かうまでお話し申し上げてゐますのですから、私が貴方を御信用申し上げてゐることを、貴方はお
判りになつてゐますわねえ。」と、言つて、眼を落して、
「私はかう感じますの。貴方が御歸國遊ばすと、野蠻な偏見を持つた人々に圍繞かれる位置にお立ち
になるのでせうけれど、貴方が、その偏見をきつぱりとはねつけるだけの勇氣をお持ちになつてゐる
のを、一方には賞讃してゐる人があることをお悟り下さいますわねえ。だが、まあそんな厭なことは
もうお話をいたしますまい。そんなことを考へると、私、頭痛がいたします。それから、兎も角も遲
くなつて來ました。貴方、私が厭にはお成りになりませんでしたわねえ。お休み遊ばせ！」と、彼女
は英國の婦人流に彼女の手を差し出した。オルソは硬くなつてその手をとつて言つた。

「ネヴィル令嬢、私の生國の感情が私の胸に煮え立つ瞬間は無いとは申しません。また、私の父のこと考へると、殺伐な考にとつ魅かれることも時にはございます。貴女のお蔭です、もう二度とはそんな考を私の胸の中へは入れますまい。有り難うございます、有り難うございます！」

オルソが行きかける時、リディアは匙を落したので、大佐はその音で眼を覺して、

「デラ・レビア君、明日の狩りは朝の五時出發だよ。寢過さないやうに、ね。」

五

翌日リディアが女中を伴れて海岸の散歩を濟せ、二人の狩獵家達が歸つて來る一寸前に、宿に着きかけると、小さいながら逞ましい馬に跨り、黒い着物を着て町へ入つて來た一人の若い娘を認めた。その娘には農夫體の者が、これまた馬に跨つて、彼女のお伴に蹤いて來てゐた。彼は圓い鳶色の胴衣の、ゴツゴツした肱のところが見えるものを着て、肩には水筒をかけ、腰の帶革にはピストルを挾んでゐた。手に持つ小銃の尾底部は鞍に固着せる革嚢に嵌つてゐる。その姿を一口に言ふと、童話劇の山賊かコルシカ市民の旅行の時の附屬的裝飾品！

リディアの注意は眞先にその娘の素的な美貌に向けられた。年齡は略二十歲、脊高く、金髪で黒く て碧い眼、紅い口、エナメルの如く白い齒。彼女の顏には氣位の高さと不安と悲哀とが漂つてゐた。頭上に黒の絹の被衣を着てゐるが、これはジェノエス人によりてこの島に紹介せられたメザロと名付

けられたる品で、それが島の婦人には誠によく似合ふのである。娘の房々とした頭髪の長い鬢髪は、頭上に自らなる一種の頭巾となつてゐて、着物は非常に簡素だとは言へ、塵垢一つつけない清淨さであつた。

リディアは、この娘を眺める時間がかなり澤山あつた。娘は馬を止めて路傍の人に何かを訊いてゐた。娘の表情では、それが頗る大切な用件らしかつた。リディアや父が泊つてゐる宿の前でぴたりと止つた。それから娘は馬に一鞭くれて驅けさせたが、女關の扉の傍なる石の長椅子に腰掛けた。お伴は馬を二匹とも厩舍へ曳いて行つた。

リディアはうつとした盛裝で、この娘の前を通つたが、娘はやはり以前と同じ態度で、同じ場所に腰かけてゐた。間もなく、大佐とオルソとは、その日の狩獵から歸つて來た。すると、旅館の亭主が、この若い娘に二言三言言つてから、デラ・レビアを指した。娘は赧い顏をして、立ち上つて一二間つかつかと進んで、どぎまぎしたかの如くに立ち止つた。オルソは娘の傍にゐて、珍らしさうに彼女を眺めてゐた。

娘は感極まつて、體軀を慄はせながら言つた。

「貴方はオルソ・アントニオ・レビアさん？　私はコロンバ！」

「コロンバ！」と、オルソは叫んだ。

と娘を自分の兩腕に抱いて、柔しく彼女に接吻した。大佐もリディアもこれには驚いた。英國では町中で相抱くと言ふ習慣はない。

「兄さん。」と、コロンバは言つて、

「兄さんから何ともお沙汰がない内に、かうしてお伺ひしたのをお許し下さるわねえ。でも、私、兄さんがお着きになつたつて、お友達から聞きました。そしてこんなにお逢ひすることが出來たのは私にとつて非常な慰めでございますわ。」

オルソは彼女に再び接吻した。そして大佐の方へ向いて言つた。

「これが私の妹です。もう見忘れてしまつて、妹の方から紹介してくれるまでは私には判りませんでした。コロンバ、このお方がトーマス・ネヴィル大佐だよ。大佐、今晩私は御一緒にお食事をしないのは失禮ですが、お見逃しをお願ひいたします……妹は……」

「おや、そんなことを言つて、一體何處で君方は食事をする積りだい？　御承知の通りにこの安宿には食卓は一つしかなくつて、それは吾々が皆買ひ切つてゐる。お妹さんも御一緒になつて下さればよいのに。」

孃も非常に喜ぶのに。」

コロンバは兄を眺めた。兄は强情を張らなかつた。そこで三人はこの宿の大廣間へ通された。そこは大佐の食堂兼客間であつた。

リディアに紹介せられると、デラ・レビア・コロンバ孃は非常に慇懃な態度をとつたが一言も口を

利かなかつた。孃は恐縮してゐた。生れて初めて身分の好い外國婦人と舍つたらしかつた。しかし、彼女の態度には田舍者臭い所はなかつた。餘りに懸隔れてゐたから、少しも不作法にならなかつた。この點で彼女はリディアの氣に適つた。この宿には空間がなかつたから、リディアは、コロンバ孃が使ふ寢臺を、自分の隣りに竝べさせると進んで申し出た位にまで、親切と好奇心とが湧き立つた。

コロンバは感謝の言葉を口籠りながら述べると、リディアの女中の後について出た。暑い埃たらけの日中を、馬に乘つて旅をした後なので、埃を拂ひ、顏や手を洗ふためであつた。

再び部屋へ歸ると彼女は大佐の鐵砲の前で立ち止つた。その鐵砲は二人の狩獵者が部屋の隅に置いたものであつた。

「まあ見事な武器ですこと！」と、彼女はオルソに言つて、

「これお兄さんのもの？」

「いや英國製で、ね。大佐殿のものだよ。見かけと同じく素晴らしくよく射てるんだ。」

「どうかして阿兄さまもねえ。」と、コロンバは言つて、

「こんなに好いのをお持ちになれるやうだつたらいゝのに、ねえ。」

「その內一挺は確かにデラ・レビア君のですよ。」と、大佐は叫んで、

「それを兄さんが持つと、ほんとに鬼に金棒さ！　どうして、今日なんか十四發射つて十四匹射ち落しちやつた！」

オルソと大佐とは、直ぐに親しみの戰闘から、お互ひに譲り合つたが、結局大佐の勝ちになつた。コロンバ嬢は大滿足で、今まで眞面目な顏ばかりしてゐたのが子供のやうな喜びに輝やいた。

「どれでも好きなものを選び給へな。」と、大佐が言つた。

オルソは遠慮して辭退した。

「ぢや、お妹さんに代つて選んで貰はうかなあ。」

コロンバの方は二度と頼まれなくつても直ぐに承諾した。彼女は他の二挺よりも美しさは劣るが、名高いロンドンの製砲技師の作にかゝる一挺を選んだ。その鐵砲が中で一番口徑の大きい品だつた。

「これなら。」と、彼女は言つて、

「大きな彈丸をこめなくつては、いけないわねえ。」

兄はお禮の言葉に窮してゐた。折よく食事となつたので、その場から救はれた。リディアはコロンバと同席するのを喜んだが、コロンバの方ではきまりを惡がつて、何事も兄のすることを見習つて食事をしてゐた。彼女は食事へ入る前に十字を切つた。

「これはいゝ、つまりこの娘は純眞なのだ。」と、リディアは獨言を言つて、コルシカの古代の風俗や習慣の代表者たるこの娘を、綿密に研究しようと決心した。オルソは目に見えて、いさゝか不安げであつた。妹が生國暴き出しのことを言ふか爲るか爲はしないかと心配をしてゐた。しかし、コロンバはよく注意して兄を見まねてゐて、少しも誤ちをしなかつた。彼女は屢々悲しげな顏をして彼を

見てゐた。もしも兄妹の眼と眼が衝突かると、最初に眼を外らすのは兄であつた。それは默々の裡に妹から兄に傳へんとする問ひを、兄は避けんとしてゐるよと言つてゐるかのやうであつた。

この仲間は佛蘭西語で話をした。それは大佐は伊太利語が少ししか判らなかつたからであつた。コロンバは佛蘭西語を知つてゐた。大佐に向つて話した數語の發音はなか〳〵立派であつた。

食事が濟むと、大佐はオルソと妹との間に意志の疎通を缺いでゐると感じて、親切にオルソに向つて、お妹さんと靜かにお話をしてはどうだ、それなら自分は孃を伴れて別室に入つてもいゝとまで言つた。オルソは感謝しながら兄妹は鄕里のピエトラナ村へ歸れば、いくらでも話をする暇がありますと言つて、それには及ばないと言つた。

そこで、大佐は例の如く長椅子に腰を下した。リディアは世間竝な會話をした後に、美しいコロンバに話をさせる考へを捨てて、オルソにダンテの詩を讀んでくれと頼んだ——ダンテはオルソの愛誦してゐる詩人であつた。

オルソはフランチェスカ・ダ・リミニの挿話が入つてゐる地獄篇を選んで、精一杯力を籠めて抑揚よろしく、その崇高なる詩篇——それには、二人ぎりで戀物語を讀むのは危險なものだと言ふ意を巧みに偶してある——を讀み始めた。

彼が讀み續けてゆくと、コロンバは卓子の近くへ來て、頭を揚げた。大きく見開いた眼は素晴らし

い火のやうに輝いた。或る時は紅く、また蒼くなり、興奮するにつれて椅子に坐つてゐながらも體軀が慄へてゐた。詩の美を說明するのに、衒學者を待つ必要がないとは、伊太利人は何と不思議な天稟を享けてゐることだ！

オルソが讀み終ると、コロンバは叫んだ。

「いかにも立派ですわねえ！　誰が作つた詩？」

オルソはこの質問にいさゝかひるんだ。リディアは微笑しながら、その詩は數世紀前に亡くなつたフローレンスの詩人の作だと言つてやつた。

「村へ歸つたら、ダンテを讀んで聞かせて上げよう。」と、オルソは言つた。

「本當に不思議なくらゐ美しいこと！」とコロンバは再び言つた。そして聲を低めて、今聞いて記憶したばかりの三四行の詩を口誦んだ。だん〳〵熱狂して來ると、兄がその詩に表はしたよりは遙かに感情を籠めて朗讀した。

リディアは驚いて、

「貴女は詩がお好きなのねえ。ダンテを初めてお讀みになるお喜びは、傍でみてお羨ましいと思ひますわ！」と、言つた。

「本當ですよ。」と、オルソは、

「ダンテの詩つて、何て不思議な力を持つてゐることでせう。こんなに『主の祈り』しか知らない無

教育同樣な娘を、かうも感動させるのですからねえ。おつと！　これは間違つた！　コロンバはこれでゐて本氣で詩作に耽つたのでした。まだ極く幼ない時分から詩を作つてゐました。父は手紙の中でもよく私に知らせてくれました。詩を立派に歌ふことにかけては、ピエトラナ全村どころか、數哩近村には比肩するもの一人もなしと言つてゐました。」

コロンバは、どうか言はないでくれと頼むやうな眼付きで兄を見た。しかし、リディアは、嘗てコルシカには卽興詩人がゐると聞いてゐたことがあるので、是非ともその一つでも聞きたくてたまらなかつた。そこで、コロンバに彼女の腕前を一つ見せてくれるやうにと願つた。かうなつて來ると、オルソは、うか〳〵と妹の詩才のことを喋舌つたのを悔いはじめて、仲へ入つて、だがコルシカの挽歌は退屈なものだから、名篇たるダンテの後へ附けて誦つては伊太利を冒瀆することになると言つて反對してみたが、それは却つてリディアをして益々熱心にさせたに過ぎなかつたので、遂に負けて妹に言つた。

「よろしい！　何でもいゝからお作り。だが、短かいものほどいゝんだよ！」

コロンバは暫らく卓子を見て溜息を吐いて、それから天井の桁を見上げた。やがて彼女は兩手で眼をかくした。小鳥が、自分の方から見えない時は、人からも見られてゐないと安心してゐるのと同じやうな樣子であつた。そして、歌つた——と言ふよりは、寧ろ不確かな聲で次の詩を朗讀した。その詩には、題がついてゐた。

少女と野鳩

遠い、遠い、山蔭の谷の間に——陽は一日に一時間しか照らさない——そこに暗い家があつて、いつでも家の闥の上まで草が繁つてゐた。——窓も扉も閉め通し。——煙突から煙が出たことがない。——然し、眞晝に陽が照る時は、窓一つだけ開けられて、絲車から絲を挽く。——彼女は紡ぐ、働く。悲しみの歌を歌ふ。——歌へど答ふる者とてなし。

或る日、春の或る日、一羽の野鳩が近くの樹の枝に止つて、少女の歌を聞いてゐた。

「お孃さん、あなた一人で悲しむには及ばない、殘酷な鷹が私の妻を奪りました。」

と、野鳩は言ひました。

「野鳩さん、その盜人を私に敎へて頂戴な。——よしや雲間に翔けるとも、私は大地へ連れて來て上げよう。——だけど、誰が私の兄を連れて來よう、この私の悲しみの中に、兄は遠き異國の旅の空。」

と、少女は答へました。

「おゝ！　お孃さん、お兄いさんは何處ですか？　お言ひなすつて御覽なさい、私が飛んで行つて、連れて來て上げませう。」

「それは、育ちの好い野鳩だなあ！」と、オルソは叫んで、表面の笑ひとは著しく違つた感動を以つて、妹に接吻した。

「まあ可愛い好い歌ですのねえ。」と、リディアは言つて、

「私の畫帖に寫していたゞきたうございますわ。そして、それを、私、英語に譯して、樂譜をつけませう。」

無頓着な大佐は、一語も判らなかつたんだが、令孃の挨拶に續いて自分も讚辭を述べて、

「今の詩に出た野鳩と言ふのは、今晩揚げ物にして吾々が食つたあの鳩ですか？」

と訊いた。

リディアは畫帖を持つて來た。そして、この女流詩人が、變な風に、その詩を書くのを見て、少からず驚いた。字句の配列が一行置と言ふのでなく、紙幅の許すかぎりは散文の如くに詰めて書いて、詩を書く一般の形式は全然履んでゐない。詩を書く時には、前後に餘白を殘して、列を揃へ、長さは整へずに書くものとなつてゐた。

それからコロンバ一流の誤つた綴りがあつたりして、それには二三度リディアをして微笑せしめた。彼女の兄は、神經を尖らせて、ひや〳〵してゐた！

眠る時刻となつたから二人の娘は部屋に引き退つた。リディアは頸飾りや、腕環を外しながら、コロンバを見ると、彼女は胸當てのやうな長さだが、形は餘程違つてゐるものを、上着の下から取り出

した。彼女はこれを用心しながら、また殆んど内密に、机の上の被衣の下へ入れた。そして、膝まづいて、祈りを上げて、それから二分間もすると、寝床の中へ入つてしまつた。

調べ好きの性質からと英吉利婦人流に着換へに暇取る癖からとで、リディアは卓子に近づいて、ピンを探してゐるやうな風をして、被衣を取り上げて見るとその下から短劍が出て來た。それは寧ろ長い方で、銀と親眞珠で裝飾がしてあつて、細工は非凡の出來榮えで、一見して時代の附いた武器と判つた。蒐集家にとつては頗る高價なものだと言ふことも解つた。

「これはこの國の若い婦人の習慣になつてゐますのですか。」と、リディアは笑つて、

「腰當の中にかう言ふものを入れてお持ちになるのは？」

「非常に大切なんです。」と、コロンバは溜息とともに答へて、

「隨分と澤山惡者が橫行してゐるのですわ。」

「そして、貴女は惡者にお出會ひになつた時には一擊を加へてやるだけの勇氣が本當にお有りになつて——こんな風にして？」

かう言つて、リディアは芝居で見る通りに劍を下向きに一突きする摸擬をした。

「えゝ。」と、コロンバは答へて、

「自分を防いだり、または友達を防ぐために、いざとなつた場合にはねえ。だけど、そんな風に持つのでは無いのですわ。それだと、敵手が一步退いたら自分が怪我をすることになります。」と、彼女は

床の中に膝まづいて、

「御覽なさい、かう構へますの、上へ突くのですわ。かうすると致命的ですつて聞きました。こんな刀なんかのいらないお方達は幸福ですわねえ！」

彼女は溜息をついて机に伏して、眼を閉ぢた。彼女に優る美しさ、氣高さ、乙女らしさを持つ頭は何處にもなかつた。名匠フィディアスが彼の「智慧の女神」を創つた時でも、これ以上に美しいモデルは願つてはゐなかつただらう。

六

ホレースの掟に從つて、さあ、「事物の核心に飛び込んで」、幸ひ全家族——美しいコロンバも大佐も令孃も——が眠つてゐるこの機會を捕へて、——讀者諸君もしこの事實物語りを更に深く調べんと希望せられるならば、二三細かなお話を致しませう。

オルソの父デラ・レビア大佐が暗殺せられたことの如く、出たての脫獄囚が何とも外に方法が無いと言ふので、お金欲さから通りがかりの人を殺害すると言ふやうなことは無いのです。だが、仇敵に殺されると言ふことは有るのです。そして、何故、何處で仇敵を持つ身になるやうになつたかと言ふことは、往々にして說明し難いことです。ずつと大昔から互ひに憎み合つてゐる家族は澤山あるのですが、この相互が憎惡し合つてゐる原因に至つては

長い年月の間に消滅してしまつてゐるのです。何だか知らないが、あの家と自家とは仇敵同志だと言ふ風な傳說に囚れてゐます。

デラ・レビア大佐が一員として屬してゐた家族は、三四の他の家族と憎み合つてゐましたが、特にバリチニ家を最も憎惡してゐました。その由來は遠く十七世紀からのことで、デラ・レビア家の一人が、バリチニ家の一人の娘を唆かして籠絡したことがあつたとかで、娘の親戚のバリチニ家の者から刺殺されたと言ふのです。ところが、實際の事實は、娘を唆かされたのはデラ・レビア家の方で、殺された者はバリチニ家の方だと言つて、全然反對の話が傳へられてもゐるのです。兎も角も、古い言ひ草だけれど、この兩家は相容れない血緣つゞきであつたのです。だけど、この特殊の殺害事件は、他家の間のやうに、次ぎの復讐的殺害事件を生みませんでした。これはレビア家もバリチニ家も、當時のジェノエス政府から迫害せられて、兩家の青年達は海外に遣られ、何代もの間、最も血の氣の多い筈の家の支柱を奪はれてゐたからでした。

十八世紀の末に一人のデラ・レビアを名乘る士官でネープル王に仕へた者が、カルタの勝負での席で外の士官達と喧嘩をしました。外の士官が、澤山の惡口の中で、一言「コルシカの羊飼ひ奴」と言つて彼を侮辱したからだと言ふのです。彼は忽ち劍を拔いて渡り合つたのですが、三人を相手にしての勝負ですから、若しも、その際丁度同じ場所でカルタを取つてゐた一人の見知らぬ士官が、「私もコルシカ人だ！」と叫んで、彼の助太刀に飛び込んで來て呉れなかつたら、隨分不利な位置に立つてゐたのでした。この見知らぬ士官はバリチニ家の者であつたのでしたが、全く同國人だとは知らなかつたのでした。

相互の紹介が濟んで、鄭重な禮儀や、不變の友誼の誓ひが交されました。海外に居る時はコルシカ人は直ぐに親密な友人となるのです。だが、鄉里へ歸るとケロリとしてそれとは反對になるのです。その一番適切な例はこゝに話したこの二人の場合です。二人は伊太利に住んでゐる間は非常に親密でしたが、一旦國へ歸つたとなると、お互ひに滅多に逢ひませんでした。同じ村に住みながら、一度だけ顏を合せたことがあつたのが五六年ぶりだつたと言ふのです。それから二人の子孫共は、全く生國の掟どほりに生活しました。オルソの父のギルフチチオは士官になりました。一方ギュディチェ・バリチニは辯護士になりました。兩家の家長は職業が違ふので、殆んで相逢ふこともなく、お互ひに噂さも聞きませんでした。

だけど、千八百〇九年の或る日にギュディチェ辯護士はバスチア發行の新聞を讀みながら、ギルフチオ大尉が十字勳章を授けられたと言ふ記事を讀むと、一族の者を目の前に置いて、自分はそんなことには驚きはしない。某將軍がギルフチオ大尉の家族とは竝々ならぬ親みを持つてゐることが、ちやんと知れてゐるからだと言つた。この話がヴィンナに居たギルフチオ大尉に傳へられると、大尉はまた一人の同鄉人に、もしも私がコルシカへ歸省するやうになつたら、ギュディチェが大したお金持に出世して居るのを見せられるだらうさ、彼は勝公事の者よりは負公事の者の方から、うんと多額の金

を捲き上げてゐるからだよ、と言つた。

大尉はこの言葉によつて、辯護士と言ふものは訴訟依頼人の富につけこんで、つまりはそれを捲き上げる商賣だと言ふことを諷したものか、それとも辯護士の懐へ入る金と言ふものは、勝公事より負公事の方が多いと言ふ事實を單に話しただけだかは不明であつた。兎も角も、この話はコルシカにゐるバリチニ辯護士の耳に入つたから、辯護士は決してそれを忘れないでゐた。

千八百十二年にバリチニ辯護士は自治體の村長に任命ありたき旨を請願して、その椅子を熱望の的とし、また見込も充分ついた矢先き、某將軍は一書を知事に送つて、ギルフチオ夫人の親戚の者を推薦した。

知事は周章て、將軍の意を嚮へた。だから、バリチニは内心、自分の當てが外れたのはギルフチオの隱謀によるものだと疑ふやうになつた。

千八百十四年にナポレオン皇帝が沒落すると、某將軍の知人の自治體の村長も、ナポレオン黨だと宣告せられたから、バリチニへその椅子は廻された。彼はナポレオン復活の「百日天下」の時に、番が廻つて、一度免職になつた。然しこの嵐が止むと、非常な華々しさで、も一度村長の公印と戸籍簿とを獲得した。

これから後の彼の運勢は、以前に増してトントン拍子で進んだ。半給のデラ・レビア大佐がピエトラネラへ歸鄉してみると、絶え間なしに小面倒な訴訟事件が起つた。或る時は大佐の馬が村長の畠の

垣をくゞつて入つたと言ふので、その損害賠償のために召喚せられた。また或る時は墓地の標準石を修繕する必要止むを得ないと言つて、村長はデラ・レビア家の亡骸を埋めた、家の紋を彫つてある、壞れた墓石を移させた。山羊が大佐の苗を食つても、山羊の持ち主が大佐の訴へを村長に差し出した。また、村の郵便局長を勤めてゐる乾物屋と、ナポレオンの旗下で負傷兵となつた老巡査の二人は、レビアの世話になつた者であつたが、續けざまに免職にさせられて、バリチニの家の子がそれに代つた。

大佐の夫人は臨終の床で、生前夫人が散歩をすることを好んだ、小さい森の中に埋めてもらひたいと言ふ希望を述べた。すると村長は直ちに、夫人は村の共同墓地に埋めねばならないと言ふ通知を發して、自分はレビア夫人だけを單獨に埋葬しても「可なり」と言ふ官廳の許可を受けてゐないのだからと言ふのであつた。大佐は嚇怒して、そんな許可なんかはあり得べきものではない、あるものならば、あるまでゝも妻は生前希望の地へ葬つて置くと言つた。そして、その森の中へ墓穴を掘らせた。すると、村長は、自分の方でもと言ふので、共同墓地へ墓穴を一つ掘らせて、彼の所謂「法の强制」と言ふ點から警察官を呼びにやつた。

葬式の當日になると、雙方の家の子郎黨は面と向つて、相待峙した。デラ・レビア夫人の遺骸爭奪の戰爭が今にもおつぱじまるかと思はれた。約四十人から成る全身武裝の農夫は亡き夫人の親戚の者の指揮に從つて、敎會から出て來た司祭師を無理强ひに、森の方へ通ずる道へと案内した。その反對の

側には、村長と二人の息子と家の子郎黨と警官が進んで來た。村長が飛び出して來て、葬式は後戻りをしなければならないと命令すると、彼は叱聲と脅迫の罵倒を浴びせられた。數に於てデラ・レビアの方が優つてゐた上に、全員みな決意の臍を固めてゐた。村長が前へ出ると、數挺の鐵砲は裝彈せられたのみならず、一人の羊飼ひの如きは將に村長に發砲せんとしたところを、大佐がその鐵砲を蹴り上げて、

「私が命令を下すまでは何人と雖も發砲することならん！」と怒鳴りつけたと言ふ話まで傳はつた。

村長は芝居の惟盛さんもどきで「本來矢玉がお嫌ひ」だつたから、戰爭なら御免だとばかりに護衛の者共を引き伴れて退却した。そこで葬式は村役場の前を通るやうにわざ〳〵廻り道をして、ねりこんで行つた。役場の前へ來た時に、ある呆けた男が、「皇帝萬歳！」と叫んだ。すると、二三の者もこれに誘はれて同じことを叫んだ。デラ・レビア黨は次第に興奮して來て、折惡しくその時列の進行を妨げるやうな具合に現はれ出でたる村長所有の牡牛を敲き殺さうと言ふ騒ぎにまでなつた。幸ひにして、大佐は一同を慰めたから、そんな馬鹿げたことだけは行はれないで濟んだ！

勿論、村長は一通の報告書を作製し、最高華麗の言辭を羅列して知事に上申した。彼は神が定め、人が定めた掟も法律も蹂躙せられ、村長の威嚴も司祭師の天職も等しく無視せられ侮辱せられたと美文調で書き立てた。更にまた、委曲を盡してデラ・レビア大佐はボナパートの隱謀に加擔して、皇位

承繼の順位を逆へし、コルシカ島民を煽動して、内亂を釀成せしめんとする者なりと主張して、大佐の罪はよろしく刑法第八十六條及九十一條に照らして死刑の判決これ有るべきが至當なりと思推すと書いた。

この上申書は、文辭に誇張ありと言ふ件で、捗々しい效果をあげ得なかつた。大佐の方では知事と檢事とに一書を認めた。亡き夫人の親戚と島の一代議士とは親戚であつたし、もう一人の親戚は皇帝附き侍從の從弟であつた。そんな高貴の位置の人々のお蔭で、村長の訴狀は無效となつた。デラ・レビア夫人は平穩に森の中に眠ることが出來た。ただ、「皇帝萬歳」を叫んだ呆けた男だけは十五日間入牢を申し渡された。

この事件に不滿を抱いてゐたバリチニ辯護士は、方向を轉じて考へた。

彼は或る古い利權問題を思ひ起した。それを調べると、旦下水車を廻轉させてゐる或る水流の所有權が大佐のものとなつてゐるのに對し、自分は抗爭し得る立場にあることがわかつて來た。彼は法廷に訴訟をおこした。事件はかなり長い間手間取つた。一ケ年も論爭した擧句、裁判所はやつと判決を下しかけ、事件はどうやら大佐方に有利に解決せんとした間際になつて、バリチニは檢事の手に一通の書面を差し出した。それは有名なる無賴漢アゴスティニの記名がしてあるもので、辯護士の方からこの訴訟を願ひ下げにするにあらずんば、家は燒き身は暗殺にするぞと言つて脅迫して來たものであつた。

人の知る如くコルシカでは無賴漢から保護を受けることを必要としたことも往々あつた。それからまた自分には何等關係のないことでありながら、友誼上默つて見ては居られないと言つて、他人の係爭に對して一役買つて出ると言ふことも往々あつた。

村長はこの手紙をうまく利用したのであつた。そこへ一つの新らしい紛糾事件が起つて來た。無賴漢アゴスティニは一書を檢事に提出して、自分の記名は何者かによりて僞筆せられたのだ。僞筆者は、自分は如何にも勢力を食ひ物にしてゐる者の如くに陷し入れる目的を以て、かゝる僞筆をしたのであると言つて、最後に彼は、「我若し斯る僞筆者を捕らへたらんには、二度と忘れ得ざる程度の懲罰をその者に加へるべく候」と書いた。

明らかにアゴスティニは村長へ脅迫狀を送つたのではなかつた。デラ・レビア家の人々は脅迫狀の僞造はバリチニ家の奴等だと言ひ、バリチニ家ではまた同じやうに、僞筆はデラ・レビア家の奴等だと言つた。雙方負けず劣らず、激しい脅迫を口にして、當局も、孰方が有罪なものやら、判斷に苦しんだ。

この騷ぎの中ばに、ギルフチオ大佐が暗殺されたのであつた。次の事實が裁判所で調査したところ

千八百——年八月二日の夕刻、ピエトラナ村へ穀物を運送中のマデレエヌ・ピエトリなる一婦人が、村へ通ずる路の低地の方に當つて續け打ちに二發鳴る小銃の音を聞いた。それは婦人が居た地點

より約百五十ヤードを距つてゐた。彼女は直ぐに、一人の男が身を屈めて葡萄畠を通りぬけ、村の方へ走り去るのを認めた。この男は、ふと立ち止つて、背後を顧みた。しかし、婦人よりの距離が遠かつたから面貌がわからないばかりでなく、彼は一枚の葡萄の葉を口にくはへてゐたから、顏の大部分は蔭されてゐた。彼は自分の友に對して、手で以て合圖をして、葡萄園の中を何處ともなく消え去つた。友人は婦人の居るところからは見えなかつた。

ピエトリは荷物を投げすてゝ、小徑を驅け上つた。すると、デラ・レビア大佐が逃る血に染つて二個所に彈丸を受けながら、まだ生きてゐるところに出逢つた。大佐の傍には裝塡した銃が引金を起したまゝ、恰も大佐が面前の敵を防がうとした瞬間に、背後の敵からだまし打ちにせられたことを語つてゐるやうに投げ出してあつた。大佐は死の苦痛と鬪ひながら、物を言はうとしたけれど一言も口が利けなかつた。これは後で醫師の說明によると、傷は肺臟にあつたから當然の現象だと言ふことであつた。大佐は口の中で苦の如く凝まつた血液のために呼吸が出來なかつた。

ピエトリは大佐を抱き起して二三の質問をしたけれども駄目であつた。大佐の方では話したがつてゐるのだが、それが出來なかつたのだとはピエトリにもよく分つた。よく見ると大佐は頰りにポケットへ手を入れたがつてゐたから、ピエトリは急いで小さな手帖を取り出してやつて、それを披いて大佐の前に差し出してやつた。頻死の大佐は鉛筆で何かを書きとめようとした。事實、大佐は何か三四の文字を苦心して書いたのだが、ピエトリは無學だつたからその意味を知ることは出來なかつた。

大佐はこの苦闘に力が盡きたらしく、手帖を彼女の手に渡し、シッカリと彼女の手を握つて、同時に異樣な態度で彼女を熟視して如何にも意味ありげに、——その意味は後に彼女は證人として次のやうに言つたが、

「その手帖は大事だ、加害者の名がわかる。」と、言ひたげにしてゐたと言ふのであつた。

ピエトリは村へ登つて行つた。するとバリチニ村長が息子のヴィンセンテロと一緒にゐるのに出逢た。村長は手帖を取り上げて大急ぎで役場へ行つて、村長の職綬を附けると書記と警察官とを呼び立てた。ピエトリはヴィンセンテロとだけ殘つてゐた時に、貴方は大佐はもしかしたらまだ生きてゐるかも知れないから救助に行かれたらどうですと言ふと、ヴィンセンテロは自分の家は大佐の家とは仇敵同志なのだから、大佐の近くへでも行くと、大佐殺害の嫌疑を受けねばならないと言つた。間もなく村長が現場に來て、死體を移させ、報告書を作製した。

この際當然村長は逆せ上つてゐたにも拘らず、彼は大佐の手帖には封蠟を施したし、充分探索をも行はしめた。然し、肝心なる點は少しも明るみへは出されなかつた。

豫審判事が來た時、手帖は開封せられた。そして血に汚された頁の上に二三の文字が、力のぬけた手で書かれてゐるのが、朧ろげながら判るには判つて來た。それは「アゴスティ」と書いてあつたから、豫審判事は、加害者はアゴスティニだと大佐が指名しようとしたものだと確信した。

コロンバ・デラ・レビア孃が査問のために法廷に喚ばれると、孃はその手帖を一見したいと要求した。詳細にその手帖を調べた末に、孃は手を村長の方に差し延べて叫んだ。

「そこにゐるのが加害者です！」

そして、悲哀に沈み勝ちの彼女の感情から推すと、正に驚嘆すべき凜とした明朗なる口調で、次のやうなことを述べた。

彼女の父は數日前に長男から手紙をもらつた。そして、それを燃した。燃す前に長男の宛名を鉛筆で手帖に書き込んだ。長男は佛蘭西内の新任地へ所屬聯隊とともに轉勤したからであつた。然るにこの宛名を書き留めた手帖の内の一頁は見えなくなつてゐたから、コロンバは村長が破つて取つたものと認めると言ふのであつた。その頁には一方に恐らく大佐がいまはの際に加害者だと思つた者の名を書き殘しただらうと思はれる。村長は、それを破つて、その名の代りに「アゴスティニ」の名を入れたものとコロンバは推測すると言ふのであつた。

事實豫審判事も頁の一枚が失はれてゐることを知つた。然し、彼はまた手帖の他の部分の、別の頁も失はれてゐたことを見落さなかつた。それから證人の言ふところによると、大佐はよく手帖の頁を裂いて取つて、それを燃して、それから葉巻に火を點ける習慣があつたと言ふのだ。結局、大佐は長男の宛名を書き留めた頁をも、そんなことで偶然燃してしまつたらしいと言ふのであつた。それから村長がピエトリから手帖を受け取つた時は、もう眞つ暗だつたから、中の字などは何も讀み得ない筈だと言ふのであつた。そして、あの際、村長は時を移さず村役場へ驅けつけたし、警官も彼と同行し

たし、警官の面前で村長はランプに火を點けて直ぐに手帖を封筒に入れて封蠟を施したと言ふ證言が述べられた。

警官がこの證言を濟すと、コロンバは我を忘れて體軀を警官の脚許に投げ出して懇願した。それは警官は總ゆる彼の神聖なるものにかけて誓つて、その場合、一瞬間も村長の傍を離れなかつたかどうかはつきり言つて貰ひたいと言ふのであつた。かう言はれると、警官はすこし躊躇した。明らかにコロンバの興奮してゐるのに動かされたのであつた。そして、あの際自分は一枚の大型の紙をとりに隣室へ行くには行つた。然し、机の抽筐から取り出すまでのほんの一分とはかゝらない間のことだつたし、その間とても隣室の村長とは話を續けてゐたと言ふのであつた。そして警官は結局誓言して、自分が紙を持つて歸つて來た時には、血に染つた手帖は同一の場所の上に置いてあつた、卽ち村長がその部屋へ入る時に投げて置いた机の上に、もとのまゝになつてゐたと言ふのであつた。

バリチニ村長は全く沈ち着き拂つて彼の證言を述べた。彼はコロンバ嬢の興奮を宥恕する旨を言ひ、また、嬢の糾彈に對しては自ら進んで辯明することを厭はないものだと言つた。彼は證言して曰く、自分はあの晩はどこにも行かないで村にゐた。息子のヴィンセンテロも自分と一緒に村役場の近くにゐた時にあの兇行が行はれてゐた。自分の次男のオルランデュチヨは熱が出てその日は床を離れなかつた。そこで村長は彼の家の鐵砲を殘らず提出したが、最近に發砲したものは一挺もなかつた。彼は更に言葉を續けて、自分は卽座にあの手帖は非常に重要なる品と見てとつたから、それに封蠟を

施した上で、自分と大佐とは仲違ひの感情を持つ間柄なる故を以て、殺害の嫌疑を蒙ることを豫知したから、それを助役に手渡して置いたと言ふのであつた。そして最後に彼は豫審判事に對して「アゴスティニ」のことをお考へ下さい、彼は彼の記名を手紙に僞造したものは殺害すると脅嚇してゐましたと言ひ、暗に莫然と加害者はアゴスティニかも知れない、彼は記名僞造犯人として大佐を疑つてゐたらしいからと言ふ意を述べた。無賴漢の習慣やしきたりから推せば、かゝる血生臭い復讐の動機は容易に判るのであつた。

デラ・レビア大佐の死後五日を經てアゴスティニは一隊の兵士の襲撃を受け、絶望的反抗の後に殺された。彼の死骸からは、コロンバよりの一通の書面が發見された。手紙には、彼は果して、今、彼が罪を被せられてゐる殺害（大佐殺し）の眞犯人なりや否やを明かに知らせて貰ひたいと言ふ懇願の意が認めてあつた。

アゴスティニからは返事が出してなかつたので、一般の意見は、いくらアゴスティニだつて、貴嬢の阿父さんを殺したのは私ですと名乘る勇氣は出なかつたのだらうと言ふことになつた。然し、それと同時にアゴスティニの性格をよく知つてゐると言ふ或る者は、口を祕めて、「眞に彼が大佐を殺したのなら、その自慢をしさうなものだがなあ。」と、言つた。

今一人の無賴漢ブランドラチオなるものは一書をコロンバに提して、自分は自分の名譽にかけて誓ふが、アゴスティニは斷じて大佐殺しの犯人ではないと言ふ旨を述べた、が、その證據として、彼が

述べて居る唯一の理由は、「アゴスティニは、僞筆犯人なりとして大佐を疑ひ居る旨を語りしことなし。」と、言ふのであつた。

この事件の結末は、バリチニ村長にお構ひなしと言ふことになつた。おまけに豫審判事は村長は誠によく機宜に適した處置をとつたと言つて賞めた。そこで村長は大佐と係爭中だつた水流の利權返還の請求問題を、紳士的に願ひ下げにして、彼の青天白日の榮冠を追加した。

島の習慣に從つて、コロンバは一編の挽歌を作つて、父の亡き骸の前に立つて、父の知人の面前で朗吟した。その歌の中で、彼女はバリチニ一家に對する彼女の一切の憎惡をぶちまけて、バリチニこそは父の加害者なりと糾明措くなく、言辭に絹を蔽はずに述べて、長兄の復讐を以てバ一家を脅かして置いて詩句を結んだ。この挽歌は口から口へと島全體に傳へられた。リディア孃が、舵手の唄ふのを聞いた歌もこれであつた。

當時佛蘭西の北方に勤務してゐたオルソは父變死の通知を受け取ると、歸省の請暇をしたが許可にならなかつた。彼は、妹の手紙を讀んだ初めの頃はバリチニが眞犯人だと思つたが、後に審判調書竝びに判事個人よりの書面に接してみて、アゴスティニが單獨犯人だと、かなり深く信ずるやうになつた。

三ケ月め毎に彼はコロンバから手紙を貰つたべたて、來た。彼は自ら穩健なる判斷を持つてゐると信じてゐながらも、妹の手紙を見るとコルシカ人の血が湧き立つて、往々にして妹の意見に共鳴することがあつた。でも、妹に手紙を書く時にはお前さんの引證するところは事實に根底を置いてゐないから信用しがたいと書いてやつた。彼はまた彼女に、これは無駄に了つたが、今後はこの問題に就ての手紙は絕禁すと言ふ意味を述べてやつたことすらあつた。

かうして二年が經つた。その終りの頃に彼は半給にさせられた。彼は歸國を決心した。これは自分では無罪だと思つてゐる人々に復讐の刃を加へようと言ふ考からでは毛頭無かつた。たゞ、相當なところに妹を緣付けたかつたのだ。また少しばかりの遺產たる土地が、自分の大陸生活を許すに足るものであつたなら、それを賣り拂はうと言ふ積りからであつた。

七

妹が訪ねて來たので、オルソは懷しい鄕家があつたことを平常より力强く思ひ出したものか、それとも妹の着物や態度の鄙びてゐるのが、洗練のかゝつた知人達の手前きまり惡く思つたものか、彼は翌日はアジャッチオを去つてピエトラネラの故鄕へ歸るつもりだと言つた。

然し彼はそれと同時に、大佐がバスチアへ行く途中、是非とも自分の山家へ立ち寄つてくれるやうにと約束をさせ、自分がこんなに急に立ち去るやうになつた償ひとしては、吃度大佐に鹿や雉や野猪その他の獲物をレコード破りにうんと澤山射たせて上げるやうに手引をしますと言つた。

彼の出立の前日には例のやうに狩獵に行くことは止めにして、オルソは海岸の散歩をほのめかした。で、彼の腕をリディアに借しながら、二人で自由に話すことが出來た。コロンバは買物がしたいと言つて町へ行つたし、大佐は絕えず二人から離れて鷗や鰹鳥を射ちに行つた。大佐と逢ふ村人どもは、あんなケチな鳥を射つのに貴重な火藥を使用するものが何處の世界にあるものかと言つた風に呆れてしまつて、大佐の心持を諒解することが出來なかつたが、二人の目には入らなかつた。

二人は希臘人の敎會へ通ずる路を歩いた、そこは灣内の絕景を見下し得る所であつたが、

「リディアさん。」と、オルソは言つた。二人は暫らくの間沈默してゐたから、少々それが氣苦勞になつた。

「どうか妹に對するお考を明らさまに仰しやつて下さい。」

「私、あのお方大好き。」と、リディアは答へて、

「貴方よりはまだ好き。」と、ニコリとして、

「ほんたうにコルシカ魂のお孃さんですわ。そこへ行くと貴方は文明人になり過ぎた野蠻人！」

「文明人になり過ぎた！　ほんたうです。ですがねえ、私にも似合はず、この島へ一足履み入れると同時にまた〳〵野蠻人に後戻りをして行くやうに自分では感じてゐます。無限の恐ろしい考が私を惱ませ、苦しめます。私は自分をあそこの山の蔭に埋める前に、貴方と少しばかり打明けてお話をせねばなりません。」

「ねえ貴方、しつかりなすつて下さいまし　お妹さんをちとまねて御覽なさいよ、お妹さんは自分の煩悶を打明けないで凝乎と我慢していらつしやるではありませんか？」

「あゝ！　妹に欺されてはいけません。妹は本心を『打明けてゐない』のだと言ふことを信じて下さらねばなりません！　なるほど妹はまだ一言も言ひません、しかし私は彼女の表情の中から、彼女が私に何を期待してゐるかつていことが分つてゐます。」

「おや、では何を期待していらつしやるのです。」

「おゝ！　なんでもない……貴女の阿父樣から頂戴した鐵砲が、鷗鵠を射つ如く人間を射つことが出來るかどうか私にためしてみろと言ふことの以外の何物でもない……」

「なんてまあ、無法な考へ！　貴方はお妹さんからまだ何もお話がないと言つて置きながら、そのお妹さんから何とも仰しやりもしない間題まで、もうそんな風にお考へになつてゐるんですか？　ほんたうに貴方は恐ろしいお方！」

「でも妹が仇討のことを考へてゐないものなら、妹は私共の父のことを直ぐに私に打明ける筈です。それを言つてゐないぢやありませんか。妹は自分で認めてゐる人の名——それは間違つてゐることは私は知つてゐます——を、父の加害者だと話すべきでせう。だが、たゞの一言もそれを言ひません。御承知のやうに吾々コルシカ人はなか〳〵狡猾な人種です。妹はまだ完全に私が彼女の親指

の下に服してゐる（まるめてねること）のでないことをちやんと知つてゐます。それから私に逃げ出されたくないと言ふ希望を持つてゐます。だが一度私をのつぴきならぬ懸崖淵まで伴れ出して置いたとなると、そこで私の頭がふらつくやうなことがあつたら、忽ち彼女は私を谷底へ突き落してしまふでせう。」

オルソは次ぎにリディアに父の臨終間際の二三の細かな事情を話し、また重だつた證據から考へると、下手人はアゴスティニであつたものと自分は考へてゐると言つた。

「だが何と言つたつてコロンバを納得させることは出來ません。」と、彼は話を續けて、

「私はそのことを妹の最近の手紙で知りました。彼女はバリチニ一家の殺害を天に誓つてゐます。そして、ネヴィルさん……私は貴女に滿腔の信頼を置いてゐますからお話いたしますがね……もしも彼女が、一家の復讐はその家長たるもの、責任で、それはこの私が實行すべきものであり、私の名譽もそこにあると言ふ、無教育から起る野蠻な偏見を固く守つてゐなかつたら……バリチニ一家は、今頃はもう、私以外の他の者によつてみな殺しにされてゐたでせう。」

「まあ、あきれた。」と、リディアは言つて、

「貴方はお妹さんの讒言をしていらつしやる。」

「さうではないのです！　貴女が御自身で仰しやつたやうに——妹は生粋のコルシカ魂の所有者です。妹の考へることは、卽ちコルシカ人全體の考へなんです。貴女は昨日私が何故憂鬱であつたかお判りになりませんでしたか？」

「判りませんでした。ですけど、昨今どうかすると憂鬱らしくつていらつしやる時はありますのね。お近づきになり初めた頃は、もつと快活でいらつしやいました。」

「それは御免下さい。でも、昨日の朝の間は平日よりはずつと快活で愉快だつたのです。貴女は妹に對して親切で寛大にしてやつて下さいました！　で、昨日は大佐と私とは端艇で狩獵から歸つて來ました。ところが、船頭が下司つぽい訛りで私に申しました、『若さん大した獲物でしたのう。ぢやが、オルランデュチヨ・バリチニさんは、若さんよりはもつと立派に射つてゞごわすぞ！』と。」

「あら、そのお言葉の何處がそんなに恐ろしいのでせう。貴方は御自身で素的な獵師にでもなりたいなんて考へていらつしやるの？」

「おゝ！　貴女は判つて下さらない。船頭は、私には村長の息子を討つ勇氣はあるまいとあてこすつたんです。」

「まあ、デラ・レビアさん。貴方は私を怖がらせてくれるのねえ。なんだか、この島には熱病菌がある上にまだ發狂菌までがあるやうですわ。いゝ案梅に私共はもう直ぐ島を去りますから、構はないやうなものゝ。」

「だけど、私の鄕里のピエトラネラへ一度おいでになるまではお歸りになつてはいけません。それは貴女が妹とお約束になつたことですから。」

「私共がその約束を破るとお思ひになつていらつしやるの？　もし破つたら、きつと私共の頭の上に

は恐ろしい復讐が來ます！」

「貴女は貴女の阿父さんが先日私共にお話しになつた話――印度人は役人共が要求をいれてくれないと、絶食して餓死してやると言つて脅かすつて言ふ話――をお記憶になつてゐますか？」

「だとすると、私共が違約をすると貴方は餓死なさるのね。さあ、どうだかしら、それは一日やそこらは絶食もなさるでせうよ、するつていとコロンバさんが心配して、おいしいチーズかなにかを貴方のところへ作つて來てお上げになる、そこで貴方は絶食放棄！」

「貴女の冷評は實に殘酷だ！　ネヴィルさん。どうか私だけは慰つてやつて下さい。御承知の通りに私は島へ歸ると孤獨なんです。貴女もおつしやつて下さつたですが、貴女だけが、私が氣狂になるのを止めて下さる。貴女は私の守りの天使です。それを今になつて……」

「今こそ。」と、リディアは眞面目な調子になつて、

「その動搖し易い貴方の心を建て直すために、男子としてと、軍人としての貴方の名譽がお有りになるのがお役に立つのです、それに……」と、彼女は路傍の花を摘むために、あちらを向いて、

「何かのお役に立てるものでしたら、貴方の守りの女神があるつて、御記憶もおありになりますわねえ……」

「おゝ！　ネヴィルさん、貴方が私に僅かなりとも御同情下さることを、私が本當に考へる身になつてゐられるのなら！」

「よく訊いて頂戴ね、デラ・レビアさん。」とリディアはすこしく感動して、

「貴方はお坊ちやんですから、私、貴女をお坊ちやん扱ひにしてよ。私が小さい時にねえ、阿母さんが、私の熱望してゐる綺麗な頸飾を一つ下すつたの。だけど、その時に阿母さんは仰しやるのに、『お前さんは佛蘭西語がよく分つてゐないのですから、この頸飾りをかける度にそのことを思ひ出すのですよ』と、ねえ。さあ、かう言ひきかされると、頸飾りは餘つぽど魅力が減つてしまひました。なんだか責め道具のやうに感ぜられました。ですけど、私はそれを懸けました。そして佛蘭西語を勉強しました。それから、この指輪を御覽なさい、これはエジプトの方尖塔の中から發見した甲蟲形寶石なんです。異樣な恰好をしてゐるから、貴方は德利だとお思ひになるでせうけれど、これで『人生』を意味してゐるのです。英吉利には、この象形文字は大層正確な意味を表してゐると解釋してゐる人が澤山あります。その脇に盾があります。槍を持つてゐる手が着いてゐます。それの意味は『爭鬪』『戰爭』です。好い趣向ぢやありませんか、『人生は爭鬪なり』になります。何も私が巧妙に象形文字を飜譯するなんてお考へにならなくていゝんですよ。或る博學なる先生が、私にさう言つて敎へて下すつたんです。さあ、この指輪を貴方にさし上げます。もし貴方に何かコルシカ風な惡いお考へも起つて來た時には、どうか私からのこのお守りを御覽になつて下さい。そして貴方の良心と惡い考へとの爭鬪が起きた時には、貴方がその心の戰ひに打勝たねばならないことをお考へ下さい……然し、本當に私は貴方にお說敎をしてしまつたわねえ！」

「あなたのことを思ひ出します。ネヴィルさん、それから自分で心に言ひます……」

「貴方が絞罪に處せられなすつたと聞いたら、がつかりしてしまふ一人の貴方の友があることを、貴方のお心に仰しやつて下さい。その上、そんなことがあつたら、貴方の優れた御先祖代々も嘸お嘆きになりますでせう。」

と、笑つて、オルソの腕から離れて、父のところへ行つて、

「阿父さん、そんな鳥を射つのは、もうやめにして、ナポレオンの寺小屋だつた洞穴へ一緒に行つて詩でも作りませうよ。」

八

いざお別れとなると、それが僅かの間のことでも、何かしらそこには心ときめくものがある。

オルソと妹のコロンバとは早朝出發しなければならなかつたから、前の晩の内にオルソはリディアに訣別の挨拶をして置いた。これは、オルソの方では、彼女が自分のために讓つてくれて、彼女年來の朝寢坊の癖を破つてくれようとは思はなかつたからであつた。二人の訣別の辭は、嚴肅に、感情的でなく、交された。海岸で話して歸つてから、リディアはオルソに對する同情が強すぎたと思ひ、オルソの方では、また彼女の冷評に、特に彼女の冗談じみた話し振りに、氣を惡くしてゐた。オルソは最初の一時は、彼女の態度には自分に對する愛情の初歩が認められると考へてゐたが、彼女の冗談

によりて、反省してみて、自分なんかは彼女の目から見れば、直ぐに忘れられる普通の知人に過ぎないのだらうと思つた。と、思つてゐると、リディア嬢は大佐と忽々にして朝餐を濟ませて、妹と二人づれで自分の部屋へ入つて來たのだからオルソの驚きは一通りではなかつた。リディアは五時に起きたのである。英吉利婦人で而も寢坊のリディア嬢に、そんな早業を演じさせたとは、オルソ君大いに誇るに足る！

「こんな早朝からお騷がせしまして、何ともお氣の毒です。きつと妹が、私はよく言ひきかせて置いたのですが、それを聞かないで貴方をお起ししたのでせう。定めし私共がお厭でせうねえ、私なんかはもう絞罪になればいゝとお思ひでせう。」

「いゝえ。」と、リディアは言つて、低い聲で、しかも父に聞かせまいとして、伊利太語で、

「昨日の私の心ない冗談のために貴方が怒つていらつしやると思ひましたわ。それから、貴方に私が不親切なる者として考へていたゞいたまゝ出發つてはもらひたくないやうに考へましたの、私は貴方の忠實なる婢女です。ほんたうに貴方がたは、なんて怖いコルシカ人なんです！　さよなら、では、ねえ！　直きにまたお逢ひしますわ。」

と、言つて彼女は自分の手を差し延べた。

オルソは返答の言葉がなくて溜息をついただけであつた。

すると、コロンバは兄に近よつて、窓口へ伴れて行つた。そして彼女の長い被衣の下から何か取り

出してみせて、低い聲で話をした。

「妹が、變な物を、貴方にお贈りしたいと言つてゐますけれど、ネヴィルさん。」と、オルソは言つて、

「尤も吾々コルシカ人には贈物をしようたつて何一つ大したものはありません——愛情以外には……これだけはいくら時が經つても消えません。妹が申しますのに、貴女はこの短劍を珍らしさうに御覽になつてゐたと言ひます。これは私の家には古くから傳はつたものです。恐らく、私が貴方がたとお近づきになる緣をつくつてくれた『伍長』の腰帶には代々挿されたことでせう。妹はこれでも非常に貴重な品だと思つてゐるものですから、貴女に差上げたいが、私が許すかと訊いてゐます。然し、お笑ひ草になりやしないかと思つて、私は妹の願ひを許したものかどうかと迷つてゐます。」

「その短劍は實に見事な短劍でした。ですけれどそれはあなたがたの傳家の寶刀なのですもの。頂かれやしませんわねえ。」

「これは父の短劍ではありませんの。」と、コロンバは熱心に言つて、

「テオドル王様から私の母方の先祖が拜領したのですわ。もしお孃様がお受け下すつたら、私達兄妹はどんなに嬉しいでせう。」

「リディアさん。どうかお納め下さい。王様の短劍ですから輕蔑なさらないで！」

古照物蒐集家にとりて、テオドル王御物とあつては、他の最も有力なる君主の宮殿から出る遺物よ

りは遙かに貴重品である。そこでリディア孃のその短劍に對する囑望はまさに垂涎三尺と言ふところで、孃の頭には、その短劍を聖・ジェームス宮殿たりし自宅の自分の部屋の漆塗りのテーブルの上に飾つた時の效果が早くも描かれてゐた位であつた。

「ですけど。」と、孃は贈物を貰つて內心嬉しくて堪らぬ者が猶ほ躊躇してゐる時のやうに、コロンバを見てニコ〳〵しながら、

「ねえ、コロンバさん、私は……貴女から武裝を取り上げて、この島を旅行をおさせ申すに忍びませんの。」

コロンバ誇らしげに、

「兄が私と一緒に行つてくれます上に、貴女の阿父樣から頂戴した立派な鐵砲があります。お兄さん、あれに裝彈をなすつて？」

リディアは短劍を貰ふことにした。するとコロンバは切つたり突いたりする兇器を友にやると、貰つた方に災難が附いてゆくと言ふ迷信があるのを防ぐために、その「まじなひ」になるやうに支拂ひとしてリディアから二錢もらひたいと言つた。

出發の時刻が來た。オルソはリディアともう一度握手をした。コロンバは孃と接吻した後に、大佐にもその櫻色の脣を持つて行つたので、大佐はこのコルシカ人の禮儀にはすつかり有頂天になつてしまつた。

窓を開けてリディアは兄と妹が馬に跨がるのを見た。コロンバの眼には、これまで嬢が氣附かなかつた底意地の惡さうな喜びが溢れてゐた。この大柄な強健な女が、野蠻な名譽心に熱狂して、さつと一文字に堅く結んだ脣、皮肉な微笑を湛へつゝ、何か呪はれたる遠征にでも出懸けて行くやうな武裝せる青年を拉し去つて行く樣子は、嬢に、オルソの前途を豫言してゐるやうで、それを見てゐると、この青年は自分の魔神に曳かれながら破滅へと旅立つところだといふ風に思はれた。

オルソは馬に乘つた。目を揚げて嬢を見た。嬢の考へてゐることが判つたのか、それとも嬢に最後の訣別を告げるつもりか、彼は頸に懸けた紐に結びつけて置いた、昨日嬢から貰つたエヂプトの指輪を取り上げて接吻した。リディアは紅くなつて身を退いた。二三分してまた窓から首を出すと、山路へ二頭の馬を走らせてゐる兄と妹の後姿が見えた。三十分も經つて、大佐は望遠鏡で、灣の遙か遠い海岸を走つてゆく二人の姿を見せてくれた。幾度となくアジャッチオの町の方を振り顧るのはオルソだと言ふことが判つた。

遂にオルソの姿は沼の蔭に消えた。沼は當時苗床となつてゐた。

リディアは自分の顏を鏡に映すと、それは蒼白になつてゐた。

「あの青年は私をどう思つてゐるのだらう？」と、嬢は獨り言を言つた。

「私はあの人のことに就いてどんな意見を持つだらう？　たゞの旅行友達と言ふに過ぎないのに何故かういつまでも考へてゐるんだらう？　私はすこしもコルシカへ來たの？　おゝ！　私はすこしも

九

オルソは妹を伴れて旅を續けた。馬の歩度が急だつたから、最初の間の二人は話をしなかつた。

あの人なんか愛してはゐない、ゐないとも！　おまけに、そんなことは不可能……そして、あのコロンバ！　私があの挽歌の唄ひ手で、腰に短劍を附けてゐる娘の義姉になるなんて！」

すると、嬢は自分の手にはテオドル王の御物だつた武器をば握つてゐたのに心附いたので、それを衣裝棚の上に投げた。

「コロンバが倫敦の演舞場で踊る！　素的！　素晴らしい人氣役者になる！　大した評判を呼ぶ！……オルソさんは私を愛してゐる、屹度……あの人は小說の中の主人公だ、その波瀾重疊の經歷を私が中止させてしまつた……だが、あの人は本氣でコルシカ流に父の仇討をしようとして、眞劍になつてゐたのかしら？　あの人は小說の主人公と洒落者の中間的存在なのだ、それを私が生一本で純粹な洒落者に作り上げてしまつた——コルシカ仕立ての衣裝よろしき洒落者に！」

嬢は眠らうとして床に身を入れた。しかし眠ることは出來なかつた。

作者は、とは言へ、この上に、嬢の獨り言を書きそへて讀者を煩はすことはよしにします。嬢が、デラ・レビア氏は嬢に對して、過去に於ては何者でもなかつたし、今後も何者でもあり得ない、あり得ないと言つて、それを百度以上も繰り返したと言ふその獨り言を。

しかし、丘のデコボコだらけの嶮しい崖へかゝると、平歩しか出せなくなつたので、二言三言話をした。話は二人が先刻別れた知人のことに就いてゞあつた。コロンバは熱心にネヴィル嬢の美貌と金髪と優雅な態度のことを話した。また、彼女は、大佐はお金持らしいけれど眞實お金持なのか、令嬢は一人娘なのかどうかと訊ねた。

「あの方は好いお嫁さんになるわ。」と、彼女は言つて、

「あのお方のお父様は、貴方が大層お氣に召していらつしやるらしいわ。」

だがオルソは何とも返事をしなかつたので、彼女は續けて言つた。

「往昔は私の家はお金持でした。今だつてこの島では一等れつきとした家柄だわ、領主なんて言ふものは皆駄子ですもの、眞の貴族と言ふのは、『伍長』の家柄の家だけですわ。それから、オルソ、貴方は島でも最も由緒のある『伍長』の後裔だつてことを御存じでせう。知つての通り私達の家は元は山の向ひ側に建てられてゐたのを、内亂のために此方側へ移されたのですわ。私がお兄さんの位置にゐるのなら、ねえ、オルソ、私は少しも躊躇なんかはしないであの大佐に言ふわ、『お嬢さんをお嫁に下さい』つて――(オルソは驚いて眼を揚げた)――そして、令嬢の持參金で、私はファルセッタの森と自宅の下の葡萄畑を買ひ取るわ、それから私は切石で立派な家屋を建てるは、それから私は名君ヘンリイ伯爵の時代にサンブッチオがムール人を多數殺すために出陣した、あの古い塔を一階建て增しししますわ。」

「コロンバ、お前は馬鹿だなあ。」と、オルソは吃驚して答へながら馬を走らせた。

「兄さんは男子ですもの、オルサントン、だから女風情よりは一層よく自身の成すべきことを御存じねえ、しかし、あの英吉利人が、私達の家柄との結婚に反對するやうなら、私、その理由が知りたいわ。英吉利に『伍長家』は有る？　無い？」

長い乘馬の旅を、先づこんな風な會話でまぎらせて、二人はボネオナノ（村名）から程遠からぬ或る村落へ着いた。そこで二人は自分等の家族の一人の知人の家を訪ねて、食事をして一夜を宿つた。そこの家族はコルシカ特有の至れり盡せりの歡待をつくしてくれた。そのもてなしは、これを經驗したものでなくては一寸想像もつかない鄭重さである。朝になると、そこの主人――その人は故デラ・レビア夫人の名附け親に立つた人だ――は二人の邸宅から一里位の範圍のところまで見送つて來て呉れた。

「オルソさん、この森と藪を御覽なさい。」と、その主人は二人と別れ際に言つた。

「この中に驅け込めば、十年は大丈夫知れないで暮らして行けて、警官や憲兵に見つかりつこはありませんぞ。この森はヴィザヴォナの森まで續いとります。だから、ボネオナノ村でも、どこか他の村でも、近村に知り人さえ持つて居れば、食物には缺きませんぞ、あんたは立派な鐵砲を持つてゐなさるの、それは隨分と遠距離が利くぢやらう。おゝ！　大かい銃丸がはまるぢやらう！　こんな素晴らしい鐵砲だつたら野猪よりもつと大した獲物が射ち止められる！」

オルソは、この鐵砲は英吉利製で、遠距離射撃が利くと落ち着いて答へた。それから三人で握手を交して、一人と二人は別れ分れになつた。

この時刻には、二人の旅人はピエトラネラ村に近づいて來て、二人が是非通らねどならない隘路の入口へさしかゝつた。よく見ると、前途にあたつて鐵砲で身固めした七八人の者が居る。その或る者は岩の上に腰を下してゐるし、或る者は草の上に寢そべつてゐる、また、或る者は歩哨に立つた樣子で起立してゐた。彼等の馬は少し離れたところで草を食つてゐた。コロンバは、望遠鏡で暫らく彼等を眺めた。その望遠鏡は、どのコルシカ人でも旅行をする時にはかならず携げてゆく革嚢に納めてあつた。

「私共の仲間ですよゝ」と、彼女は嬉しさうに叫んで、

「ピエルッチオは手紙で言ひ附けた通りに運んで置いて呉れました。」

「どう言ふ連中なのだ？」

「うちの羊飼ひなの。一昨日の晩ピエルッチオから發たせて、お兄さんを護衞して自宅まで行かせるやうにつて、この連中を集めさせたのです。お兄さんは護衞を附けないでは村へ入れやしません。それから、御承知のやうに、バリチニ一家の者はどんなことでも爲ようとすれば出來るのです。」

「コロンバ。」と、オルソは嚴として言つた。

「私はこれまで幾度となく、お前にバリチニ一家のことを言つてくれるなと賴んだぢやないか。私がこんな無賴漢の集團を引伴れて自分の家へ歸るなんて、馬鹿らしくて仕樣がないよ。またお前の企てを私に相談もせずにこんな連中を狩り集めたつていのも不愉快の至りだ。」

「おゝ！　兄さん！　あなたは生國のことをお忘れになつてゐる。あなたの無謀からあなたが危險に向はれるやうなことがあつたら、それを警戒するのは私の役ですわ。私はこれでこれだけのことはして置かねばなりませんのでした。」

この時羊飼ひ共は二人の姿を見つけたので、大急ぎて各々の馬の處へ走り寄ると、ひらりと跨がつて、直ぐさま出迎へようと、馬を飛ばせて坂を驅け下つて來た。

「オルサントン萬歲！」と一人の髯もぢやの頑丈な父爺が叫んだ。彼はこの暑さに、山羊の毛よりも厚いコルシカ綿布製の頭巾附きの外套を一着に及んで、眞白な顎鬚を貯へてゐた。

「お父樣と生き寫しぢや。ずつと大きくて、ずつと強いだけぢや！　や、何とこれはまあ美事な鐵砲ぢやい！　この鐵砲は名の響いた代物ぢやらうな、オルソ。」

「オルサントン萬歲！」と羊飼ひ連中が一聲に叫んで、

「いつかはお歸りになるだらうとは思つてゐましたぜ！」

「あゝ！　オルサントン。」と、陽に燒けた、革のやうな顏をした元氣さうな一人の父爺が言つた。

「お父様がお前様をこゝまで出迎へにござつたのなら、そのお喜びはどんなだつたらうなあ！　懐かしい大旦那だつた！　大旦那があの時に私の言ふことを聞き入れて、ギュディチエの事件を、この私に任せて下さつたら、大旦那は今日こゝへお迎へにおいでになることが出來たんぢや！　だが、好いお方ではあつたんだが、私の言ふことを聞き入れて下さらなかつた。今となつてみれば私の言つた通りぢやつた！」

「えゝわい。」と、先きの父爺が言葉をいれて、

「ギュディチエはこゝ暫らく延期してやつてあるだけぢや！」

「萬歳！　オルサントン！」と言ふ吶聲につれて、今度は十二發の祝砲が放なたれた。

オルソはすつかり機嫌を損じたまま、馬上のかながら彼を中心にむらがりたかつて彼と握手を求めたので暫らく自分の言ふことを彼等の耳へ入れることも出來なかつた。遂に彼は分隊で指揮をしてゐる時、兵卒を譴責したり營倉入りを申し渡したりした時にとつたやうな態度となつて、一同に言つた。

「諸君、僕は諸君が僕に示してくれた愛情と、生前の父に對して示されたる愛情とは厚く感謝する。然し、決して、否、寸毫たりとも、諸君の內どなたからも助言がましいことは言つてもらひたいと望んでゐない。僕は自分の成すべきことは知つてゐるつもりである。」

「御尤もぢや！　お道理ぢや！」と、羊飼ひ共は叫んだ。

「然しあなたは私共があなたの味方だと承知して下さらなくてはいかん。」

「然うだ。それはよく承知してゐます。だが、今はどなたからもお力を借らなくてよろしい。僕の家を脅やかしてゐる危險は少しもない。故に諸君は廻り道をして、それぞれの係りの羊の方へ向つて行つてくれ給へ。僕はピエトラへ通じてゐる道を知つてゐます。案內人の必要はありません。」

「何も怖がることはねえですよ、オルサントン。」と、父爺は言つて、

「奴等は今日は姿を見せようともしません。二十日鼠と言ふやつは牡猫が歸つて來ると穴へもぐり込みますぢや。」

「お前が牡猫だらう、白髯父爺さん！　お前さんの名は何とか言つたなあ？」

「あれ！　お若さんはこの私を覺えて居ない？　この私ぢや、よく私の性惡の騾馬の尻に乘せて上げたぢやないか！　ポロ・グリフォを思ひ出しませんかな。それ、古くからぞつこんデラ・レビア家に忠義をつくしてゐる者ぢや。一寸一言仰しやつて下さるなり、それとも貴方のその鐵砲が鳴りさへすれば、私のこの火繩銃、これは私同樣古いには古いが、直ぐにまた鳴りますぞ。お力にしてやつて下さい、オルサントン。」

「おゝ！　よろしい、よろしい！　然し、賴むんだから、今日のところはあちらへ行つて呉れ給へ、そして僕等を進ませてくれ給へ！」

到頭羊飼達は二人を離れて村の方へ驅け出した。然し、彼等は屢々路の小高い處に止まつて、何か

伏兵でも居ては大變と見きはめてでもゐるやうであつた。彼等は充分オルソや妹の近くにゐるやうにして、いざと言ふ場合には、いつでも二人の救護に來られる位置にゐた。それからグリフォ父爺は仲間の者に言つた。

「私にはわかつたぞ、わかつたぞ。若旦那は自分で爲ようと思つとることは仰しやらないが、成さるのは成さるのだ。全く親父樣生き寫しだ。ほう！　お若さんは誰人にも怨恨を持つてゐないと仰しやる！　お若さんは一切萬事を認めないんだ！　素的だ！　だが、私は無果樹の實と村長の獸皮一枚の交換だつてしねえぞ、一ケ月經たぬ間に村長の獸皮は鐵砲玉で穴が開いてらあ！」

こんな具合で、捜索隊の後から、デラ・レビア家の後裔は村へ入つて、先祖代々の「伍長」の邸宅へ着いた。長い間自分等の頭目を失つてゐた家の子郎黨共は群になつて集まつて來てオルソに挨拶をした。村の住民で中立の位置にゐる者は家の戸口に立つてオルソが通るのを見てゐた。バリチニ家の郎黨共は家の中に引籠つて、戸の隙間から覗いてゐた。

ピエトラネラ村はコルシカの總ゆる村の如く雜然と建てられてゐた。本當の市街を見たいのなら、カルヂェーズまで行かねばならない。（そこは千七百六十八年に島司ド・マルブーフの建設したところである）どの家も不規則に散亂してゐて、軒竝を揃へようなんて考へたこともないと言つた調子だ。それが小さな岡――よりは寧ろ――の階段の一地點――を占めてゐた。村の略ぼ中央に當つて巨大な菩提樹の樹が一本立つてゐて、その傍には御影石の水槽があり、近くの泉から木管で水を送つてゐた。この頗る有益なる建物はデラ・レビア家とバリチニ家の共同出費によつて建造せられた。然し讀者諸君がこの美擧によつて往昔はこの兩家が親睦なる間柄であつた證據だとお思ひになつたら大間違ひです。事實はその反對で、これこそ兩家反目嫉視の證據になります。

嘗てデラ・レビア大佐が噴水建設の目的で少額の寄附金を村會に提出しました。バリチニ辯護士はこれを聞くと同額の寄附金をした。この競爭のお蔭でピエトラネラには飲用水が出來た！

樫の樹と噴水の周圍に人が廣場と呼んでゐる空地があつて、夕方になると村の閑人どもが集まる。時に彼等は蹲くまつてカルタを取る。この廣場の兩端に、御影石と片石で造つた、幅よりも丈の方がずつと高い建物が見える。これがデラ・レビア家とバリチニ家の對抗を表はしてゐる「塔」である。二つの塔は樣式が同一、高さが同一で、それによりて兩家が孰らか一方へ軍配を揚げるまでは永久に續くことが見られた。

ここで一寸「塔」なる言葉の說明をさせていたゞきたい。

それは高さ約四十尺の眞四角な建物で、よその國ならさしむき鳩舍と言はれるところだ。小さな入口が地面から八尺の高さのところにあつて、急勾配の階段を攀ぢてそれに達する。入口の戸の上に窓が一つ、窓の下に露臺とも張出し欄杆ともつかぬものが附いてゐて、そこから見下すと、いやな來訪者でもあつた時には重いものを落しさえすれば、造作なくそいつの頭を壓し潰ぶしてしまへさうだ。窓と戸の中間に二つのやゝ荒つ削りの紋地が見える。紋地の一つには昔時はジェノアの十字架を

示してゐたが、今日ではみんな磨滅して考古學者でもなければわかりかねる。一方の紋地には塔の所有者の紋を彫つてゐる。これに附け足して、裝飾の考案の完全を期せんとならば、紋地と窓框の上に三四發の彈痕でも加へると、コルシカ島の中世紀に於ける封建時代の家なるものがはつきりと知られて來る。私は書き落したが「塔」とその所有者の邸宅の部屋とは相接してゐるのであるから、屢々廊下傳ひに連絡がとられる。

デラ・レビア家の塔と邸宅とはピエトラネラ村の廣場の北側を占め、バリチニ家の塔と邸宅とは反對の南側を占めてゐる。北側の塔から噴水までの廣場がデラ・レビア家の遊歩地で、南側の塔から噴水までの廣場がバリチニ家の遊歩地となつてしまつた。大佐夫人の埋葬の後は兩家の一種の默契によつて、雙方の家族は一人だつて反對側の廣場へ足を入れたものはなかつた。

オルソは遠廻りするのを避けんがために、村長の家の前を通らうとした。すると妹は萬一の危險を戒めて、廣場を通り貫けなくつても自分の家へ行けるやうになつてゐる、狹い路を通ることにしようと言つた。

「何故そんな面倒なことをせにやならないのかい?」と、オルソは訊いて、

「廣場はこの村のどの人に對しても共有物になつてるのぢやないか?」と、自分の馬に拍車をうつて驅けぬけた。

「天晴れ!」と、コロンバは呟いて、

「お父樣、お父樣のお怨みは晴らされます!」

廣場まで來ると、コロンバは兄とバリチニ家との中間に馬を乘り入れて、絕えず敵の家の窓々を見守つた。彼女は最近にこの家を見てから後に敵が防禦工事を施してゐるのを知つた。窓の下の部分を防ぐために、丸太を積み重ね、その丸太の間には銃眼を開けた。敵の襲撃を受けさうに感じた時には、かう言ふ防禦工事を作つて置くと、丸太のお蔭で、一方には援護を受けながら敵を攻撃することが出來るのである。

「卑怯者!」と、コロンバは言つた。

「御覽なさい、阿兄樣。敵はもう用心し始めてこの家へこんな防禦工事をしてゐます。しかし、いつかは早晩外へ出て來なけりやならないでせう!」

扨て、この廣場の南側にあたつて、オルソが出現して來たことは、このピエトラネラ全村に大きな感動をひき起した。彼こそは大膽不敵な面魂の所有者であらうと考へられた。その晩の樫の木の下に集まつた、敵味方どちらにも最屓の無い連中は果てしなく語り、休みなしの註釋をふりまはした。

その一二は——

「バリチニの息子達がまだ歸つて來てゐなかつたのは幸運だつた。あの息子達は阿父さんの辯護士よりはずつと短氣だからなあ、親代々の敵の者に、あんな不敵なまねをせられながら、みすみす自分の土地を通すやうなことはしやしないだらう、屹度、何かひどい目にあはせて代償を取つただらう。」

「私の言ふことを聞かねえかつ。」と、村の豫言者と言はれる一人の老人が言つた。
「私は今日コロンバの顏をつく〳〵見たが、彼娘は何かしら考へてゐる。私は空中で火藥の臭ひがするのを感じてゐる。近々の內にこのピエトラでは肉が安くなるぜ。」

十

オソルはごく幼い時に家庭を去つたから、父親に親しむ暇は餘り無かつたのである。十五歲の時にピサの幼年學校へ入り、それを卒業すると、サン・シアン・ド・ヴィエンの麾下で歐羅巴中を驅けめぐつてゐた。そんなことで歐洲では稀に父に逢つたばかりであつた。が、一千八百十五年になると、父が聯隊長を勤めてゐる聯隊に、自分も勤務することゝなつた。父の聯隊長は非常に嚴格な性質であつたから、自分の息子と他の若い士官との間に少しも區別を設けないばかりか、息子には却つて嚴しい位の取り扱ひをした。

父の記憶はちやんと二種類に分れてゐた。

先づピエトラネラの家庭に於ける時の父を思ひ浮べると、父の洋刀を自分に渡してくれたこと、或日獵から歸つて來て、鐵砲の裝藥を解かせてくれたこと、まるで子供だつた自分を家族の一員並に食事の席につけてくれたこと。

次ぎはデラ・レビア大佐としての父の記憶だが、大佐は自分を不規律だと言つてよく處罰した。また、一度だけ、カトル・ブラ（白耳義の一村落。）の戰ひの時に大佐は言つた。

「よく出來た、オルソ。だが氣を注けなさいよ。」

それは兎も角として、かう言ふ最後の記憶は彼の心にピエトラネラの村のことを思ひ出させる役にはたゝないのだ。

幼時見なれた場所の眺めだとか、非常に愛してゐた母が使ひ古した家の中の品物だとか——かう言つたものだけが——甘い、然して、痛ましい感情を以つて彼の心をかき亂した。

すると、また、彼を待ち受けてゐる、目に見えない物と一緒になつてゐる暗い未來、妹がしきりに煽動する漠然たる不安、特に、ネヴィル嬢がこの家庭を訪問すると言ふのだが、それはこんなに小さくて、貧弱であつて、贅澤になれた人には頗る不向きなのだ。それを見た時に、恐らく嬢は見せるであらう輕蔑——こんなやうな考へが彼の頭痛の種になつて彼を失望させた。

彼は、父が生前使ひならして、それに腰掛けていつも食卓の主宰者を勤めた、大きな黑い樫の木の椅子で晚餐に向つた。彼はコロンバが自分と食事を共にしていゝのか、どうかと躊躇してゐるのを見

てニコリとした。だが、彼は食事中に妹が何も話さなかつたことを感謝した。そして食事が濟むとさつさと引き退つてくれたのも有り難かつた。彼の心は餘り一ぱいになつてゐたから、確かに充分用意を整へてやつて來る妹の攻撃には應へられなかつたのだ。

しかし、コロンバは兄を見逃した。周圍の事情に慣れさせる時間の餘裕を兄に與へたいと思つた。長い間、彼は動かないで、兩手の間に頭を抱へて、過ぎし十五日間の種々の事件を心に繰り返して考へた。バチリニ家に對する彼の態度に就て、村人は彼に何を期待してゐるかと思ふと怖ろしかつた。彼は自分に關してピエトラネラの人々が持つ意見が、既に天下の公論となりつゝあることを知つた。彼は卑怯者と言はれないためには父の復讐を行ふ義務があつた。しかし、誰に復讐を加へるのか？實際あの一家は彼の家の仇敵ではあつたが、それだけのことで加害者と斷定するのは村の人々の野蠻きはまる想像に過ぎない。そこで彼はネヴィル孃が彼に與へたお守りの指輪を眺めて、その彫刻を獨り言に言つてみた——「人生は爭鬪なり」——と。すると、彼は元氣になつて、また獨り言を言つた——「よし、總てに打克つて勝利者にならう」——と。この立派な考へとともに食卓から離れて、ランプを手にして、寢室へ入らうとすると、家の前の戸を叩く者があつた。人が訪ねて來るにしては時刻は大層遲い、しかし、コロンバは女中を伴れて直ぐに出て來た。

「なんでもないの。」と、彼女は戸の方へ急いで行つた。

だが、戸を開ける前に、誰です——と訊いた。

「わたしよ。」

女中は直ぐに戸に嵌つてゐる木の横棒を外すと、コロンバは十歳位の少女を伴れて食堂へ入つて來た。少女は、素足で、襤褸を着てゐて、頭の上に汚れたハンカチーフを捲いてゐたが、そこから烏の羽のやうな黑い亂れ髮の房がのぞいてゐた。彼女は痩せて蒼白い顏をしてゐたが眼には總明な光りをたゝへてゐた。彼女はオルソを見ると、入口のところにきまり惡さうにして立つたまゝ農夫流にお辭儀をした。そして、聲を低くしてコロンバに言つて、殺したての一羽の雉を差出した。

「ありがたう、いゝ娘。」コロンバは言つて、

「叔父さんに有難うと言つて頂戴。叔父さんはお元氣かい？」

「元氣です、そして貴女の仕事をしてゐます。私は叔父さんが遲かつたから早くは來られませんでした。三時間も數で叔父さんを待つてゐましたの。」

「まだ晩御飯はたべてゐないの？」

「えゝ、まだです。食べる暇がなかつたんです。」

「ぢや御飯をお食べなさい。叔父さんバンはあるね？」

「ほんの少しばかり。だけど一番欲しがつてゐるのは火藥がいるのですつて。」

父さんは何よりも火藥ですわ。栗が熟して來てゐるんですから叔

「ではパンと火薬を上げませう。だけど、大切にして使つてお呉れと言つて頂戴ね、火薬は高いんだから。」

「コロンバ、そんなものをお前誰にやるのだい？」と、オルソは佛蘭西語で訊いた。

「この村にゐる、氣の毒な無賴漢にですの。この娘はその姪なんです。」とコロンバも佛蘭西語で答へた。

「もつといゝ方面の贈物をしてやつてはどうだらう。どうせ惡事しか働かない無賴漢風情に何故火薬なんかを呉れてやるのだい？　この島に住む者が無賴の徒に對して持つあの悲しむべき弱點がなかつたら、かう言ふ連中はとつくの昔に島から跡を斷つてゐないわ。」

「コルシカでは無賴漢が一等の惡人とはきまつてゐるんだ。」

「お前が與りたいのならパンは與るがいゝ——パンは誰にでも斷るわけにゆかない——だがあの連中に彈藥を供給するわけにはゆかん。」

「ねえ、阿兄さん。」と、コロンバは眞面目になつて、

「貴方はこの家の御主人ですから家の中の一切は貴方の物です。ですけど、私は堅くあなたに申し上げて置きますが、無賴漢に火藥をやられない位なら、私は私の被衣をこの娘に與つて、それを賣りにゆかせます、まあ、火藥を斷られますか？　そんな位なら一層のこと警官に彼を渡してやつた方がいいのです。彼には彈藥より外に、警官を防ぐに足るものとして何がありますか？」

この話の間、小娘はパンを貪り食べながら、それと同時に、コロンバからオルソへと眼を移して、二人の表情から二人が言つてゐる意味を汲み取るやうに努めてゐた。

「ついでに訊きたいが、お前のその知つてゐる無賴漢は何をしたんだい？　森へ逃げ込んでゐる犯罪とはどう言ふことなんだ？」

「ブランドラチオは何も罪は犯してゐません。」と、コロンバは叫んで、

「彼はジョワ・ノビッチオといふ、彼の入營中の留守の間に彼の父親を暗殺した卑怯者を復讐して殺したんなんです。」

オルソは妹の暴露に對しては、何とも返事をしなかつた。ランプを取り上げて、二階の寢室へ入つた。

コロンバは小娘に食物と火藥を與へ、戸を開けてやつて言つた。

「どうか叔父さんにねえ、オルソの身の上の警戒をお賴みしますつてねえ。」

十一

オルソは長い時間寢つかれなかつたから、コルシカ人としては遲いと思はれる時刻になつて目を覺した。

眞先に彼が氣附いたことは、親代々の仇敵の家が、防禦工事を施し、銃眼を設備してゐることであ

つた。

「お嬢さんは彈丸を鑄るために臺所にいらつしやいます。」と、女中は答へた。これによつてみても、オルソは「戰さ」の影像にぴつたりととつ、かれて居て、それを振り離しては三尺と歩くことが出來なかつたのである。

コロンバは出來たての彈丸に圍繞かれて、椅子に腰掛けてゐながら、鑄型を外した鉛玉の棒を切つてゐた。

「何をしてゐるね？」と、彼は訊いた。

「阿阿さんが大佐から頂戴なすつた鐵砲には彈丸がありません。」と、彼女は柔しく言つて、

「私はあの鐵砲の口徑に當て嵌まる彈丸の鑄型を見つけました。ですから、八十發だけは裝塡して阿兄さんに差し上げられますわ。」

「これは驚いた。彈丸なんて要らない！」

「不意討ちを食つたらどうします、オルサントン。阿兄さんは生國のことも島の人のことも忘れつちまつてゐるのねえ。」

「假令忘れてゐたつて、お前さんは直ぐに思ひ出さしてくれただらうなあ！　時に、二三日前に大きな行李が屆いただらう？」

「え、來てゐます。私、お部屋へ持つて行きませうか？」

「お前が持つ！　なか〳〵お前には持ち上げるのさへ大變だ。どこか近所にあれを運んで呉れる者はないかしら？」

「私、あなたが思つていらつしやるやうな弱蟲ぢやないわ。」と、コロンバは言つて、着物の袖を捲つて、色の白い、圓い、肉附の均整が誠によくとれてゐる腕を見せて、それがまた非凡な腕力があることを示した。

「さあ、サヴェリアや。」と、彼女は女中を呼んで、

「ちよいと手を借してお呉れ。」

オルソが急いで手傳ひに行くと、コロンバはもう重い行李を持ち上げてゐた。

「この行李の中にはね、コロンバ。」と彼は言つた。

「お前に上げるものがあるんだ。但し、その贈物がケチくさくつても、免してくれるね。半給の中尉の財布と言ふものは、いさゝか輕いからなあ！」

かう言ひながら彼は行李を開けて、中から數枚の長衣、肩掛、若い娘が使ふに適する品物二三を取り出した。

「おゝ！　綺麗ですわねえ！」と、コロンバは言つて、

「汚してはいけないから直ぐに仕納つて置きませう。お嫁に行く時のに大切にして置きませう。」そして、悲しげな微笑とともに、

「私、今は丁度喪中ですもの。」と、言ひ足して、兄の手に接吻した。
「あまり長い間の喪服もねえ、コロンバ、どうかすると虚飾になるよ。」
コロンバは答へた——
「私は誓ひました。時が來たら喪服を脱ぐと。」そして窓から首を出してバリチニ家を見た。
「お前がお嫁に行く日までだね？」と、オルソは、妹が言ひたいと思つてゐることを遮けようとして言つた。
「私は三つのことを果した人のところにお嫁に行きます。」と、コロンバは、猶ほも憂鬱げに向ひ側の家を眺めながら言つた。
「お前のやうに美しい者が、コロンバ、まだお嫁に行かないとは、兄さん驚いてるよ。お前さんに結婚を申し込んだのは誰だらう。兄さん、その人から小夜曲を聞かしてもらひたいな。その人はお前のやうな立派な唄ひ手のお氣に入りだと言ふんだから、隨分上手に歌ふだらうなあ。」
「貧しい孤兒なんかを花嫁さんに誰がとりたがるものですか？　おまけに、私の喪服を脱がせてくれる人は、あそこの家の婦人に喪服を着せなければなりません。」
「……妹は正氣の沙汰ではないやうになつて居る……」と、オルソは思つた。この上の議論はよすことにして、妹には何の返事もしてやらなかつた。
「兄さん。」と、コロンバは機嫌をとるやうに言つて、

「私もねえ、阿兄さんに贈物をいたしますわ。あなたが今召していらつしやる服はこの國では立派過ぎます。その立派な上着を着て森へでもお入りになつたら二日も經つとボロ〳〵になります。ネヴィルさんが見えるまで、それを仕納つてお置きにならなくつては、ねえ。」
かう言ひながら彼女は戸棚を開けて、一揃ひの獵師の服を取り出した。
「私は天鵞絨の胴衣をつくりました。それからこれはハイカラさんが被る帽子。私、よほど以前に刺繍をして置きましたの。ちよつと着てみて下さい。」
で兄に着せてみたのである。背後に大きなポケットの附いた、綠色の天鵞絨のだぶ〳〵の上着、また彼の頭には黒い絹と純黒の刺繍とで總房をつけた、先端の尖つた帽子を被らせたのである。
「これは阿父樣の藥筴の帶です。」と、彼女は言つて、
「阿父樣の短劍はその胴衣の衣嚢に入れてあります。ピストルを持つて來て上げませう。」
「この扮裝はまさに芝居に出る無賴漢だ！」
と、オルソはサヴェリアが提し出した鏡をのぞきながら言つた。
「大層お似合ひになりますわ。若旦那樣。」と、女中は答へて、
「ボコナノやバステリカにゐるどんなハイカラさんだつて、先端の尖つた帽子で若旦那のやうに見事なのを被つてゐる人はゐやしません！」
オルソはこの新調の服を着たまゝ晝餐を食べた。食事中彼は妹に彼の行李の中には立派な本があ